

九年第四十二號布告ヲ以テ本條改正ス

スルヲ聽シ。已ムヲ得サルノ事故アリト雖モ。官ニ告ルニ非レハ。外出スルヲ聽サス。
第三十八條 凡侍養子孫ト稱スルハ。年十六以上。成丁ノ者ヲ謂フ。若シ家ニ丁男ナシト雖モ。妻若クハ女。年十六以上ノ者アレハ。留養スルヲ聽サス。

婦女犯罪條例

第二十九條 凡婦女。不孝。姦盜。人命。放火ノ徒罪以上ヲ犯ス者ハ。各律ニ依テ斷決シ。管杖ニ該ル者ハ。日數ニ折シテ。禁獄スル律ヲ改メ。並ニ懲役ニ服ス。其餘ノ罪。收贖ス可キ者。無力ニシテ。贖フ不能ハサル者。懲役百日以下ハ。折半シ。一年以上ハ。五等ヲ減シテ。並ニ懲役ニ服ス。

第四十條 凡華士族ノ婦女。不孝。姦盜。人命。放火ノ罪ヲ犯シ。懲役百日以下ニ該ル者ハ。日數ニ照シテ。鎖錮ニ換ヘ。一年以上ハ。並ニ本刑ヲ加フ。

懲役人又犯罪條例 原徒流人又犯罪律

九年第二十二號布告ヲ以テ本例中。第十五年第二十五號布告ヲ以テ之ヲ改正ス

第四十一條 凡懲役百日以下ノ囚。役限内ニ在リ。又百日以下ノ罪ヲ犯ス者ハ。前犯ノ日數ニ通算シテ。之ヲ科ス。若シ後犯。一年以上ニ該ル者ハ。新ニ後犯ノ罪ヲ全科ス。

第四十二條 凡懲役一年以上ノ囚。役限内ニ在リ。又罪ヲ犯ス者ハ。後犯ノ日數ヲ加役スト雖モ。重キテ。一年以上ノ罪ヲ犯ス者ハ。已ニ役過スル日數ヲ通算シテ。前後四年ニ過ルヲ得ス。若シ五年以上ノ罪ヲ犯ス者ハ。已ニ役過スル日數ヲ問ハス。新ニ後犯ノ罪ヲ全科ス。

第四十三條 凡懲役五年以上ノ囚。重キテ五年以上ノ罪ヲ犯ス者ハ。並ニ。拘役四年ヲ加フ。若シ二年以下ノ罪ヲ犯ス者ハ。後犯ノ年限ヲ折半シテ。加役シ。百日以下ノ罪ヲ犯ス者モ。亦日數ニ照シテ。加役ス。

第四十四條 凡懲役限内。重キテ罪ヲ犯ス者ハ。後犯推問贖役ノ日數ヲ以テ。原役限内ニ算入スルヲ得ス。若シ推問ヲ經テ。無罪ニ歸スル者ハ。仍ホ限内ニ算入ス。

老小癡疾收贖條例

第四十五條 凡人ノ一目ヲ瞎スルハ。人ヲ癡疾ニ致ス律ニ依ルト雖モ。一目ノ人。罪ヲ犯セハ。癡疾ヲ以テ收贖スルヲ得ス。人ノ兩目ヲ瞎スルハ。人ヲ癡疾ニ致ス律ニ依ルト雖モ。盲人。罪ヲ犯セハ。懲役ハ。收贖シテ。死罪ハ。收贖スルヲ聽サス。

第四十六條 凡盲人。及ヒ癡疾者。姦盜ノ罪ヲ犯ス者ハ。律例ニ照シテ。收贖スト雖モ。其強盜強姦ヲ犯ス者ハ。實斷シテ。收贖スルヲ聽サス。

第四十七條 凡老小。及ヒ癡疾者。官ニ在リ。罪ヲ犯スニ。公罪ハ。官吏贖罪罰俸例圖ニ依リ。私罪ハ。官吏犯罪律例ニ依ル。其破廉耻甚ニ係ル者。懲役百日以下ハ。除族ニ止メ。一年以上ハ。仍ホ律ニ依リ。收贖セシム。

第四十八條 凡老小。及ヒ癡疾者。懲役終身以下ヲ犯ス者。例ニ照シテ。收贖スルノ後。再ヒ罪ヲ犯ス者ハ。仍ホ例ニ照シ。收贖スルヲ聽ス。若シ盜罪。賭博等。加等ス可キ。再犯ニ係ル者ハ。但加等ノ罪ヲ宥メ。本罪ヲ實斷シテ。再ヒ收贖スルヲ聽サス。三犯以上ハ。凡人再犯以上ノ例ニ照シテ。加等ス。

犯罪時未老疾條例
第四十九條 凡懲役限内。老疾收贖者。孤獨貧困ニシテ。即時贖フヲ能ハサル者ハ。贖金延期限内。輕役ニ拘服ス。

第五十條 凡懲役一年以上ノ罪犯。病ニ罹リ。休役スル者。一年毎ニ。日數五十日以内ハ。限内ニ算入シ。五十日以外ハ。病愈ルヲ待チ。仍ホ役ヲ償ハシム。百日以下ノ罪犯。日數十分ノ二ハ。算入シ。十分ノ二ニ過ル者ハ。亦償ハシム。若シ數次ニ及フ者ハ。通計合算シテ。乘除ス。其役場ヲ出シテ。責付スル日數ハ。一體ニ限内ニ算入セス。

十年第七十六號布告ヲ以テ本條改正ス

給没贓物條例

第二百七十號ヲ以テ給没贓物條例一條ヲ定ム

第五十一條 凡正贓現在ト稱スルハ。贓ノ手ニ存在シ。及ヒ轉賣シテ。他人ノ手ニ在ル者ヲ謂フ。若シ買取シテ。公商公買ニ由ル者ハ。正贓現在スト雖モ。商買。其價ヲ償ハサレハ。直ニ追徴スルコトヲ得ス。

第五十二條 凡贓物現在シ。及ヒ現在セスト雖モ。事主。本犯ノ口供ヲ審明シ。評價人ニ估計セシム。若シ犯所。遠隔ニシテ。事主ノ口供ヲ審スルニ。便ナラサル者ハ。本犯ノ口供ニ依リ。罪ヲ定ム。

第五十三條 凡盜贓タルコトヲ知ラスト雖モ。買取シテ。公商公買ニ由ラサル者ハ。直ニ追徴スルコトヲ得。其轉賣スル者ハ。仍ホ轉賣セシム。

第五十四條 凡轉賣スル贓物ハ。轉賣セシムト雖モ。若シ轉賣者。死亡。破産等。追徴スルコト能ハサレハ。贓物現在ノ所ヨリ。直ニ追徴スルコトヲ得。其公商公買ニ由ル者ハ。此例ヲ用ヒス。

第五十五條 凡盜犯。正贓。已ニ費用シテ。現在セスト雖モ。賠償ス可キ。資力アル者ハ。必ス追徴シテ。本主ニ給ス。

第五十六條 凡盜贓タルコトヲ知ラスト雖モ。其贓送還頭ニ係ル者ハ。必ス追徴シテ。本主ニ給ス。若シ已ニ費用スル者ハ。追徴スルコト勿レ。

第五十七條 凡盜贓ヲ以テ。物品ヲ買取シ。人ニ餽送スルニ。物品現在スル者ハ。追徴シテ。本主ニ給ス。若シ已ニ費用スル者ハ。追徴スルコト勿レ。

第五十八條 凡盜贓ヲ以テ。替償ニ抵償スル者ハ。債主。情ヲ知ラスト雖モ。仍ホ追徴シテ。本主ニ給ス。若シ已ニ費用スル者ハ。追徴スルコト勿レ。

犯罪自首條例
第五十九條 凡罪ヲ犯シ。人ノ官ニ陳告セント欲スルコトヲ知テ。自首スル者ハ。本罪ニ。一等ヲ減スル

七年司法省第二十號給没贓物條例

律ヲ改メ。減二等ニ從ヒ。官ノ捕獲セント欲スルコトヲ聞テ。自首スル者ハ。本罪ニ。一等ヲ減ス。

第六十條 凡罪ヲ犯シ。事。已ニ告發ヲ經ルト雖モ。本犯。未タ知ラス。及ヒ官罪犯ノ名ヲ知ラスシテ。自首スル者ハ。仍ホ未發自首ト同ク。並ニ。罪ヲ免ス。

第六十一條 凡越獄逃走シテ。自首スル者ハ。止メ加等ス可キ罪ヲ減シテ。本罪ハ。減スルコトヲ聽サス。

第六十二條 凡贓罪ヲ犯シ。人ノ告ント欲スルコトヲ知テ自首シ。贓。徵ス可ラサル者モ。例ニ照シテ。本罪ニ。二等ヲ減ス。

第六十三條 凡首免ヲ與フルノ事ニ因リ。首免ヲ與ヘサル罪ヲ犯シ。自首スル者ハ。因ル所ノ原罪ヲ免シ。止メ首免ヲ與ヘサルノ本罪ヲ科ス。假令ハ。強竊盜ヲ犯シ。因テ人ヲ殺傷スル者ハ。其強竊盜ハ。首免ヲ與フト雖モ。殺傷ハ。謀故闕過失ノ各法ヲ盡スノ類。

第六十四條 凡罪ヲ犯シ。自首スル者。假令ハ。竊盜贓百圓。五十圓ハ。仍ホ現在シ。五十圓ハ。已ニ費用シテ。追徴スルコト能ハサレハ。五十圓ノ贓ニ。二等ヲ減シテ。罪ヲ科ス。其餘ノ贓罪モ。亦之ニ準ス。

第六十五條 凡人ヲ罪ニ誣告シテ。自首スル者ハ。已斷。未斷ヲ分チ。未タ受斷ヲ經サルハ。仍ホ首免ヲ聽シ。已ニ受斷ヲ經ルハ。告誣ノ本罪ヲ科ス。

第六十六條 凡罪ヲ首シ。減免ヲ經ルノ後。再ヒ同罪ヲ犯ス者ハ。減免スルコトヲ聽サス。若シ前後犯罪。各別ナル者ハ。此限ニ在ラス。

第六十七條 凡華士族。罪ヲ犯シ。自首スル者。破廉耻甚ニ係ルト雖モ。本條。自首ヲ聽ス可キ者ハ。一體ニ。罪ヲ免シ。除族スルノ限ニ在ラス。

第六十八條 凡華士族。罪ヲ犯シ。人ノ告ント欲スルコトヲ知テ。自首スル者。本條。自首ヲ聽ス可キ者ハ。罪。減等セスシテ。閔刑ニ處シ。破廉耻甚ヲ以テ論セス。

第六十九條 凡知人欲告而首稱スルハ、名ヲ指テ官ニ告ケ、事已ニ發セント欲スルコトヲ知テ、自首スル者ヲ謂フ。眞ニ罪ヲ悔ル心ナク、事發シ、罪ヲ畏ル、ニ因リ首出ス。故ニ本罪ニ、二等ヲ減ス。聞捕而首稱スルハ、官司、人ヲ差シ、已ニ捕獲セント欲スルコトヲ偵知シテ、自首スル者ヲ謂フ。事機緊急、已ムコトヲ得サルニ出テ、悔懼ノ心、尤モ薄シ。故ニ本罪ニ、一等ヲ減ス。越獄而首稱スルハ、已ニ囚禁セラレテ、越獄逃走シ、自首スル者ヲ謂フ。止テ越獄ノ加等ス可キ罪ヲ免シテ、本罪ハ、減スルコトヲ聽サス。

二罪俱發以重論條例

第七十條 凡罪ヲ犯シ、實斷、贖罪、並發スルニ、罪、各等キ者ハ、一ノ實斷ヲ以テ論ス。若シ贖罪、實斷ヨリ重キ者ハ、重キニ從ヒ、贖罪ニ處ス。士族ノ破廉耻甚ヲ犯ス者ハ、此例ヲ用ヒス。

第七十一條 凡二罪以上、俱ニ發覺スレハ、一ノ重キ者ヲ以テ論シ。各等キハ、一ニ從テ科スト雖モ、其贓物ノ追徵シテ、官ニ入レ、主ニ給シ、若クハ、棄毀器物ノ賠償ス可キ等ハ、各本法ヲ盡ス。

第七十二條 凡二次以上、盜ヲ爲シ、首從ノ贓、並發スル者ハ、首從ノ贓ヲ併セテ、罪、一等ヲ減ス。若シ併セテ、首從ノ本罪ト、仍ホ等キ者ハ、更ニ減セス。假令ハ、從贓、五十圓ナルニ、首從、四十圓ナルハ、之ヲ併セテ、九十圓、懲役三年、一等ヲ減シ、二年半ヲ科ス。若シ首從、百二十圓、懲役十年ニ該ル者、從贓ニ併セテ、罪、仍ホ等キ者ハ、減セスシテ全科ス。

第七十三條 凡二次、盜ヲ爲シ、一次先キニ發シ、已ニ論決ヲ經テ、一次後ニ發シ、及ヒ先キニ審結シテ、贓ヲ盡サ、ル者、論決ノ後、發覺スレハ、俱ニ後發ノ贓ヲ以テ、前贓ニ併セ、罪、加フ可キ無ケレハ、論セス。若シ併セテ、重キ者ハ、更ニ加ヘテ全科ス。

第七十四條 凡罪ヲ犯シ、實斷、收贖、並發スル者ハ、收贖折減法ニ照シテ、重キニ從ヒ、實斷ニ處ス。假令ハ、實斷ノ懲役十日ヲ犯シ、又收贖ノ十年ヲ犯セハ、十年ヨリ、五等ヲ減シテ、懲役二年ニ實斷ス。

實斷ノ五十日ヲ犯シ、又收贖ノ百日ヲ犯セハ、百日ヲ折半シテ、五十日、罪、仍ホ等シ、實斷ノ五十日ニ處スルノ類。

第七十五條 凡華士族、破廉耻甚ノ懲役百日以下ヲ犯シ、又閏刑ノ禁錮一年以上ヲ犯シ、二罪俱發スレハ、一ノ破廉耻甚ヲ以テ、重ト爲シテ論ス。

同僚犯公罪條例

第七十六條 凡府縣官吏ハ、知事、及ヒ令ヲ長官ト爲シ、參事ヲ次官ト爲シ、典事ヲ判官ト爲シ、屬以下ヲ主典ト爲ス。其公罪ヲ犯ス者ハ、此例ニ依リ、遞減シテ罪ヲ科ス。

第七十七條 凡主典、罪囚ノ口供、結案ヲ具題シ、判官、律ニ依テ、刑名ヲ擬斷スルニ、刑名、口供ト、差錯セスト雖モ、覆審シテ、罪ノ當ラサルコトヲ檢舉スレハ、刑名ノ錯ハ、口供ノ誤ニ由ルヲ以テ、罪、但タ所由ノ主典ヲ坐シ、判官ハ、公罪遞減法ヲ用ヒス。

公事失錯

第七十八條 凡人ヲ罪ニ失出スル者ハ、已ニ決放スト雖モ、貼斷スル律ヲ改メ、能ク檢舉スト雖モ、貼斷スルコトヲ用ヒス。仍ホ、失出人罪律ニ依テ之ヲ科ス。

共犯罪分首從條例

第七十九條 凡本條ニ、皆ト言ハスト雖モ、脫籍、越獄、及ヒ犯姦、若クハ、懲役人逃等、身自ラ犯スヲ以テ、罪ヲ得ルニ係ル者ハ、並ニ、首從ヲ分タス。各本科ニ處ス。

第八十條 凡一家人、共ニ寶貨ヲ偽造スル者ハ、一家共犯罪律ニ依リ、止テ尊長ヲ坐シ、卑幼ハ論セス。

親屬相爲容隱條例

第八十一條 凡祖父母ト稱スル者ハ、曾高同シ、孫ト稱スル者ハ、曾玄同シ、嫡孫承祖ハ、父母ト同シ。

第四百三十四號ヲ以テ本條改正九年四月十八號布告ヲ以テ本例廢止

九年第四十八號布告ヲ以テ廢止

子ト稱スル者ハ、男女同シ。

第八十二條 凡異籍ノ親屬、同居同爨シ、若クハ産ヲ破リ、寄食シテ、恩養ヲ受ル者ハ、俱ニ同居親屬ヲ以テ論ス。

加減罪例條例

第八十三條 凡三流、同ク一減ト爲ス律ヲ改メ、懲役三年以下ト同ク、分テ三等ト爲シテ減ス。其二死ノ減法ハ、仍ホ本律ニ依ル。

第八十四條 凡懲役終身ハ、死刑ノ一部ニ準スト雖モ、其加減ノ法、二死ニ通シテ、同ク一減ト爲スヲ得ス。假令ハ、死罪ヲ犯スニ、一等ヲ減スレハ、絞斬ヲ分タス。懲役終身ニ坐ス、若シ本條、加ヘテ死ニ入ル者ハ、改テ一體ニ、懲役終身ニ止ム。其監守常人盜、私借官物、及ヒ雇人盜家長財物者ハ、此限ニ在ラス。

第八十五條 凡罪ヲ犯シ、年ヲ歴テ、發覺スル者ハ、並ニ、舊惡ヲ以テ論シ、舊惡減免例圖ニ照シテ、區處スルコトヲ聽ス。若シ事ノ改正ス可ク、賊ノ追徵ス可キ等ハ、罪ヲ免スト雖モ、仍ホ追究明白シテ、各本法ヲ盡ス。其謀殺ヲ犯ス者ハ、此限ニ在ラス。

再犯加等罪例條例

第八十六條 凡減一等赦前後ニ、盜ヲ犯ス者ハ、赦後ノ賊ヲ以テ、赦前ノ賊ニ併セ、罪、一等ヲ減ス。若シ併セテ、赦後ノ本賊ト、罪、等キ者ハ、減セス。例、首從賊、並發者ト同シ。

第八十七條 凡徒限内ニ逃走シ、外ニ在テ、又罪ヲ犯ス者、徒罪以下、杖笞ニ至ルマテ、並ニ、徒一等ヲ加フル律ヲ改メ、懲役人逃條例ニ依テ科斷ス。

稱同罪條例

第八十八條 凡正犯ノ財ヲ受ケ、故縱スル同罪者、正犯、死ニ至レハ、同罪者ハ、絞ニ處スル律ヲ改メ、

*第二百六十七號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百六十八號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百六十九號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百七十號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百七十一號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百七十二號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百七十三號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百七十四號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百七十五號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百七十六號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百七十七號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百七十八號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百七十九號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年
第二百八十號ヲ以テ再犯加等罪例條例一條制定九年

懲役終身ニ從フ。

第八十九條 凡盜ニ準シテ論スル罪ハ、犯數ニ計ヘス。罪、懲役十年ニ止ル

第九十條 凡詐欺、恐喝、取財等、盜ニ準スル罪、士族ハ、破廉耻甚ヲ以テ論ス。其乘毀器物等、盜ニ準シ、及ヒ枉法ニ準スル罪ハ、破廉耻甚ノ限ニ在ラス。

稱日者以二十四時條例

第九十一條 凡一日ト稱スル者ハ、十二時ヲ以テスル律ヲ改メ、二十四時ト爲シ、一年ト稱スル者ハ、三百六十日ヲ以テスル律ヲ改メ、三百六十五日ト爲シ、閏年ハ、一日ヲ加算シ、半年ト稱スル者ハ、六個月ヲ以テス。

第九十二條 凡年七十以上、十五以下ト稱スル者ハ、生年本年ノ月數ヲ通算シテ、年、七十歲十五歲ニ滿ル者ヲ謂フ。八十以上、十歲以下ト稱スル等モ、亦之ニ準ス。

第九十三條 凡生年ヲ知テ、生月ヲ知ラサル者ハ、生年ヲ以テ、半年ト爲シテ、計算ス。

第九十四條 凡懲役ノ年限ヲ算スル、其斷了、陽曆頒降以前ニ在ル者ハ、名例、一年三百六十日ノ數ヲ以テ放還シ、頒曆以後ニ在ル者ハ、條例三百六十五日ノ數ヲ以テ放還ス。

稱兩者以金兩條例

第九十五條 凡律ニ兩ト稱スル者、改テ圓ト稱ス。

稱等内人條例

第九十六條 凡等内人ト稱スル者ハ、初位以上ヲ謂フ律ヲ改メ、官十五等以上ヲ謂フ。

稱雇人條例

第九十七條 凡官吏華士族ノ家ニ、給侍役使スル男女ヲ、奴婢ト稱シ、卒庶人ノ家ニ、役使スル者ハ、雇人ト稱スル律ヲ改メ、俱ニ、雇人ト稱ス。其各律ニ、分別輕重アル者モ、一體ニ、雇人ノ權衡ニ從ヒ

第三百三十六號參看

十年司法省甲第一號布達發布

科斷ス。若シ但タ奴婢ト單稱シテ。雇人ヲ舉サル者ハ。改正各條ニ依リ科斷ス。
第九十八條 凡勅奏官位ノ執事。及ヒ華族ノ家令扶從ハ。本籍。平民ト雖モ。家長ニ代ル公事ニ係レ
ハ。俱ニ。士族ニ準ス。其私事ニ係ル者ハ。各本籍ヲ以テ處分ス。

斷罪無正條條例

第九十九條 凡律例ニ罪名ナク。令ニ制禁アリ。及ヒ制禁ナキ者。各所犯ノ輕重ヲ量リ。不應爲違令
違式ヲ以テ論シ。情罪重キ者ハ。違制ニ問擬ス。

斷罪依新頒律條例

第一百條 凡例モ。亦頒降ノ日ヨリ始ト爲スト雖モ。若シ事犯。頒例以前ニ在テ。原律罪名輕キ者ハ。仍
本原律ニ依テ定擬ス。

職制律

棄毀官文書條例

第一百一條 凡官廳ノ通行印鑑ヲ遺失シ。及ヒ誤毀スル者ハ。懲役十日。

第一百二條 凡官司ノ密事ヲ漏泄スル者ハ。懲役一年。輕キ者ハ。一等ヲ減ス。

第一百三條 凡官ノ印ヲ棄毀スル者ハ。懲役二年。遺失シ。及ヒ誤毀スル者ハ。懲役百日。院省寮司府縣
ノ印ハ。各二等ヲ減シ。餘ノ印ハ。各五等ヲ減ス。規避スル所アル者ハ。各重キニ從テ論ス。

無故不朝參公座條例

第一百四條

(原書此處七行ノ空録ナリ)

改正私借官物律

第一百五條 凡監臨。主守。監守スル所ノ官ノ財物ヲ。私ニ借用シ。若クハ人ニ轉借シ。及ヒ自己ノ物ヲ
以テ。官物ニ抵換スル者ハ。監守。自盜ト罪同。其監守人ニ非スシテ借用シ。情ヲ知ル者ハ。罪同。知

ラサル者ハ。坐セス。

私借官物條例

第一百六條 凡監臨。主守。監守スル所ノ錢糧ヲ。私ニ借用シ。若クハ人ニ轉借シ。及ヒ之ヲ借ル者。事未
タ發覺セスシテ。完備スル者ハ。止メ犯情ヲ量リテ。不應爲ニ問ヒ。輕重ヲ分ツ。

不覺被盜條例

第一百七條 凡垣牆内ニ在ル。木石等ヲ盜ミ。主守。覺察ニ失スル者ハ。懲役二十日。

戶婚律

欺隱田糧條例

第一百八條 凡稅糧ヲ納ムルニ。限ニ違フテ。完セサル者ハ。明治五年第二百八十五號布令ニ依
テ處分ス

第一百九條 凡田宅版籍ノ文字ヲ變易スル者ハ。懲役一年半。財ヲ得ル者ハ。贓ニ計ヘ。竊盜ニ準シ。重
キニ從テ論ス。

棄毀器物稼穡條例

第一百十條 凡牛馬ヲ失防シテ。田野ノ穀麥ヲ毀損スル者ハ。違式。輕ニ依リ。若シ毀損スル所。贓ニ計
ヘテ重キ者ハ。坐贓ニ依リ。二等ヲ減シ。仍ホ毀損スル所ノ物ヲ。賠償セシム。

第一百十一條 凡故ナク。河防ヲ決潰シ。水柵。石籠ヲ毀損スル者ハ。情ヲ量リテ。不應爲ニ問ヒ。輕重ヲ
分ツ。

立嫡違法條例

第一百十二條 凡子女ヲ棄ル者ハ。父母。養父母ヲ分タス。並ニ。懲役百日。繼父母ハ。一等ヲ加フ。雇ヲ受
ケ棄ル者ハ。懲役九十日。婦女ト雖モ。收贖スルコトヲ聽サス。

七年第百三十四號
布告ヲ以テ一條ヲ
定ム

九年第四十八號布
告ヲ以テ職制律廢
止

九年第七十四號布
告ヲ以テ職制律監
守自盜ノ部ニ編入
ス
十二年司法省丁第三
十二號違令

七年第二十九號布
告ヲ以テ本條刪除

第百十三條 凡財ヲ圖リ。人ノ子女ヲ乞養シテ棄ル者ハ。懲役十年。婦女ト雖モ。收贖スルヲ聽サス。殺ス者ハ。斬。

第百十四條 凡故サラニ。墮胎スル者ハ。懲役百日。情ヲ知テ。藥ヲ賣リ。及ヒ技術ヲ施ス者ハ。同罪。婦女ト雖モ。收贖スルヲ聽サス。

子弟私擅用財條例

第百十五條 凡同居ノ卑幼。尊長ニ由ラスシテ。私擅ニ。家ノ財物ヲ用フル者ハ。子弟私擅用財律ニ依ル。

第百十六條 凡僧尼。師ノ財物ヲ盜ム者ハ。子弟私擅用財律ニ依ル。同居ノ徒弟。相盜ム者ハ。親屬相盜律ニ依リ。凡人ニ。二等ヲ減ス。其各居ニ係ル者ハ。師弟ト雖モ。並ニ凡盜ヲ以テ論ス。

逃亡條例

第百十七條 凡脫籍逃亡シテ。二年以外。復歸セサル者ハ。律ニ依テ。科斷シ。華士族ハ。破廉耻甚ヲ以テ論ス。

第百十八條 凡逃亡シテ。二年以外。復歸シ。及ヒ自首スル者ハ。首免ヲ聽サスト雖モ。平民ハ。贖罪ニ處シ。華士族ハ。族ヲ復シテ。祿ヲ給セス。

第百十九條 凡逃亡スル者。再犯以上ハ。一等ヲ累加シ。罪。懲役一年ニ止ル。

第百二十條 凡官廳ニ。陳告セスシテ。私擅ニ。他管ニ出テ。五十日ヲ過ル者ハ。違令重ニ問フ。

第百二十一條 凡外國ニ逃亡スル者ハ。逃亡罪ニ。二等ヲ加フ。

賊盜律

盜大祀神御物條例

第百二十二條 凡大祀大社ノ神御神寶ヲ盜ム者ハ。皆絞。改テ懲役終身。

第百二十三條 凡伊勢神宮。及ヒ宮中神服ノ神御神寶ヲ盜ム者ハ。例ニ依リ。懲役終身ニ處スル外。官幣。國幣。大社ノ神御神寶ヲ盜ム者ハ。懲役十年。中社ハ。懲役三年。小社ハ。懲役二年半。府縣社ハ。懲役百日。郷社ハ。懲役九十日。贓ニ計ヘ。重キ者ハ。各盜罪ヲ以テ論ス。

盜乘輿服御物條例

第百二十四條 凡乘輿ノ服御物ヲ盜ム者ハ。皆絞。改テ懲役終身。

盜官印條例

第百二十五條 凡私ノ印ヲ盜ム者ハ。懲役七十日。因テ財ヲ得ル者ハ。贓ニ計ヘ各盜罪ヲ以テ。重キニ從テ論ス。

常人盜條例

第百二十六條 凡常人。官ノ財物ヲ盜ム者。二百五十兩以上。絞ニ處スル律ヲ改メ。二百五十圓以上。懲役終身。二百圓以上。絞。

改正強盜律

第百二十七條 凡強盜。兇器ヲ持セス。威力ヲ以テ人ヲ劫シ。財ヲ得サル者ハ。皆懲役二年。財ヲ得ル者ハ。贓ヲ分タスト雖モ。贓ヲ併セ。首從ヲ分タス罪ヲ科ス。人ヲ殺ス者ハ。皆斬。人ヲ傷スル者ハ。皆絞。其殺傷ニ與ラサル者ハ。止メ盜罪ヲ科ス。其兇器ヲ持スル者ハ。財ヲ得スト雖モ。首ハ。絞。從ハ。懲役終身。財ヲ得ル者ハ。皆斬。其財ヲ得スト雖モ。人ヲ殺傷スル者。亦同シ。

其藥酒等ヲ以テ。人ヲ醉迷セシメ。財ヲ圖ル者ハ。不持兇器ヲ以テ論ス。

若シ盜ニ因テ姦スル者ハ。成否ヲ論セス。絞。

不持兇器

十年第七十六號布告ヲ以テ本例刪除

*第二百六十七號ヲ以テ監守盜條例及シテ監守盜條例ヲ制定シ九年第九十一號布告ヲ以テ右二條例ヲ改正シ第九十二號布告ヲ以テ第九十九號ヲ第六條ヲ刪除ス第三十四號例一以テ監守盜條例一十年第二十五號布告ヲ以テ強盜律中改正

五圓以下、懲役二年半
五圓以上、懲役三年
十圓以上、懲役五年
十五圓以上、懲役七年
二十圓以上、懲役十年
三十圓以上、懲役終身。○再犯ハ、財ヲ得スト雖モ、懲役終身。

強盜條例

第二百二十八條 凡強盜、未ダ室ニ入り財ヲ搜セス、外ニ在テ瞭望シ、財物ヲ接遞スル者ハ、賊ヲ分チ、分タサルヲ論セス。本犯ニ一等ヲ減ス。其造意者ハ、此限ニ在ラス。

第二百二十九條 凡強盜、脅誘セラレ、畏懼隨行シテ、室ニ入り、賊ヲ分ツ者ハ、本犯ニ二等ヲ減ス。若シ室ニ入ルト雖モ、賊ヲ分タス、及ヒ止タ外ニ在テ瞭望シ、財物ヲ接遞スル者ハ、賊ヲ分チ、分タサルヲ論セス。並ニ二等ヲ減ス。

第二百三十條 凡強盜、未ダ行ハスト雖モ、已ニ途ニ在テ、捕ニ就キ、盜情顯跡アル者、持兇器ハ、懲役三年、不持兇器ハ、懲役百日。

第二百三十一條 凡強竊盜、同居ノ父母兄弟姊妹等、情ヲ知テ、賊ヲ分ツ者ハ、凡人ト同ク、分ツ所ノ賊ヲ計ヘ、竊盜ニ準シ、從ト爲シテ論ス。

第二百三十二條 凡失火、及ヒ破船等ノ難ニ乘シ、財物ヲ竊取スル者ハ、竊盜ヲ以テ論シ、搶奪スル者ハ、強盜ヲ以テ論ス。

第二百三十三條 凡盜犯、門戶牆壁ヲ破壞シ、人ノ覺知スルコトヲ畏懼セサル者ハ、強盜ヲ以テ論シ、若シ火ヲ用ヒ鎖鑰ヲ燬損シ、及ヒ鑿鑿等ヲ以テ、戶壁ヲ穿ツト雖モ、強劫放火ノ情ナキ者ハ、仍ホ竊盜

第二百六十九號ヲ以テ本例中一併ヲ創定ス

ヲ以テ論ス。

劫囚條例

第二百三十四條 凡囚ヲ劫スル者ハ、皆流二等、改テ懲役十年、人ヲ傷シ、及ヒ死囚ヲ劫スル者ハ、皆絞、改テ懲役終身。

竊盜條例

第二百三十五條 凡竊盜、三百圓以上、及ヒ三犯五十圓以上、絞ニ處スル律ヲ改メ、並ニ懲役終身。

第二百三十六條 凡竊盜、再犯、財ヲ得サル者ハ、律ニ依リ、一等ヲ加ヘ、三犯以上、財ヲ得サル者ハ、懲役三年。

第二百三十七條 凡二人以上、共ニ竊盜ヲ爲シ、事主ニ覺逐セラレテ、一人ハ、逃走シ、一人ハ、抗拒スレハ、抗拒スル者ヲ以テ、罪人拒捕律ニ科ス。

第二百三十八條 凡事主、盜犯ヲ捕得シテ、私縱私和スル者ハ、情ヲ量リ、違式輕重ニ問ヒ、贖フコトヲ聽ス。若シ別ニ、財ヲ受ル者ハ、贓ニ計ヘ、枉法ニ準シ、財ヲ過スル人ハ、說事過錢ニ準シ、各重キニ從テ論ス。

第二百三十九條 凡盜贓ヲ以テ、竊ニ事主ニ投還スル者ハ、未得財ヲ以テ論シ、懲役四十日。若シ贓、虧缺スルコトアル者ハ、虧缺スル所ノ數ヲ計ヘ、盜罪ヲ科ス。

盜官私牛馬條例

第二百四十條 凡官私牧場ノ牛馬ヲ盜ム者ハ、律ニ照シテ罪ヲ科シ、懲役十年ニ止ルヲ除ク外、其官ノ廐關ノ牛馬ヲ盜ム者ハ、常人盜ヲ以テ論シ、監守人、自ラ盜ム者ハ、監守盜ヲ以テ論シ、民間廐關ノ牛馬ハ、竊盜ヲ以テ論ス。若シ盜テ殺ス者、官ニ係ルハ、懲役一年、私ニ係ルハ、一等ヲ減ス。贓ニ計ヘ、本罪ヨリ重キ者ハ、前ニ照シ、各盜罪ヲ以テ論シ、一等ヲ加フ。

第二百六十六號及九十九號第七十四號ヲ告テ以テ竊盜條例ヲ定ム

九年第七十四號布告ヲ以テ改正

同上ニ依リ消滅

第四百一十一條 凡官ノ牛馬ヲ故殺スル者ハ、懲役百日。民間ノ牛馬ハ、一等ヲ減ス。若シ贓ニ計ヘ、本罪ヨリ重キ者、官ニ係ルハ、常人盜ニ準シ、私ニ係ルハ、竊盜ニ準シテ論シ。並ニ、罪、懲役十年ニ止ル。
親屬相盜條例

第四百一十二條 凡文武百工技藝ノ人、受業師ノ財物ヲ竊取スル者ハ、竊盜ニ準シテ論シ。罪、懲役十年ニ止ル。其各居ニ係ル者ハ、竊盜ヲ以テ論ス。若シ強奪スル者ハ、凡人強盜ヲ以テ論ス。
改正 雇人盜家長財物律 原奴隸盜家長財物律

第四百一十三條 凡雇人、家長ノ財物ヲ盜ム者ハ、常人盜ヲ以テ論シ。管守者、自ら盜ム者ハ、監守盜ヲ以テ論ス。若シ管守者、私ニ自ラ借用シ、及ヒ人ニ轉借餽送スル者、罪、亦同。

雇人盜家長財物條例

第四百一十四條 凡客屋、倉戶、及ヒ工人、舟子、脚夫、馬丁、車力等、一時雇ヲ受クル者ト雖モ、其寄託スル所ノ財物ヲ盜ムハ、並ニ、管守者ト罪同。
略賣人條例

第四百一十五條 凡人ヲ略賣シテ、雇人ト爲ス者ハ、懲役二年半。其賤辱虐使ヲ受シムル者ハ、爲娼妓律ニ依ル。

第四百一十六條 凡妻ヲ略賣シテ、娼妓ト爲ス者ハ、凡人略賣法ニ依ル。和賣スル者ハ、懲役七十日。

第四百一十七條 凡子孫ヲ略賣シテ、娼妓ト爲ス者ハ、懲役五十日。姪、姪及ヒ外孫ハ、各二等ヲ加フ。

第四百一十八條 凡人ヲ略シテ、自己ノ妻妾雇人ト爲ス者ハ、略賣ト罪同シ。

第四百一十九條 凡人ノ妻ヲ略シテ、他人ノ妻妾ト爲シ、及ヒ自己ノ妻妾ト爲ス者ハ、懲役五年。人ノ妾ヲ略シテ、妻妾ト爲ス者ハ、懲役三年。和誘スル者ハ、各一等ヲ減シ。誘セラル、婦女ハ、各二等ヲ減ス。

第五百十條 凡人ヲ略シテ、外國人ニ賣ル者ハ、成否ヲ論セス。皆懲役十年。因テ人ヲ傷スル者ハ、皆懲役終身。殺ス者ハ、皆斬。共和誘スル者ハ、一等ヲ減シ。誘セラル、人ハ、二等ヲ減ス。若シ子孫ヲ略シテ、外國人ニ賣ル者ハ、懲役一年。和賣スル者ハ、一等ヲ減ス。和略、未タ成ラサル者ハ、和略ノ罪ニ。又一等ヲ減ス。賣ラル、卑幼ハ、和スト雖モ、坐セス。若シ外國人ヲ買フ者ハ、前ニ照シテ、各一等ヲ減ス。

兇徒聚衆條例

第五百一十一條 凡兇徒聚衆ノ從ニシテ、情輕キ者ハ、懲役三年。

第五百一十二條 凡附和隨行シテ、火ヲ放ツ者ハ、從ニシテ火ヲ放ツ者ニ、二等ヲ減シ。懲役十年。其脅誘セラレテ、火ヲ放ツ者ハ、懲役三年。其餘、牆屋ヲ毀ツ者ハ、不應、爲重ニ問フ。其止マ場ニ在テ、勢ヲ助クル者ハ、勿論ノ律ヲ改メ、違令ニ問ヒ、輕重ヲ分チ、贖罪スルコトヲ聽ス。

第五百一十三條 凡衆ヲ聚メ、訟ヲ構ヘ、官ニ強逼スト雖モ、良民ヲ擾害スルニ至ラサル者、首ハ、懲役十年。從ハ、一等ヲ減ス。從ニシテ、情輕キ者ハ、二等ヲ減ス。

第五百一十四條 凡地方官、督撫ニ失シ、民衆ノ騷擾ヲ致シ、及ヒ兇徒衆ヲ聚メテ、潛匿スルコトヲ覺察セ、卻テ他管ニ覺知セララル、者ハ、懲役百日。輕キ者ハ、懲役七十日。

夜無故入人家條例

第五百一十五條 凡黑夜、田野ノ穀麥菜菓ヲ竊取シ、或ハ、白日、人家ニ入り、及ヒ市井田野、人ノ看守スル器物ヲ盜ムニ、事主、看守人、追捕毆打シテ、死ニ至ル者ハ、盜所ヲ離ル、ト、否ト、賊ヲ得ルト、否ト、ヲ問ハス。懲役二年。其已ニ拘獲ニ就クヲ、復タ毆打シ、若クハ、事後毆打シテ、損ニ殺傷スル者、折傷以上ハ、圖毆傷ニ、一等ヲ減ス。若シ盜犯、兇器ヲ持シ、拒捕スルニ、即時拏捕殺死スル者ハ、罪人拒捕律ニ依ル。

九年第四十八號布告ヲ以テ本條廢止

第二百二十七號ヲ以テ盜賊窩主條例ヲ定ム

盜賊窩主條例

第五百五十六條 凡盜賊タルコヲ知テ典賣ノ牙保ヲ爲ス者ハ、典賣スル所ノ數ヲ計ヘ、坐贓ヲ以テ論シ、一等ヲ減ス。若シ別ニ、金ヲ受ル者ハ、竊盜ニ準シ、從ト爲シ、重キニ從テ論ス。

第五百五十七條 凡典舖、盜賊タルコヲ知ラスト雖モ、牙保ナクシテ、典賣スレハ、物ヲ追シテ、本主ニ給ス。若シ牙保、及ヒ回曆ヲ借ス者アレハ、價ヲ償ハシム。其償フコ能ハサル者ハ、直チニ典舖ヨリ追ス。
カヨヒナヤ

第五百五十八條 凡恐喝詐欺、枉法、不枉法ノ贓タルコヲ知テ、受ル者ハ、坐贓ヲ以テ論シ、故買スル者ハ、坐贓ニ、一等ヲ減シ、寄藏スル者ハ、又一等ヲ減ス。知ラサル者ハ、坐セス。

第五百五十九條 凡盜賊タルコヲ知テ、故買スル者、再犯以上ハ、一等ヲ累加シ、罪、懲役三年ニ止ル。其知テ寄藏シ、及ヒ牙保スル者モ、亦並ニ、一等ヲ累加シ、罪、懲役二年半ニ止ル。

改定律例卷一

改定律例卷二目錄

人命律計四十八條

謀殺 五條

謀殺官吏 三條

謀殺祖父母父母 一條

殺死姦夫 四條

殺一家三人 一條

毒藥殺人 一條

鬪毆及故殺 五條

屏去服食 一條

過失殺傷人 二條

毆死有罪妻妾 一條

殺雇人 二條

將屍圖賴 一條

弓銃殺傷人 三條

車馬殺傷人 二條

瘋癲殺人 六條

謀同死 二條

私和人命 一條

移地界內死屍 六條

同行知有謀害一條

圖毆律計二十六條

圖毆七條

宮殿內恐爭一條

毆官吏三條

毆受業師一條

毆家長二條

毆夫一條

毆傷妻妾一條

毆三等親以下尊長二條

毆二等親尊長二條

毆祖父母父母三條

妻妾與夫親屬相毆一條

父祖被毆二條

罵詈律計五條

罵官吏四條

罵祖父母父母一條

訴訟律計三條

誣告一條

干名犯義一條

子孫違教一條

受贓律計四條

官吏受財一條

事後受財一條

以財請求一條

受外國人餽送一條

詐僞律計十四條

詐為官文書一條

對詔上書詐不以實一條

偽造官印一條

偽造寶貨十條

詐稱官一條

犯姦律計九條

犯姦一條

親屬相姦一條

姦家長妻一條

姦部民妻一條

居喪犯姦一條

犯姦條例四條

雜犯律計二十三條

- 賭博 四條
- 失火 五條
- 放火 四條
- 得遺失物 五條
- 違令 二條
- 不應爲 三條
- 捕亡律 計二十條
- 追捕罪人 一條
- 獄囚脫監及反獄逃走 五條
- 懲役人逃 十條
- 主守不覺失囚 三條
- 藏匿罪人 一條
- 斷獄律 計七條
- 與囚金刃 二條
- 出入人罪 二條
- 死囚奏請待報 一條
- 斷罪不當 二條

改定律例 卷二

人命律

謀殺條例

第一百六十條 凡人ヲ殺サント謀リ。未タ行ハスト雖モ。謀狀。顯跡アル者。首ハ。懲役百日。從ハ。懲役五十日。

第一百六十一條 凡謀殺。已行未行ノ罪犯。並ニ。罪。死ニ至ラサル者。處斷シ訖レハ。親屬鄰佑ニ。再犯ノ念ナキコトヲ。保證セシメ。始テ放還スルコトヲ聽ス。若シ保人ナケレハ。獄則ニ照シテ。懲治監ニ入レ。悔過ノ日ヲ待テ。始テ放還スルコトヲ聽ス。

第一百六十二條 凡人ヲ殺サント謀リ。已ニ行フテ。其人。知覺奔逃シ。未タ傷ヲ受ケスト雖モ。失跌。及ヒ墮水等。奔脫ニ因テ。他所ニ死スル者。造意者ハ。懲役十年。從タル者ハ。懲役三年。若シ兇悍ニ迫ラレテ。當時失跌シテ死スル者。造意者ハ。絞。從タル者ハ。懲役十年。

第一百六十三條 凡人ヲ謀殺セント欲シテ。謀ヲ舉ル時。其謀ラル、ノ人。謀機ヲ知覺シテ。卻テ謀者ヲ殺ス者ハ。故殺律ニ依リ。已ニ行フ時ニ臨ミ。卻テ殺ス者ハ。罪人。不拒捕而殺律ニ依リ。殺スノ時ニ臨ミ。卻テ殺ス者ハ。捕吏。格殺律ニ依リ。論スルコト勿レ。

第一百六十四條 凡嬰兒ヲ殺ス者ハ。各等親ニ照シ。謀故殺本條ニ依テ。科斷ス。若シ穩婆。囑託ヲ受テ殺ス者ハ。囑託スル者ト。同罪。

謀殺官吏律 原謀殺本 屬長官律

第一百六十五條 凡勅任官ヲ謀殺スルニ。已ニ行フ者。首ハ。懲役十年。從ハ。懲役七年。已ニ傷スル者。首ハ。斬。從ニシテ。加功スル者ハ。懲役終身。加功セサル者ハ。懲役十年。已ニ殺ス者ハ。皆斬。若シ委任官ヲ謀殺スルニ。已ニ行フ首ハ。懲役七年。從ハ。懲役五年。已ニ傷スル者。首ハ。絞。從ニシテ

加功スル者ハ、懲役終身。加功セサル者ハ、懲役十年。已ニ殺ス者ハ、皆斬。
若シ判任官ヲ謀殺スルニ、已ニ行フ者、首ハ、懲役五年。從ハ、懲役三年。已ニ傷スル者、首ハ、絞。從ニシテ、加功スル者ハ、懲役終身。加功セサル者ハ、懲役十年。已ニ殺ス者ハ、皆斬。

謀殺官吏條例

第百六十六條 凡判任官、勅任官ヲ謀殺スルニ、已ニ行フ者、首ハ、懲役七年。從ハ、懲役五年。已ニ傷スル者、首ハ、絞。從ニシテ、加功スル者ハ、懲役終身。加功セサル者ハ、懲役五年。已ニ殺ス者ハ、皆斬。若シ奏任官ヲ謀殺スルニ、已ニ行フ者、首ハ、懲役五年。從ハ、懲役三年。已ニ傷スル者、首ハ、絞。從ニシテ、加功スル者ハ、懲役終身。加功セサル者ハ、懲役五年。已ニ殺ス者ハ、皆斬。

第百六十七條 凡奏任官、勅任官ヲ謀殺スル者ハ、判任官、奏任官ヲ謀殺スルト、罪同シ。其勅任官、奏任官ヲ謀殺シ、及ヒ奏任官、判任官ヲ謀殺スル者ハ、凡人謀殺ヲ以テ論ス。

謀殺祖父母父母條例

第百六十八條 凡祖父母、父母、及ヒ伯叔父、姑、兄、姊、若クハ外祖父母、夫、ノ祖父母、父母ヲ謀殺スルニ、已ニ行フ者ハ、皆斬ニ處スル律ヲ改メ、皆絞。

殺死姦夫條例

第百六十九條 凡姦夫、自ラ本夫ヲ殺ス者ハ、姦婦、情ヲ知ラスト雖モ、絞。改テ懲役終身。
第百七十條 凡姦婦、自ラ本夫ヲ殺ス者、姦夫、果シテ情ヲ知ラサレハ、止メ姦罪ヲ科ス。

第百七十一條 凡姦婦、過ヲ悔ヒ、拒絶スル後、姦夫、姦好ノ續キ難キヲ憤リ、本夫、及ヒ祖父母、父母ヲ殺死スル者、拒絶ノ證據、明白ナレハ、婦女ハ、止メ姦罪ヲ科ス。
第百七十二條 凡姦夫、姦婦、姦所ニ於テ、本夫ニ撞見セラレ、直ニ脱逃スルニ、本夫、即時逐テ門外ニ至リ殺ス者ハ、姦所ト同シ。若シ姦所、及ヒ即時ニ非スレテ、姦夫ヲ殺傷スル者、審判スルニ、姦情確

實ナレハ、圖殺傷ニ、二等ヲ減ス。止メ姦婦ヲ殺傷スル者、折傷以上ハ、圖殺傷ニ、五等ヲ減ス。姦夫ハ和姦本條ニ依ル。若シ姦情曖昧、確據ナクシテ男婦ヲ殺傷スル者ハ、各謀故圖殺傷本條ニ依ル。

殺一家三人條例

第百七十三條 凡一家ノ死罪ニ非サル、三人以上ヲ殺スト稱スルハ、雇人ト雖モ、同居ニ係ル者、及ヒ同居セスト雖モ、父子兄弟等、至親ニ係ル者、皆是ナリ。

毒藥殺人條例

第百七十四條 凡人ヲ殺スノ心ナシト雖モ、毒藥ヲ用ヒテ、故ラニ、疾苦セシムル者ハ、懲役八十日。

圖毆及故殺條例

第百七十五條 凡圖毆、人ヲ殺ス者ハ、絞。改テ懲役終身。

第百七十六條 凡亂毆シテ、人ヲ殺シ、傷ノ先後輕重ヲ知ラサル者、原謀アレハ、原謀者ヲ、懲役終身ニ處ス。若シ原謀、共ニ毆サレハ、初圖者ヲ懲役終身ニ處シ、原謀者ハ、懲役十年。餘人ハ、並ニ、懲役九十日。

第百七十七條 凡亂毆シテ、人ヲ殺シ、先後輕重ヲ知ラサル者、若クハ、原謀、同夥、共ニ毆テ、各致命、重傷ヲ爲ス者、一人、實ニ罪ヲ畏レテ自盡シ、及ヒ已ニ獄ニ在リ、或ハ、押解中途ニ在リテ、病斃スル者アレハ、一等ヲ減シ、懲役十年ニ處ス。

第百七十八條 凡同謀、共ニ人ヲ毆テ、傷、皆致命ニシテ、即時身死スレハ、後ニ手ヲ下シ、傷ヲ成スコト重キ者ヲ、懲役終身ニ處ス。若シ時日ヲ經テ、身死スルニ至ル者ハ、何傷、死ニ致スコトヲ究明シテ、傷ヲ成スコト重キ者ヲ、懲役終身ニ處ス。若シ原謀、共ニ毆テ、亦致命、重傷ヲ爲スニ係ラハ、原謀者ヲ、懲役終身ニ處ス。

第七十九條 凡人ト爭論鬪毆シテ。臨時殺意ヲ起シ。人ヲ殺ス者ハ。故殺ニ坐ス。若シ爭鬪ノ後。仍ホ餘怒ヲ尋キ。追逐シテ兇殺シ。及ヒ爭鬪ニ因ルニ非スト雖モ。臨時殺意ヲ起シテ殺ス者。預謀ノ顯跡ナキハ。並ニ。故殺ヲ以テ論ス。其傷シテ。死セサル者ハ。仍ホ鬪毆傷ニ依ル。

屏去服食條例

第八十條 凡人ノ服用。飲食ノ物ヲ屏去シ。若クハ。物ヲ以テ。人ノ耳鼻。及ヒ孔竅中ニ置キ。因テ死ニ至ル者ハ。絞。改テ懲役終身。若シ謀故ノ情アル者ハ。各本律ニ依ル。

過失殺傷人條例

第八十一條 凡過失殺傷收贖ハ。官吏。華士族。平民ヲ分タス一體ニ。本圖ニ照シ。追シテ其家ニ給ス。

第八十二條 凡一人。二人ヲ過失殺スル者ハ。例ニ照シ。金八十圓ヲ收贖シテ。均シク二人ニ分給シ。二人。一人ヲ過失殺スル者ハ。金四十圓ヲ二人ニ分給シテ。一人ニ給付ス。一人。二人ヲ傷シ。二人。一人ヲ傷スル者モ。亦此例ニ依ル。

毆死有罪妻妾條例

第八十三條 凡妻妾。夫ノ祖父母。父母ヲ。毆罵スルニ因テ。夫。官ニ告ケス。擅ニ殺ス者ハ。杖九十。改テ懲役一年。其傷スルニ因テ。擅ニ殺ス者ハ。懲役九十日。

改正殺雇人律

第八十四條 凡雇人。死罪ヲ犯スニ。家長。官ニ告ケス。擅ニ殺ス者ハ。懲役八十日。

第八十五條 凡家長。雇人ヲ毆テ。死ニ至ル者ハ。流一等。改テ懲役十年。

將屍圖賴條例

第八十六條 凡雇人。已ニ死スル家長ノ屍ヲ將テ。人ニ圖賴スル者ハ。懲役百日。

改正弓銃殺傷人律

第八十七條 凡故ナク。弓銃砲ヲ放チ。及ヒ劔刃ヲ挺ク者ハ。人ヲ傷セスト雖モ。杖六十。改テ懲役三十日。傷スル者ハ。凡鬪毆傷ヲ以テ論ス。因テ死ニ致ス者ハ。絞。改テ懲役終身。

第八十八條 凡曠野無人ノ地ニ於テ。故ナク。弓銃ヲ放チ。因テ人ヲ殺傷スル者ハ。過失殺傷ヲ以テ論ス。

第八十九條 凡弓銃ヲ放チ。及ヒ劔刃ヲ挺ク者。華士族ハ。破廉耻甚ヲ以テ論スル律ヲ改メ。一體ニ。閏刑ニ處ス。

車馬殺傷人條例

第九十條 凡深山。曠野。猛獸ノ往來スル處ニ於テ。阮奔ヲ穿作シ。及ヒ窩弓ヲ安置シテ。望竿。及ヒ抹肩索ヲ立サル者ハ。懲役四十日。以テ人ヲ傷スル者ハ。鬪毆傷ニ四等ヲ減ス。減シテ本罪ヨリ輕キ者ハ。本罪ニ依テ論シ。死ニ致ス者ハ。懲役三年。仍ホ埋葬金二十五圓ヲ追シテ。死者ノ家ニ給付ス。若シ深山曠野ニ非スシテ。人ヲ殺傷スル者ハ。車馬殺傷人律ニ依ル。

第九十一條 凡窩弓。人ヲ殺ス者。例ニ依リ。罪ヲ科スト雖モ。貧困ニシテ。埋葬金ヲ追スルヲ能ハサルハ。其雇工錢ノ全數ヲ領置シ。食費ヲ除キ。餘ル所ノ雇錢。金二十五圓ニ滿レハ。死者ノ家ニ給シ。仍ホ役限ハ。本法ヲ盡ス。

瘋癲殺人條例

第九十二條 凡瘋癲人。人ヲ殺シ。埋葬金二十五圓ヲ追スル者。改テ。過失殺收贖例ニ照シ。四十圓ヲ追シテ。死者ノ家ニ給付ス。其人ヲ傷スル者ハ。並ニ過失傷收贖例ニ照シ。追シテ傷者ニ給シ。醫藥ノ資ト爲ス。

第九十三條 凡瘋癲人。二命以上ヲ連殺スル者ハ。絞。改テ。鎖錮終身。

第九十四條 凡瘋癲人。祖父母。父母ヲ殺ス者ハ鎖錮終身。

第九十五條 凡瘋癲人。人ヲ殺ス者ハ鎖錮終身ニ處スト雖モ。若シ果シテ痊愈スレハ親屬鄰佑ノ保證ヲ取リ。懲役五年ニ改正シ。限滿テ放還ス。

第九十六條 凡瘋癲人。自殺ヲ致スニ看守人。失察スル者ハ懲役二十日。若シ人ヲ傷スルニ至ラシムル者ハ懲役四十日。

第九十七條 凡瘋癲人。人ヲ殺ス者。孤獨貧困ニシテ親屬ノ保管スル者ナケレハ鎖錮ヲ禁獄ニ換ヘ。埋葬金ヲ追セス。

謀同死條例

第九十八條 凡姦夫。姦婦。同ク謀リ。墮胎スルニ姦婦。身死スル者。姦夫ハ。流三等。改テ懲役三年。

第九十九條 凡姦夫。姦婦。同死ヲ謀リ。傷スト雖モ。人ニ阻救セラレ。未タ死セサル者ハ。鬪毆傷ニ。一等ヲ減ス。

私和人命條例

第一百條 凡家長。人ニ殺サレ。雇人。私和スル者ハ。懲役百日。若シ雇人。人ニ殺サレ。家長。私和スル者ハ。懲役七十日。

移地界内死屍條例

第一百一條 凡墳塚ヲ發掘シテ。棺槨ヲ見ハス者ハ。懲役一年。已ニ開テ。屍ヲ見ハス者ハ。懲役二年。屍ヲ殘毀スル者ハ。懲役五年。

第一百二條 凡地界内ニ。死屍アルヲ。輒ク水中ニ棄ルト雖モ。未タ屍ヲ失サル者ハ。律ニ照シテ。一等ヲ減シ。懲役九十日。

第一百三條 凡子孫ノ死屍ヲ棄ル者ハ。懲役七十日。

第一百四條 凡變死ニ係ル屍ハ。官ノ檢視ヲ經ルニ非レハ。私擅ニ埋葬スルヲ聽サス。違フ者ハ。懲役四十日。

第一百五條 凡人ヲ押解シ。中途ニ在リテ病斃スルヲ。輒ク棄去ル者ハ。移地界内死屍律ニ。一等ヲ加ヘ。懲役八十日。

第一百六條 凡地界内ニ棄兒アリ。及ヒ病ニ因リテ昏倒スルヲ。輒ク他所ニ移ス者ハ。懲役七十日。同行知有謀害條例

第一百七條 凡同行謀害アルヲ知テ。阻當救護セスト雖モ。已ニ害セラル。後首告スル者ハ。其罪ヲ免ス。

鬪毆律

鬪毆條例

第一百八條 凡鬪毆成傷ト稱スルハ。毆ツ所ノ皮膚。色。青赤ニシテ。腫起スル者ヲ謂フ。刀ヲ持シ人ヲ傷スト雖モ。其背柄ヲ以テ。毆チ。刀ヲ用ヒサレハ。仍ホ槌棒ト同ク論ス。

第一百九條 凡鬪毆。髮。方寸以上ヲ抜ク者ハ。懲役四十日。若シ一時昏絶セシムル者ハ。懲役八十日。

第一百十條 凡二人。共ニ人ヲ毆チ。各一目ヲ瞎シ。盲ニ至ラシムルニ。先キニ毆ツ者ハ。癡疾律ニ依リ。懲役二年。後ニ毆ツ者ハ。癡疾律ニ依リ。懲役十年。仍ホ養贍金ヲ。一人ニ分追ス。若シ原謀者アレハ。俱ニ毆ツト。否トヲ問ハス。後ニ毆ツ者ニ。一等ヲ減ス。

第一百十一條 凡婦女ヲ毆チ。墮胎セシムル者ハ。懲役二年。

第一百十二條 凡鬪毆。人ヲ殺スニ。後ニ手ヲ下シテ。理直ナル者ハ。律ニ照シテ。懲役十年ニ科シ。仍ホ事情原諒ス可キ者ハ。又一等ヲ減ス。

第一百十三條 凡鬪毆。後ニ手ヲ下シテ。理直ナル者ハ。減等シテ罪ヲ科シ。仍ホ。養贍。埋葬金兩ヲ追

給スル律ヲ改メ、止メ其罪ヲ科シテ金圓ヲ追セス。
第二百十四條 凡鬪毆、人ヲ傷スルニ、鎌刀、菜刀等ヲ用ヒ、傷輕キ者ハ、懲役七十日。仍ホ輕キ者ハ、三等ヲ減ス。

宮殿内 忍争 條例

第二百十五條 凡皇城門ニ、擅入スルハ者ハ、懲役五十日。宮殿ニ擅入スル者ハ、懲役百日。

毆官吏 條例

第二百十六條 凡勅任官ヲ毆ツ者ハ、懲役五年。傷スル者ハ、懲役十年。折傷以上ハ、絞。
若シ奏任官ヲ毆ツ者ハ、懲役二年。傷スル者ハ、懲役三年。折傷以上ハ、懲役七年。癘疾ハ、絞。

若シ判任官ヲ毆ツ者ハ、懲役二年。傷スル者ハ、懲役三年。折傷以上ハ、懲役七年。癘疾ハ、懲役五年。癘疾ハ、絞。死ニ至ル者ハ、並ニ、斬。

毆官吏 條例

第二百十七條 凡判任官、勅任官ヲ毆ツ者ハ、懲役九十日。傷スル者ハ、懲役一年半。折傷以上ハ、懲役五年。癘疾ハ、絞。若シ奏任官ヲ毆ツ者ハ、懲役七十日。傷スル者ハ、懲役百日。折傷以上ハ、懲役三年。癘疾ハ、懲役十年。癘疾ハ、絞。死ニ至ル者ハ、並ニ、斬。

第二百十八條 凡奏任官、勅任官ヲ毆ツ者ハ、判任官、奏任官ヲ毆ツト、罪同シ。其勅任官、奏任官ヲ毆チ、及ヒ奏任官、判任官ヲ毆ツ者ハ、並ニ、凡鬪毆ヲ以テ論ス。

毆受業師 條例

第二百十九條 凡受業師ヲ毆テ、死ニ至ル者ハ、斬。改テ、懲役終身。

毆家長 條例

第二百二十條 凡雇人、家長ヲ毆チ、癘疾、及ヒ死ニ至ル者ハ、絞。斬ニ處スル律ヲ改メ、俱ニ、懲役終身。

第二百二十一條 凡雇人、家長ノ教令ニ違犯スルニ、督責シテ、邂逅ニ、死ニ致ス者ハ、管五十。改テ、懲役七十日。

毆夫 條例

第二百二十二條 凡妻妾、夫ヲ毆テ、癘疾ニ至ル者ハ、絞。入ル、律ヲ改メ、俱ニ、懲役終身。妾ノ正妻ヲ毆ツ者モ、亦同シ。

毆傷妻妾 條例

第二百二十三條 凡夫、妻ヲ毆チ、死ニ至ル者ハ、絞。改テ、懲役終身。其故殺スル者ハ、絞。若シ夫、妻ノ父母ヲ毆チ、癘疾、及ヒ死ニ至ル者ハ、絞。斬ニ處スル律ヲ改メ、懲役終身。其故殺スル者ハ、斬。

毆三等親以下 尊長 條例

第二百二十四條 凡卑幼、三等親ノ尊長ヲ毆チ、癘疾ハ、絞。改テ、懲役終身。死ニ至ル者ハ、斬。改テ、絞。其故殺スル者ハ、斬。若シ尊長、二等親以下ノ卑幼ヲ毆チ、死ニ至ル者ハ、絞。亦改テ、懲役終身。其故殺スル者ハ、絞。

第二百二十五條 凡卑幼、三等親以下ノ尊長ヲ過失殺傷スル者ハ、並ニ凡人過失殺傷ヲ以テ論シ、收贖スルヲ聽ス。

毆二等親尊長 條例

第二百二十六條 凡卑幼、二等親ノ尊長、及ヒ外祖父母ヲ、過失殺傷スル者ハ、各本殺傷罪ニ、二等ヲ、減スル律ヲ改メ、殺ス者ハ、懲役二年。傷スル者ハ、懲役百日。並ニ收贖スルヲ聽サス。

第二百二十七條 凡弟妹、兄弟ヲ毆チ、癘疾ニ至ル者ハ、絞。改テ、懲役終身。死ニ至ル者ハ、皆斬。改テ皆絞。若シ姪、伯叔父姑ヲ毆チ、及ヒ外孫、外祖父母ヲ毆チ、癘疾及ヒ死ニ至ル者、罪亦同。

毆祖父母 條例

第二百二十八條 凡子孫、祖父母父母ヲ毆テ、及ヒ妻妾。夫ノ祖父母父母ヲ毆ツ律ヲ改メ、毆ツ者ハ懲役十年、傷スル者ハ、懲役終身、死ニ至ル者ハ、皆斬。故殺スル者ハ、皆梟。過失殺スル者ハ、懲役三年、傷スル者ハ、懲役一年並ニ收贖スルコトヲ聽サス

第二百二十九條 凡繼母、前妻ノ子ヲ非理ニ毆打シテ、折傷以上ニ至ル者ハ、凡圖傷ニ、二等ヲ減シ、死ニ至ル者ハ、懲役七年。

第二百三十條 凡子孫、教令ニ違犯スト雖モ、祖父母父母、非理ニ毆殺スル者ハ、懲役二年半。

妻妾與夫親屬相毆條例

第二百三十一條 凡妻妾、夫ノ二等親以下、四等親以上ノ尊長ヲ毆テ、死ニ至ル者ハ、各斬、改テ、絞。其故殺スル者ハ、斬。

父祖被毆條例

第二百三十二條 凡祖父母父母、人ニ殺サレ、子孫、擅ニ行兇人ヲ殺ス者ハ、謀殺ヲ以テ論ス。其即時ニ殺死スル者ハ、論スルコト勿レ。

第二百三十三條 凡子孫、祖父母父母ト同謀シテ、共ニ人ヲ毆テ、若クハ祖父母父母、人ト忿争シ、子孫ニ指令シテ毆打セシメ、及ヒ人ト圖毆スルニ、其子孫、勢ヲ助ケテ、共ニ毆ツ者ハ、俱ニ常律ニ照シテ、罪ヲ科シ、救護遠毆律ヲ用ヒス。

罵詈律

罵官吏 律原日本國長官律

第二百三十四條 凡勅任官ヲ罵ル者ハ、懲役一年。奏任官ヲ罵ル者ハ、懲役九十日。判任官ヲ罵ル者ハ、懲役六十日。並ニ親ヲ聞テ、乃坐ス。

罵官吏條例

第二百三十五條 凡判任官、勅任官ヲ罵ル者ハ、懲役六十日。奏任官ヲ罵ル者ハ、懲役四十日。並ニ親ヲ聞テ、乃坐ス。

第二百三十六條 凡奏任官、勅任官ヲ罵ル者ハ、判任官、奏任官ヲ罵ルト、罪同シ。其勅任官、奏任官ヲ罵リ、及ヒ奏任官、判任官ヲ罵ル者ハ、並ニ凡人罵詈ヲ以テ論ス。

第二百三十七條 凡平民、本屬ノ戸長ヲ罵ル者ハ、凡人罵詈ニ、一等ヲ加ヘ、邏卒ヲ罵ル者ハ、又一等ヲ加フ。

罵祖父母父母條例

第二百三十八條 凡子孫、祖父母父母ヲ罵リ、及ヒ妻妾、夫ノ祖父母父母ヲ罵ル者ハ、流ニ等ニ處スル律ヲ改メ、並ニ懲役三年。

訴訟律

誣告條例

第二百三十九條 凡收贖、贖罪ニ該ル罪ヲ以テ、人ヲ誣告スル者ハ、即チ收贖贖罪ニ反坐ス。若シ己ノ罪ヲ避ンコトヲ規リ、人ヲ誣告スル者ハ、原罪、收贖、贖罪ニ該ルト雖モ反坐ノ罪、贖フコトヲ聽サス。婦女ノ犯ス者モ、亦此例ニ依ル。

干名犯義條例

第二百四十條 凡子孫、祖父母父母ヲ誣告シ妻妾、夫、及ヒ夫ノ祖父母父母ヲ誣告スル者ハ、絞ニ處スル律ヲ改メ、懲役終身。

子孫違教條例

第二百四十一條 凡祖父母父母、老疾シテ、家ニ侍養ノ親ナキニ、故ラニ棄去ル者ハ、懲役二年。受贓律

第二百六十號ヲ以テ官吏受財條例創定

官吏受財條例

第二百四十二條 凡官吏、枉法贓ヲ受ル者、等内人ハ、二百五十圓以上、等外人ハ、二百圓以上、絞ニ處シ、及ヒ不枉法贓、等内人ハ、二百圓以上、絞ニ處スル律ヲ改メ、並ニ懲役終身。

事後受財條例

第二百四十三條 凡官吏、事後、財ヲ受ル者ハ、本條ニ依リ罪ヲ科スト雖モ、其錢ヲ出シ、及ヒ過スルノ人ハ、並ニ杖七十二處スル律ヲ改メ、坐贓ニ依テ論シ、一等ヲ減シテ、並ニ罪、懲役七十日ニ止ル以テ財請求條例

第二百四十四條 凡枉法ノ事ニ非スト雖モ、財ヲ以テ、官吏ノ受理ヲ請求スル者ハ、與フル所ノ財ヲ計ヘ、坐贓ニ依テ論シ、一等ヲ減ス。

受外國人餽送條例

第二百四十五條 凡外國人ノ餽送スル、飲食、土宜等、交際ノ禮ニ係リ、互ニ相贈遺スル者ハ、官ニ告ケスト雖モ、以テ不枉法論ノ限ニ在ラス。

詐偽律

詐爲官文書條例

第二百四十六條 凡私ノ文書ヲ詐爲スル者ハ、情ヲ量リ、不應爲ニ問ヒ、輕重ヲ分ツ。

對詔上書詐不以實條例

第二百四十七條 凡對詔、及ヒ奏事、上書ヲ除ク外、上ニ告ルニ、詐テ實ヲ以テセサル者ハ、懲役一年、事情輕キ者ハ、懲役八十日。

偽造官印條例

第二百四十八條 凡官ノ印ヲ偽造スル者ハ、絞ニ處スル律ヲ改メ、懲役終身。

十年第二十五號布告ヲ以テ偽造貨律中改正

改正偽造貨律

第二百四十九條 凡貨貨ヲ偽造シ、已ニ行使スル者、首ハ、斬、從、及ヒ匠人、若クハ、情ヲ知テ買使スル者ハ、懲役終身、其雜役ニ供スル者ハ、懲役十年、未タ行使セサル者ハ、各一等ヲ減ス。

其偽造、未タ成ラサル者、首ハ、懲役二年、從、及ヒ匠人ハ、懲役二年半、雜役者ハ、懲役百日、若シ過ヲ悔ヒ自首スル者、已ニ行使スルハ、二等ヲ減シ、未タ行使セサルハ、罪ヲ免ス。

偽造寶貨條例

第二百五十條 凡金銀貨幣ノ邊縁ヲ剪錯シテ、利ヲ取リ行使スル者ハ、懲役三年。

第二百五十一條 凡紙幣ノ字樣ヲ挑剗シ、成片ヲ複製シ、筆畫ヲ描改シ、眞ヲ以テ偽ニ作り、行使スル者ハ、懲役五年。

第二百五十二條 凡偽造タルコトヲ知テ、買取シ、未タ行使セサル者ハ、已買使者ニ、一等ヲ減ス。

第二百五十三條 凡偽造タルコトヲ知テ、雇ヲ受ケ、接遞シテ、眞貨ニ兌換スル者ハ、知情買使ヲ以テ論ス。

第二百五十四條 凡偽造スルノ情ヲ知テ、房屋ヲ給シ、及ヒ窩藏スル者ハ、已未行使ヲ分チ、並ニ偽造從ヲ以テ論ス。

第二百五十五條 凡雜役ニ供スル者、雇工錢ニ、偽貨ヲ受ケ、行使スル者ハ、知情行使律ニ依ル。

第二百五十六條 凡偽造、已ニ成リ、未タ行使セシテ悔悟シ、其夥黨ヲ脱スト雖モ、首報セサル者ハ、偽造已成未行使ヲ以テ論ス、其偽造、未タ成ラサル者ハ、懲役百日。

第二百五十七條 凡人ノ寶貨ヲ偽造スルコトヲ知テ、官司ニ申報セサル者ハ、違令、重ニ問フ。

第二百五十八條 凡寶貨ヲ取受スルノ後、始テ偽造ニ係ルコトヲ知リ、官ノ檢視ヲ經スシテ、行使スル者ハ、不應爲、重ニ問フ。

第二百三十一號ヲ以テ偽造貨條例創定、第十九號ヲ以テ偽造銀斗秤尺條例創定

七年司法省第十號
違禁若

詐稱官條例
第二百五十九條 凡郷貫名氏ヲ詐稱シテ、客塵ニ宿スル者ハ、不應爲輕ニ問フ。
改正犯姦律

犯姦

第二百六十條 凡和姦、夫アル者ハ、各懲役一年、妾ハ、一等ヲ減ス。若シ媒合、及ヒ容止シテ、通姦セシムル者ハ、犯人ノ罪ニ、三等ヲ減ス。強姦スル者ハ、懲役十年。未タ成ラサル者ハ、一等ヲ減ス。因テ折傷スル者ハ、懲役終身。婦女ハ坐セス。十二歳以下ノ幼女ヲ姦スル者ハ、和ト雖モ、強ト同ク論ス。親屬相姦

第二百六十一條 凡父祖ノ妾、伯叔姑姉妹、及ヒ子孫ノ婦ヲ姦スル者ハ、各懲役三年。強姦スル者ハ、懲役終身。若シ母ノ姉妹、及ヒ兄弟ノ妻、姪ノ妻ヲ姦スル者ハ、懲役二年。妾ヲ姦スル者ハ、各一等ヲ減ス。強姦スル者ハ、並ニ懲役終身。若シ兄弟姉妹ノ女、及ヒ前夫ノ女、同母異父姉妹ヲ姦スル者ハ、各懲役一年。強姦スル者ハ、懲役終身。

姦家長妻

第二百六十二條 凡雇人、家長ノ妻ヲ姦スル者ハ、各懲役一年半。強姦スル者ハ、懲役終身。

姦部民妻

第二百六十三條 凡官吏、部民ノ妻ヲ姦スル者ハ、懲役一年半。相姦スルノ妻ハ、懲役一年。

居喪犯姦

第二百六十四條 凡父母、舅姑、及ヒ夫ノ喪ニ居リ、姦ヲ犯ス者ハ、各凡姦ニ、一等ヲ加フ。相姦スルノ人ハ、凡姦ヲ以テ論ス。

第二百七十四號ヲ
以テ居喪犯姦律改
正

第二百七十三號及
第二百四十九號ヲ
以テ犯姦條例二條
制定

九年第一號布告ヲ
以テ本條廢止

七年司法省第八號
違禁若

犯姦條例

第二百六十五條 凡和姦ノ後、姦情敗露ニ因テ、姦婦、悔迫自盡スル者ハ、姦夫、情ヲ知ラスト雖モ、姦罪ニ、一等ヲ加フ。

第二百六十六條 凡雞姦スル者ハ、各懲役九十日。華士族ハ、破廉耻甚ヲ以テ論ス。其姦セラルノ幼童、十五歳以下ノ者ハ、坐セス。若シ強姦スル者ハ、懲役十年。未タ成ラサル者ハ、一等ヲ減ス。

第二百六十七條 凡私娼ヲ街賣スル、窩主ハ、懲役四十日。婦女、及ヒ媒合容止スル者ハ、一等ヲ減ス。若シ父母ノ指令ヲ受ル者ハ、罪ヲ其父母ニ坐シ、婦女ハ坐セス。

第二百六十八條 凡僧尼ノ姦ヲ犯ス者ハ、凡姦罪ヲ以テ論ス。

雜犯律

賭博條例

第二百六十九條 凡賭博、三犯以上ハ、懲役一年。

第二百七十條 凡賭場、現在ノ財物ハ、官ニ入ルト雖モ、其田宅等、不動産ニ係ル者ハ、原主ニ還付シ、官ニ入ル、ノ限ニ在ラス。

第二百七十一條 凡博藏ニ用フル、骰子、骨牌ヲ賣ル者ハ、賭博者ト、同罪。再犯ハ、一等ヲ加ヘ。三犯以上ハ、懲役一年。

失火條例

第二百七十三條 凡太廟、及ヒ山陵内ニ於テ、火ヲ失スル者ハ、律ニ依リ罪ヲ科スルノ外、官幣國幣大社ハ、山陵ト同シク論シ、中社ハ、懲役百日。小社ハ、懲役九十日。府縣社ハ、懲役七十日。郷社ハ、懲役六十日。延燒スル者ハ、各本罪ニ、三等ヲ減ス。滅シテ、人ノ宅舎ヲ延燒スルヨリ、輕ク、若クハ等キハ、

第二百九十九號ヲ以テ本條改正

並ニ一等ヲ加フ。

第二百七十四條 凡稅居人、火ヲ失シテ、其家ヲ燒ク者ハ、自己宅舍ヲ燒クニ、一等ヲ加フ。

第二百七十五條 凡火ヲ失シテ、人ヲ燒死ニ致ス者ハ、死屍ノ多寡ヲ論セス、一等ヲ加フ。共同居ノ祖父母父母ヲ燒死ニ致ス者ハ、懲役百日。

第二百七十六條 凡火ヲ失シテ、人ノ山林柴草、及ヒ空間房屋、若クハ田場積聚ノ物ヲ延燒スル者ハ、官私ヲ分タス。人ノ宅舍ニ、延燒スルニ、一等ヲ減ス。

第二百七十七條 凡盜犯、火ヲ用ヒテ、門關戸樞ヲ燒燬シ、及ヒ燭炬ヲ持シ、期セスシテ、失火ニ致ス者ハ、懲役二年。若シ盜罪重キ者ハ、重キニ從テ論ス。

放火條例

第二百七十八條 凡火ヲ放テ、人ノ空間房屋、及ヒ田場積聚ノ物ヲ燒ク者ハ、懲役七年。未タ燒燬ニ至ラサル者ハ、懲役三年。

第二百七十九條 凡火ヲ放テ、故ラニ自己ノ房屋ヲ燒ク者ハ、懲役九十日。未タ燒燬ニ至ラサル者ハ、一等ヲ減ス。若シ期セスシテ、公廨倉庫、及ヒ民舍ヲ延燒スル者ハ、懲役二年半。因テ財ヲ盜ム者ハ、懲役終身。

第二百八十條 凡火ヲ放テ、人ノ空間房屋ヲ燒キ、期セスシテ、人ノ宅舍ニ延燒スル者ハ、懲役十年。第二百八十一條 凡火ヲ放テ、人ノ宅舍ヲ燒キ、未タ燒燬ニ至ラサル者、律ニ照シ、懲役十年ニ處スル外、若シ雇人等、家長ノ督責ニ苛迫シ、一時脫身ヲ圖リ、纔ニ火ヲ放チ、未タ燒燬ニ至ラサル者ハ、情ヲ量テ、二等ヲ減シ、懲役二年。

得遺失物條例

第二百八十二條 凡水中沈没ノ物ヲ得レハ、遺失物ヲ得ルヲ以テ論ス。

九年第五十五號布告ヲ以テ第二百八十二條ヨリ第二百八十六條マテ刪除

第二百八十三條 凡遺失物ヲ得ルニ、物品、盜贖ニ係ルト雖モ、私物ナレハ、一半ヲ、其主ニ給シ、一半ヲ得ル人ニ給ス。

第二百八十四條 凡官吏、邏卒、遺失物ヲ得レハ、所部内外ヲ問ハス。主アルハ、全ク其主ニ還ス。如シ二十日內ニ、其主ナケレハ、得ル者ニ給ス。

第二百八十五條 凡一切應禁ノ物ヲ得レハ、遺失、及ヒ埋藏、若クハ、沈没ヲ分タス。一體ニ、官ニ没入ス。

第二百八十六條 凡人ノ邸宅內ニ於テ、遺失物ヲ竊取スル者ハ、竊盜ニ準シテ論ス。

違令條例

第二百八十七條 凡制ニ違フ者ハ、懲役百日。輕キ者ハ、一等ヲ減ス。

第二百八十八條 凡式ニ違フ者ハ、懲役二十日。輕キ者ハ、一等ヲ減ス。

不應爲條例

第二百八十九條 凡二人以上、同ク不應爲ヲ犯シ、首タル者、懲役三十日ニ該レハ、從ハ、懲役二十日。首タル者、懲役七十日ニ該レハ、從ハ、懲役六十日ニ科ス。若シ所犯、輕重ノ分アレハ、不應、輕重ニ分擬シ、首從ヲ以テ論セス。

第二百九十條 凡佛像ヲ棄毀スル者ハ、不應爲重ニ科ス。

第二百九十一條 凡詭言怪說ヲ流傳シ、及ヒ著述シテ、政體ヲ妨害スル者ハ、不應爲重ニ科ス。

捕亡律

追捕罪人條例

第二百九十二條 凡捕吏、正犯ノ財ヲ受ケ、故縱スル同罪者。正犯、死ニ至レハ、同罪者ハ、絞ニ處スル律ヲ改メ、懲役終身ニ從フト雖モ、其財ヲ受スシテ、故縱シ、及ヒ通信シテ、逃避セシムル同罪者ハ、

八年第三百三十七號布告ヲ以テ本條刪除

罪。懲役十年ニ止ル。

獄囚脱監及反獄逃走條例

第二百九十三條 凡脱監及ヒ越獄シテ。逃走スル者ハ。各本罪上ニ。二等ヲ加ヘ。罪。流三等ニ止ル律ヲ改メ。懲役終身ニ止ル。

第二百九十四條 凡反獄シテ。逃走スル者ハ。皆斬ニ處スル律ヲ改メ。首ハ。斬。從ハ。懲役終身。

第二百九十五條 凡罪囚。糾合シテ。越獄スルニ。從ハス。實ニ據テ首報シ。因テ罪囚。即時ニ獲ニ就キ。脱逃ヲ致サ。ルコトヲ得ル者及ヒ反獄ノ情ヲ知テ。首報スル者ハ。斬絞以下。各本罪ニ。一等ヲ減ス。

第二百九十六條 凡脱監。及ヒ越獄シテ。逃走スル者。再逃以上ハ。又二等ヲ累加シ。罪。懲役終身ニ止ル。懲役場ヲ逃走シ。又監獄ヲ脱越スル者。罪。亦同。

第二百九十七條 凡犯人。責付内ニ。逃走スル者ハ。本罪ニ。一等ヲ加フ。若シ囚禁。及ヒ責付内ニ。逃走シテ。自首スル者ハ。止メ。本罪ヲ科シテ。逃罪ヲ免ス。

懲役人逃條例 原徒流入逃律
第二百九十八條 凡懲役一年以上ノ囚人。限内。逃走スル者ハ。杖七十。改テ棒鎖一日。再ヒ逃走スル者ハ。絞。改テ懲役終身。

第二百九十九條 凡懲役百日以下ノ囚人。限内。逃走スル者ハ。棒鎖一日。仍ホ原犯ノ年限ニ照シテ。新ニ拘役シ。再ヒ逃走スル者ハ。棒鎖二日。更ニ懲役一年ニ入ル。若シ外ニ在テ。又百日以下ノ罪ヲ犯セハ。原犯後犯ヲ通算シテ。新ニ拘役ス。其一年以上ノ罪ヲ犯ス者ハ。止メ後犯ノ年限ニ照シテ。更ニ科斷ス。

第三百條 凡懲役一年以上ノ囚人。逃走スル者ハ。例ニ照シ。棒鎖二日。仍ホ原犯ノ年限ニ照シテ。新ニ拘役スト雖モ。若シ逃走シ。外ニ在テ。又二年以下ノ罪ヲ犯セハ。後犯ノ年限ニ。原犯ノ年限ヲ合セテ。拘役スルモ。亦四年ニ過ルコトヲ得ス。百日以下ノ罪ヲ犯ス者モ。亦原犯ニ合セテ拘役ス。其五年以上ノ罪ヲ犯ス者ハ。止メ後犯ノ年限ニ照シテ。科斷ス

第三百一條 凡懲役五年以上ノ囚人。限内。逃走スル者モ。亦例ニ照シテ。棒鎖二日。仍ホ原犯ノ年限ニ照シテ。新ニ拘役スト雖モ。若シ逃走シ。外ニ在テ。重テ五年以上。十年以下ノ罪ヲ犯ス者ハ。並ニ拘役四年ヲ加フ。其一年以上。三年以下ノ罪ヲ犯ス者ハ。後犯ノ年限ヲ折半シテ。加役ス。其百日以下ノ罪ヲ犯ス者ハ。役限ヲ全加シテ。折半スルコトヲ用ヒス。

第三百二條 凡懲役終身ノ囚人。逃走スル者ハ。絞。

第三百三條 凡懲役人。逃走シテ。自首スル者ハ。逃罪ヲ免シ。仍ホ原犯ノ年限ニ照シテ。新ニ拘役ス。若シ外ニ在テ。又罪ヲ犯ス者ハ。自首。法ニ照シテ。首免ヲ與フト雖モ。其逃罪。及ヒ從新拘役ハ。仍ホ本法ヲ盡ス。

第三百四條 凡懲役人ノ逃走ヲ報シ。因テ逃走ヲ致サ。ルコトヲ得ル者ハ。本罪ニ。一等ヲ減ス。

第三百五條 凡懲役人。逃走ヲ圖リ。未タ役場ヲ離レスシテ。捕ニ就ク者ハ。棒鎖一日。從新拘役ノ限ニ在ラス。

第三百六條 凡懲役人。水火震災ノ變ニ因テ逃出シ。二十四時間ニ。投歸スル者ハ。逃罪ヲ問ハス。若シ時ヲ過テ。投歸セサル者ハ。例ニ照シテ。棒鎖二日。仍ホ原犯ノ剩ル日數ヲ役ス。其變ニ遇ヒ。内ニ在テ。逸出セス。能ク消防防禦スル者ハ。本罪ニ。一等ヲ減ス。

第三百七條 凡禁錮限内。外人ニ接見通信シ。若クハ。疾病療養等ニ託シテ。潛出行歩スル者ハ。原限ノ年日ニ照シテ。新ニ之ヲ科ス。若シ潛出シテ。他ニ投宿シ。及ヒ縱飲スル等ニ係レハ。懲役七十日。贖罪スルコトヲ聽シ。仍ホ新ニ原限ヲ科ス。

主守不覺失囚條例

十四年第二十五號
布告ヲ以テ其罪以下刪除

十四年第二十五號
布告ヲ以テ本條廢止

九年第二十二號布告ヲ以テ懲役人逃罪ノ刑罰ヲ加重シ本條ヲ刪除十年第二十號布告ヲ以テ之ヲ改正ス

十四年第二十五號
布告ヲ以テ本條廢止

第二百八條 凡主守看守ニ失シ。因テ未決ノ囚。自盡ニ至ラシムル者ハ。懲役三十日。

第二百九條 凡主守。囚ノ逃走ヲ覺ラサル者ハ。捕限二十日ヲ給シ。追捕セシム。限内。捕得スレハ。二等ヲ減ス。其故縱スル者ハ。捕限ヲ給セス。

第二百十條 凡保管人。囚ノ逃走ヲ覺ラサル者ハ。主守不覺失囚律ニ。二等ヲ減ス。

藏匿罪人條例

第二百十一條 凡官司。人ヲ差ハシ。追喚スル罪人タルコトヲ知テ。爲メニ。藏匿指引シテ。隱避セシムル者ハ。各罪人ノ罪ニ。一等ヲ減スル律ヲ改メ。減ニ從フ。若シ罪人。未タ官司ノ追喚ニ係ラス。若クハ。已ニ追喚スル者ト雖モ。未タ知ラスシテ。藏匿隱避セシムル者ハ。俱ニ情ヲ量テ。不應爲ニ問ヒ。輕重ヲ分ツ。

斷獄律

與囚金刃條例

第二百十二條 凡常人。囚ニ金刃ヲ與ヘ。及ヒ子孫。祖父母。父母ニ與ヘ。雇人。家長ニ與フル者ハ。各獄卒ノ罪ニ。二等ヲ減ス。

第二百十三條 凡獄卒。金錢其他應禁ノ物ヲ傳遞シテ。囚ニ與フル者ハ。違令重ニ問フ。若シ財ヲ受ル者ハ。贓ニ計ヘ。枉法ヲ以テ。重キニ從テ論ス。

出入人罪條例

第二百十四條 凡故ラニ出入シ。及ヒ入ル。ニ失スル罪人ハ。已ニ斷了ヲ經ルト雖モ。檢舉シテ。改正スルコトヲ得ヘキ者ハ。改正シ。其出タスニ。失スル者ハ。貼斷スルコトヲ用ヒス。

第二百十五條 凡官司。屍傷ヲ檢視シテ。實ナラサル者ハ。懲役四十日。因テ罪ニ増減アル者ハ。失出入人罪ヲ以テ論ス。若シ財ヲ受ケ。故ラニ實ヲ以テセサル者ハ。故出入人罪ヲ以テ論ス。贓重キ

九年第四十八號布告ヲ以テ失出入人罪條例廢止

者ハ。贓ニ計ヘ。枉法ヲ以テ。重キニ從テ論ス。

死囚奏請待報條例

第二百十六條 凡獄已ニ成リ。罪。死ニ該ル者ヲ奏請シ。待報内ニ在テ。死亡スルニ。遺骸ハ。親屬請フ者アレハ。下付スルコトヲ聽ス。

斷罪不當條例

第二百十七條 凡收贖ス可キヲ。誤テ實斷スル者。改正スルコトヲ得ヘキ者ハ。改正シ。其實斷ス可キヲ。誤テ收贖スル者ハ。貼斷スルコトヲ用ヒス。

第二百十八條 凡罪ヲ斷スルハ。口供結案ニ依ル。若シ甘結セシテ。死亡スル者ハ。證佐アリト雖モ。其罪ヲ論セス。

九年第八十六號布告ヲ以テ本條改正

改定律例卷二

八年太政官第八十號達ヲ以テ改定

○第二百七號 (六月十三日)(布)
壬申第三百五十七號布告天長節新年宴酒饌代料左ノ通改定候條此旨相達候事

勅任官 七十五錢

奏任官 五十錢

判任官 二十五錢

等外 十錢

但小者以下並ニ遲奉等ハ渾テ不賜候事

一 技ノ所長ヲ以テ出仕爲致候者或ハ御雇ノ名義ヲ以テ一時出仕候者等月給三百五十圓以上ハ奏任其以下三十圓以上ハ判任其以下十圓以上ハ等外ニ准シ可賜其以下ハ不賜候事

一 陸海軍兵卒ハ等外ニ准シ可賜事

一 鄉村社神官並戸長等民費ヲ以テ体給ニ充候分ハ渾テ不賜候事

一 御雇外國人ハ酒饌賜リ候節ハ其都度可相達事

○第二百八號 (六月十三日)(布)

七年太政官第四十二號達八年第九十一號布告十三年第三十六號布告ニ依リ消滅

本年第十九號布告罰金科料等ノ儀裁判所被置候府縣ハ其廳ニテ右犯罪者發覺スルニ於テハ之ヲ其裁判所ニ送致シ裁判所ニ於テ處斷シ直ニ罰金追徵可致候事

但府縣廳限リ取設候規則タリトモ罰金科料ニ類シ候者及ヒ裁判上ニ關係シタル者ハ總テ其裁判所ニ照知可致事

○第二百九號 (六月十四日)(布)

陸海軍兩省中尉少尉奏任ト被定候ニ付テハ諸判任官ノ上席タルヘク候條此旨相達候事

○第二百十號 (六月十四日)(布)

十九年勅令第三十七號ニ依リ消滅

內國人民一般並御雇外國人ニ至ル迄海關輸出入荷物取扱條例別冊ノ通被定候條此旨相達候事

海關輸出入荷物取扱條例

第一 官省使寮司及府縣官員並留學生徒ニ至ル迄政府ノ命ヲ奉シ海外ニ航旅スル者公用ノ荷物並本人相當ノ旅具ヲ除クノ外輸出入共商品同様一般收稅スヘシ

第二 前款ニ掲クル官員並留學生徒發着ノ前後輸出入又ハ他邦滯留中送致セル貨物等無稅通關スヘキ旨大藏省ノ證書無之分ハ商品同様一切收稅スヘシ

第三 華士族ヨリ平民ニ至ル迄商業或ハ留學遊歷等ノ爲メ自費ヲ以テ海外ヘ渡航スル者荷物輸出入ノ際本人相當ノ旅具ヲ除クノ外一切收稅スヘシ

但相當旅具免稅ノ荷物ヲ定ムルハ稅關官吏ノ意見ニシテ本人之ヲ取捨増減スルコトヲ得ヘカラス

第四 官省使寮司及府縣於テ雇役ノ外國人自用品共自國又ハ他國ヨリ取寄或ハ御國產ヲ其本國ヘ差送ル分トモ自今約定書中自用品無稅通關可指許旨ノ明文無之分ハ輸出入トモ商品同様收稅スヘシ

但向後外國人傭入ノ節有稅ノ自用品ハ輸出入トモ免稅致スヘキ旨條約面ニ記載スヘカラス

第五 前條ニ掲クル外國人來着又ハ滿期歸國ノ節輸出入ノ荷物本人相當ノ旅具ヲ除クノ外商品同様收稅スヘシ

○第二百十一號 (六月十四日)(布)
近來郵便蒸氣船問屋或ハ取扱所等ノ看板ヲ相掲候者多分有之候處日本國郵便蒸氣船ト米國太平洋郵便蒸氣船ト相混シ候ニ付自今日本國及米國太平洋ノ文字ヲ加ヘ判然區別シ可申事

○第二百十二號 (六月十四日)(布)

日本國郵便蒸氣船ハ八年六月內務省ハ買上ケ及米國太平洋郵便蒸氣船ハ同年十月三委會社ハ買入レニ依リ消滅
八年司法省甲第一號布達達新

七年太政官第四十八號

七月十四日迄

九年太政官第二十四號

來ル七月十日以後ノ證書類及ヒ公私ノ文書ニハ總テ年號月日ヲ記載可致若シ疎漏ニシテ年月日ノ内何レニテモ略記シタル時ハ裁判上證據ニ不相立候事

○第二百十三號 (六月十四日(布))

各府縣へ諸布告到達ノ日限別紙表面ノ通被相定候條本年第六十八號ノ布告ニ因リ到達ノ上三十日間揭示ノ後ハ管下一般ニ之ヲ知り得タル事ト看做候條此旨相達候事

但途中川支等ニテ停滯シタル時ハ其事由可届出事

布達ノ日ヨリ 判卷ノ日割

府 縣 名

- 翌日 八里半
- 三日 十九里十四丁
- 四日 五里三十二丁
- 同日 十里八丁
- 同日 二十里二十一丁
- 同日 二十里二丁三十間
- 同日 七里二十五丁
- 同日 二十四里二十八丁
- 同日 二十九里二丁
- 五日 三十里三十四丁
- 同日 二十六里十七丁
- 同日 六十五里十九丁二十二間

- 東 府
- 神 奈 川 縣
- 新 治 縣
- 崎 玉 縣
- 入 間 縣
- 足 柄 縣
- 水 更 津 縣
- 印 旆 縣
- 枋 木 縣
- 宇 都 宮 縣
- 茨 城 縣
- 群 馬 縣
- 濱 松 縣

- 同 四十四里九丁二十二間
- 同 三十六里半
- 六日 百里九丁四十四間
- 同 九十一里十一丁四十四間
- 同 九十八里十一丁四十四間
- 同 五十八里九丁二十七間
- 同 七十三里五丁
- 同 五十六里十八丁
- 八日 百四十八里二十二丁四十四間
- 同 百三十七里二十四丁四十四間
- 同 百四十二里六丁四十四間
- 同 百二十五里八丁四十四間
- 同 五十九里三十三丁二十七間
- 同 九十五里二十四丁
- 同 百十七里九丁四十四間
- 同 六十九里二十一丁十間
- 同 九十七里二十二間
- 同 八十四里廿三丁廿一間
- 同 百廿八里八丁四十四間
- 同 百三十九里六丁四十四間

- 靜 岡 縣
- 山 梨 縣
- 三 重 縣
- 愛 知 縣
- 岐 阜 縣
- 長 野 縣
- 福 島 縣
- 磐 前 縣
- 兵 庫 縣
- 奈 良 縣
- 堺 縣
- 滋 賀 縣
- 筑 摩 縣
- 宮 城 縣
- 度 會 縣
- 若 松 縣
- 山 形 縣
- 置 賜 縣
- 京 都 府
- 大 阪 府

| | | |
|-----|-----------------|------|
| 九日 | 七十四里三十丁五十九間 | 水澤縣 |
| 同 | 百七里二十九丁十三間 | 新川縣 |
| 同 | 百六十五里二丁四十四間 | 飾磨縣 |
| 同 | 百五十七里十四丁四十四間 | 和歌山縣 |
| 同 | 百四十四里廿五丁四十一間 | 岩手縣 |
| 十日 | 百三十三里十五丁三十八間 | 酒田縣 |
| 同 | 百五十一里七丁二間 | 秋田縣 |
| 同 | 百廿九里六丁四十四間 | 敦賀縣 |
| 同 | 百三十七里十三丁四十四間 | 和川縣 |
| 同 | 百二十三里廿四丁廿七間 | 石川縣 |
| 同 | 百三十八里廿六丁五十七間 | 豐岡縣 |
| 同 | 百六十二里五丁九間 大坂通 | 北條縣 |
| 同 | 百七十九里三丁九間 大坂通 | 岡山縣 |
| 同 | 百八十七里二丁四十四間 | 名東縣 |
| 同 | 百八十五里十九丁四十四間 | 新瀨縣 |
| 同 | 百七十九里十三丁四十四間 | 鳥取縣 |
| 同 | 百七十二里十三丁四十四間 | 小田縣 |
| 同 | 百七十二里十三丁四十四間 | 廣島縣 |
| 同 | 百七十二里十三丁四十四間 | 青森縣 |
| 十一日 | 百九十二里廿四丁廿二間 高田通 | |
| 同 | 百九十二里廿四丁廿二間 三國通 | |
| 同 | 百九十六里十六丁四十四間 | |
| 同 | 百九十九里三十一丁四十四間 | |
| 同 | 二百二十六里十四丁四十四間 | |
| 同 | 二百九十六里十五丁四十二間 | |

| | | |
|-----|-------------------|----------|
| 同 | 二百二十七里七丁四十四間 | 島根縣 |
| 同 | 二百二十七里七丁四十四間 | 津山通 |
| 同 | 二百三十八里十三丁四十四間 | 下津井通 |
| 同 | 二百三十八里十三丁四十四間 | 下津井通 |
| 同 | 二百三十一里十三丁四十四間 | 淡路井ヨリ甲浦通 |
| 同 | 二百三十一里十三丁四十四間 | 淡路井ヨリ甲浦通 |
| 同 | 二百七十六里十丁四十四間 | |
| 十四日 | 三百三十五里五丁四十四間 | 長崎縣 |
| 同 | 二百五十三里二十六丁四十四間 | 津山通 |
| 同 | 二百五十三里二十六丁四十四間 | 廣島通 |
| 同 | 二百五十八里廿三丁四十四間 | |
| 同 | 三百一里二十八丁四十四間 | |
| 同 | 三百二里二丁四十四間 | |
| 同 | 三百六里三十三丁四十四間 | |
| 十五日 | 三百六里十八丁四十四間 | |
| 同 | 三百廿三里十四丁四十四間 | |
| 同 | 三百七十六里十四丁四十四間 | |
| 十七日 | 四百二十一里十四丁四十四間 | 鹿兒島通 |
| 廿一日 | 三百四十六里十八丁四十四間 | 豐後路通 |
| | 但シ二十四時間ヲ以テ一日トナス可シ | |

○第二百十四號 (六月十五日) (布)

宇都宮縣ヲ廢シ栃木縣へ管轄被 仰付候條此旨相達候事
 印旛木更津ノ兩縣ヲ廢シ千葉縣ヲ被置候條此旨相達候事
 但縣廳ハ下總國千葉郡千葉町ニ被置候事

九年第四百二十四號布
告ヲ以テ廢止シテ
野國高崎ニ移シ群
島縣ト改稱

入間群馬ノ兩縣ヲ廢シ熊谷縣ヲ被置候條此旨相達候事

但縣廳ハ武藏國大里郡熊谷驛ニ被置候事

○第二百十五號 (六月十八日) (布)

人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則別紙ノ通被定候條此旨相達候事

代人規則

第一條 凡ソ何人ニ限ラス己レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理セシムルノ權アルヘシ

但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ辨シ難キ時ハ其後見人及ヒ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得

ヘシ

第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故

ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タル可シ

第三條 凡ソ代人ハ心術正實ニシテ二十一歳以上ノ者ヲ撰ムヘシ

(改) 第三條 凡ソ代人ハ心術正實ニシテ滿二十歳以上ノ者ヲ撰ムヘシ

第四條 代人ハ總理代理人ノ別アリ總理代人ハ其本人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ

部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ル者トス

第五條 凡ソ本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲ爲サント欲スル時ハ必ス實印ヲ押シタル委

任狀ヲ與フ可シ

但シ其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及

ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載ス可シ

第七條 委任狀書式左ノ通

細者共 儀某ノ事件ニ付キ何誰ヲ以テ總理代人ト定メ拙者ノ名義ニテ左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候

事 一何々ノ事 但權限ノ次第ヲ分條記載ス可シ

右代理ノ委任狀仍而如件

年號何年何月何日

住所身分 姓 名 印

後見人等ハ住所身分何誰ノ後見人何誰ト記ス可シ

第八條 代人ヲ任スルノ期限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク委任セ

ントスル時ハ其地方ニ新聞紙アラハ之ニ記入セシメ世上ニ公布ス可シ

○第二百十六號 (六月十九日) (布)

諸官員新規拜命並轉任共宣旨ノ日ヲ以テ任官當日ト致候旨壬申第二百十號布告候處自今ハ宣旨拜

受ノ日ヲ任免轉職ノ當日ト被定候尤請書差出候儀ハ是迄ノ通可相心得事

○第二百十七號 (六月十九日) (布)

外國派出ノ公使領事書記等御手當金並官撰留學生徒資金及ヒ棄兒養育幼老扶助米其外都テ手當金

穀ノ類全月未滿ノ分ハ來ル七月十日ヨリ本年第七十五號布告官員月給端日數ノ分渡方規則同様改

正候事

○第二百十八號 (六月二十二日) (布)

本年第四百十四號地所名稱區別ノ儀布告候ニ付テハ於各府縣下官省使寮司等從前御用地有之向者簡

所限坪數取調地券相渡可申尤其御用ノ次第柄委細取調具ニ大藏省へ可申出候事

但券狀雛形ノ儀ハ租稅寮ヨリ可相達候事

七年第四百二十號布
告ニ依リ消滅

第四百十九號參書

七年太政官第十五
號參書

七年太政官第七十
八號參書

| | | |
|--|--|---------------------------------------|
| 第 何 番 | 表口何間 | 第一大區一小區何町何丁目 何番地 何々御用附屬地 何 省 |
| | 裏中何間 | |
| 地 券 | 裏行何間 | 此地代金何千何百何拾圓 |
| | 合計何千何百何拾圓 | |
| 區入費ハ附下一般成規之通出金スヘキ事 | | |
| 年 號 月 | 一 此地所御用中ハ前ニ記載セル區入費等定期ノ通共官省察司ニ於テ可相拂 尤日限等ハ其時々府廳ヨリ達スヘシ | |
| | 一 御用中地所ニ屬スル諸件ハ其區戶長ヨリ其主務ヘ直チニ達スヘシ故ニ引 請取扱候者ヲ兼テ定メ置地所一切ノ諸務ヲ擔當セシムヘシ | |
| 一 此地所御用ニ不適時ハ地所並證券トモ府廳ヘ返附可有之事 右地所検査之上和渡置候也 | | |
| 何府知事 實 印 | | |

○第二百十九號 (六月二十三日) (布)

辛未四月中工部省御備外國人出張ノ御取計ノ儀相違置候處右ハ廢止シ護衛等ニ不及候自然向後官省ヲ始メ御備外國人出張ノ節無據監護ノ手當相要候ハ、時々主任ノ廳ヨリ凡護衛ノ人員手續等各

地方へ相達スヘク右入費ハ其廳ヨリ下渡候條勘定帳ヲ以テ請取方可申立事

○第二百二十號 (六月二十三日) (布)

本年第九十六號公布ノ儀ハ取消シ更ニ左ノ通改正候條此旨相達候事
金銀貸借其他私用ノ證券類へ官名ヲ記載シ或ハ官名ヲ刻シタル印章ヲ相用候儀ハ固ヨリ有之間敷事ニ候得共間ニハ誤用候者モ有之哉ノ趣不都合ノ事ニ候條屹度令禁止候事

○第二百二十一號 (六月二十三日) (布)

本年第二號布告ノ内六月廿八日ヨリ三十日迄ノ休暇ハ取消シ候條此旨相達候事

○第二百二十二號 (六月二十四日) (布)

先般印紙稅發行候ニ付テハ右印章類毀造並印稅ヲ免レンタメ犯則ノ者ヲ見届訴出事實取糺ノ上相違無之ニ於テハ訴出候者ヘ左ノ通賞金被下候條此旨相達候事

第一 第一類中一錢印紙ヲ貼用セスシテ相渡候者ヲ訴出ル時ハ犯人過料ノ半減可被下事

第二 第二類中諸證券等ニ印紙ヲ貼用セスシテ相渡候者ヲ訴へ出ル時ハ犯人過料罰金高ノ半減可被下事

一金十圓以上ノ高ヲ曲テ十圓以下ノ高ニ作爲シ印紙ヲ貼用セスシテ第二類ノ證書ヲ出ス者又ハ帳簿類證印ニ二類ノ廉ヲ一類ニ作爲シ一類ノ證印等ヲ申請候者等ヲ訴へ出ル時ハ犯人過料金高ノ半減ヲ可被下事

第三 印紙界紙ヲ密賣買致候者ヲ訴へ出ル時ハ密買犯人ノ過料印紙代價五百倍ノ半減並密賣犯人ノ過料金代價千倍ノ半減可被下事

第四 印紙界紙又ハ印稅收領ノ印章ヲ贋造スル者又ハ印紙ノ消印ヲ洗滅シ再用セン者等ヲ訴へ出ル時ハ相當ノ賞金可被下事

大藏省第三百三十六號
逓送省第七年第八十一號
布告ニ依リ
抄減

明治何年何月日
大藏省
紙幣頭何之誰殿

何之誰印

第二號

請取證書寫文例

何番

一 太政官札

一 民部省札

一 大藏省新札

一 貨幣

計何圓

右ハ明治何年ノ公債ノ勘定トシテ本日日本政府ノ信ヲ以テ書面ノ金高ヲ受取申候仍之受取證書相渡候也

種類

何兩

同

何圓

同

何地出張紙幣寮

何府廳公債掛

何縣何銀行

何之誰印

明治何年何月日

何府何町

何之誰殿

第三號

持主タルヘキ者へ送方文例

此便ヲ以テ別封明治何年ノ公債利札名附公債證書ヲ差送候間此目錄ニ引合セ落手可有之候

何號何番

何圓

同

同

何枚

同

同

何地出張紙幣寮

右ハ何府廳公債掛之請取預リ書ヲ證據トシテ發行候也

何縣何銀行

明治何年何月日ヨリ何分ノ利息拂初ム

東京

大藏省

紙幣頭何之誰印

明治何年何月日

何府何町

何之誰殿

第四號

證書持主ヨリ差出スヘキ請取書文例

何月日附ノ御封書落手仕明治何年ノ公債利札名附公債證書左ノ目錄通健ニ請取申候

目錄

何號何番

何圓

何枚

同 同
同 同
利息ハ何地ニテ御拂可被下候

明治何年何月日

大藏省
紙幣頭何之誰殿

何府何町
何之誰印

第五號

別封何府何町何ノ誰へ可相渡公債證書並證書目錄其他當人ヨリ可差出請取
證書トモ封入差送候間當人へ相達右證書へ月日姓名記入爲致調印之上當察
へ可被差越候也

明治何年何月日

大藏省
紙幣頭何之誰印
何地出張紙幣寮
何府廳公債掛
何縣何銀行
何之誰殿

府 縣

七年四月二十四日
內務省ニ令シテ便
宜爲號ヲ稱セシム
八年太政官第二十二
九號達ニ依リ消滅
十四年第三十二號
布告ヲ以テ改定

○第二百二十五號 (六月二十四日) (布)
從來各地方ニ於テ遷卒又ハ取締組或ハ捕亡吏等ノ名稱ヲ以テ其實番人ノ職ヲ奉シ居候類ハ都テ番
人ト改稱可致此旨相達候事
○第二百二十六號 (六月二十五日) (布)

本年第四百一十一號布告西洋形權衡大藏省検査極印別紙ノ通ニ候條此段相達候事
(別紙)

大藏省西洋形權衡検査印面

大藏
省檢

大藏
省檢

檢

(原書印面署名)

○第二百二十七號 (六月二十五日) (布)
盜賊窩主律例別紙ノ通被定候條此旨相達候事
(別紙)

盜賊窩主條例

凡竊盜ノ窩主再犯以上ニ係ル者ハ律ニ照シ造意不造意同行不同行分贓不分贓ヲ分チ並ニ犯數ニ計
へ竊盜ト同ク罪ヲ治ス

○第二百二十八號 (六月二十五日) (布)

集議院ヲ廢シ同院從前ノ事務ハ左院ニ於テ取扱候條此旨相達候事

○第二百二十九號 (六月二十五日) (布)

左院中議生成廢候事

○第二百三十號 (六月二十七日) (布)

從來飛脚ト稱シ物貨運送ヲ業ト致候者一定ノ規則無之且準備資本ニ乏シク猥リニ危難辨償等ノ口
請合ヲ以テ通貨物品ヲ引受運送致居候處往々不當ノ運賃ヲ貪リ或ハ滯滯紛失ノ弊ヲ起シ候ニ付本
年九月一日ヲ限リ私ニ物貨運送ノ業ヲ營候儀一切令禁候條以來右營業致度者ハ陸運元會社へ入社
或ハ合併候歟又ハ其規則資本等詳明具狀シ管轄廳ノ調査ヲ經テ驛遞頭ノ免許ヲ可受事
○第二百三十一號 (六月二十八日) (布)

明治六年六月 太政官 第二百二十七號 第二百二十八號 第二百二十九號 第二百三十號 第二百三十一號 三〇九

十三年第三十六號
布告ニ依リ消滅

十二年第十六號布
告ヲ以テ廢止

八年第五十九號布
告ヲ以テ左院廢止

十三年第三十六號
布告ニ依リ消滅

偽造寶貨條例別紙ノ通制定候條此旨相達候事
(別紙)

偽造寶貨條例明治六年六月

凡紙幣ニ印スル漏印及ヒ倒用スル者ハ一張ニ懲役十日三張毎ニ一等ヲ加ヘ罪懲役七十日ニ止ル若シ検査官吏朦朧交收スル者罪亦同

○第二百三十二號 (六月二十九日)(布)

勅任官記勅授位記並出仕官記書式別紙雛形ノ通改定候條此旨相達候事

(別紙雛形)

改定書式

(舊式中ノ御璽並ニ太政官印正院之印摺テ朱)

十六年太政官第七
號及以テ武官
記及職記式ヲ改定
ス十八年同第六十
九號同十九年勅令
第一號同第六號二
十年同第十號參看

勅任官記式

| |
|--------------|
| 官位苗字名 |
| 任參議 |
| 太政大臣位苗字名奉 |
| 明治御 年 月 日 |

勅授官記式

| |
|--------------|
| 位苗字名 |
| 敘正三位 |
| 太政大臣位苗字名奉 |
| 明治御 年 月 日 |

轉免等記入ハ總テ辛未十二月改定官書式ノ如シ

七月十五日太政官
途ヲ以テ正設

勅補官記式

| |
|--------------|
| 官位苗字名 |
| 補三等出仕 |
| 太政大臣位苗字名奉 |
| 明治御 年 月 日 |

奏補官記式

| |
|----------------|
| 官位苗字名 |
| 補五等出仕 |
| 太政大臣位苗字名奉 |
| 大内史位苗字名奉 |
| 明治太 官 年 月 日 |

判補官記式

| |
|----------------|
| 苗字名 |
| 補式部寮十等出仕 |
| 大内史位苗字名奉 |
| 明治正 印 年 月 日 |

ノ現務爲取扱候處此度大藏省ニ於テ官金出納取扱方ヲ第一國立銀行ヘ命シ別紙ノ通約定相設候ニ付向後府縣ニ於テモ右約定ノ成則ニ從ヒ草案ヲ設爲シ爲替出納等爲取扱候モノ名前取調都テ大藏省ヘ伺出其指圖ニ任セ約束等相定出納筋嚴重取締可致事

(別紙)

大藏省第一國立銀行金銀取扱規則

大藏省ノ金銀出納事務ヲ第一國立銀行ニ命シ其取扱ヒヲナサシムルニ付右從事ノ手續キ及ヒ出納ノ諸規則トモ大藏省官員ト右銀行頭取取締役等ト協議決定スル條々左ノ如シ

第一條 此銀行ハ東京ヲ根據トナシ京都大阪橫濱神戸ニテ大藏省ニ收納スヘキ金銀或ハ拂渡スヘキ金銀ノ取扱ヒヲ命スルニ付テハ其事務取扱ヒノ際ニ於テハ大藏省官員同僚ノ心得ヲ以テ誠實ニ之ヲ勤ムヘシ

第二條 大藏省ヘ上納スル金銀ハ總テ此銀行本店又ハ出張所ニテ請取眞實見改ノ上納主ヘハ銀行ノ預リ手形ヲ渡シ納主ハ右預リ手形ニ納證書ヲ添出納察ヘ持參シ本納ノ手續ヲナスヘシ出納察ニ於テハ更ニ銀行ノ金銀預リ帳ヘ記載シ證印ノ上最前ノ手形ハ銀行ヘ返達シテ出納察ヨリノ預リ手形ト引換ヘシム可シ

第三條 此銀行ニ於テ取扱フ金銀ハ新貨又ハ在來通用ノ貨幣幣トモ紙包スヘキ分ハ其離形並一種ノ銀行封印ヲ刻シ當省預ケ金ニ限リ此印ヲ用ル爲メ印面上隱微ニ標信ヲ付シ右印影等兼テ大藏省ヘ差出シ置キ且封緘上ニ記載スル年月日改人包人ノ名前印形トモ各其位置ヲ定メ豫メ覆封ノ患ヲ防クヲ注意シ必ス異様ノ封緘ヲ嚴禁ス可シ

但シ各貨幣モ受渡ノ上ニ於テ敢テ此封緘ノ儘流通ヲ許スニ非ス尤請取人ノ意見ニ依リ此封緘ヲ信用スルモハ格別タル可ク若シ後日此封緘ニ付テノ爭論或ハ種々ノ苦情之レアルモ又ハ損

失アルトモ大藏省ニ於テ之レヲ處分スルノ理ナク銀行ニ於テモ其損失ハ辨償セサル可シ

第四條 改濟金銀ノ内若シ贖金銀或ハ不足金等アリテ追テ取調ノ上全ク銀行取扱ヒ向疎略錯誤ニ出ルコト明瞭ナル時ハ其價或ハ不足丈ノ一倍ヲ合シテ償ハシム可シ

但萬一作爲シテ釀出スル件アル時ハ精細ニ其由ヲ取札シ處斷ノ上關涉ノ者ハ至當ノ法ニ處シ其損失スル金銀ハ第十三條ノ通タル可シ

第五條 大藏省ヨリ諸方ヘ渡金ハ兼テ出納察ニ設ケアル切符地紙ヘ拂金ノ員數并ニ其渡シ先ノ名前トモ記載シ之レヲ請取主ヘ相渡シ銀行ト請取主ト直引合ニテ通用貨幣ヲ引換ヘシム可シ尤受拂計算ノ爲メ毎月兩度宛或ハ出納察ノ都合ニ因テハ其時々元帳ト切符ト照查ノ上差引勘定ヲナシ右切符ハ出納察ヘ返上シ殘金銀ハ何時ニテモ上納相成ヘキ様致スヘシ

但銀行ニテハ毎日預リ金ノ種類分ケ諸所出張銀行ノ預リ金高内譯ヲモ取調日々計表ヲ作り之レヲ出納頭ヘ差出スヘシ尤橫濱ハ毎三日大阪ハ毎五日ニ計表可差出答ニ付東京本店ニ於テハ此日間丈ハ彙ニ差出タル員數ヲ以テ調査ス可シ

第六條 此切符ヲ以テ再ヒ他ヘ運用スルコトハ嚴禁タル可シ

第七條 大藏省ノ都合ニ因リ京都大阪橫濱神戸ニ於テ他方ヘ拂渡ス可キ金銀ハ便宜其地ニアル銀行ニ於テ前條ノ手續ニ從ヒ渡シ方ヲナサシムヘクニ付切符持參ノモノヘ其地ニテ差支ナク渡方ヲ取扱フヘシ尤其地銀行預リ金ノ都合ハ毎日各出店預リ高ノ計表ヲ以テ兼テ之ヲ詳知シ出納察ヨリ成式ケ其高ヲ越エサル様心ヲ用フ可シ

第八條 預リ金現額ノ種類ニ拘ラス出納察ノ都合ニ因リテ洋銀或ハ各貨幣ノ交換ヲ命スルコトアラハ此銀行ニ於テ新貨幣或ハ圓札官省札ヲ除クノ外ハ時ノ相場ヲ以テ取引ヲナスヘシ自然預リ金ノ内舊藩札アル時ハ其時々出納頭ノ指圖ニ從ヒ東京ハ紙幣本察京都大阪神戸ハ大阪出張紙幣察

ニ申出圓札ト引換ヲ乞フ可シ

第九條 此銀行ニ於テハ懺成名代ヲ撰ヒ兼テ其者ノ印鑑ヲ差出シ置ク可シ然ル上ハ各地方ニ於テモ其者ノ印鑑ヲ目當ニ請渡ヲナシ萬一其者預リ金ヲ引負スルカ又ハ其他ノ不都合アレハ其責ハ本店ヘ歸シ不足金等ハ勿論本店ヨリ之ヲ償卻ス可シ

第十條 此銀行ニ於テ盜難又ハ水火難等之レアリ預ケ金銀ヲ紛失スルコトモ凡テ本店銀行ノ請負タル可シ

但非常ノ變災ハ此限ニアラス

七年太政官第三百三十八號通ヲ以テ預ケ金ノ相當高ト改

第十一條 此銀行ニ於テハ預リ金ノ質物トシテ公債證書此公債證書ノ割合ハ一般融通スル所ノ時ニ依リ自然高低スルニ至リテハ其時々大藏省並銀行ノ都合ニ依リ雙方承諾ノ上右質物ノ高ヲ増減スルコトアルヘシ又ハ確實ナル預ケ金貸出金ノ證又ハ家作地面地券ノ類至正ノ實價ヲ積算シ其確實ヲ保證スル爲メ兼テ之ヲ差入置ク可シ尤右高ハ預ケ金ノ半高ヲ以テ目途トナシ時ニ於テ之ヲ増減交換スルコトアル可シ

第十二條 此銀行ノ預金高ハ前條質物ノ都合ニヨリ常ニ貳百萬圓或ハ百五十萬圓ヲ以テ極度トナス可シ若此決定ノ金額ニ超越スル時ハ大藏省金庫ヘ繰入又ハ他ノ銀行ヘ預ケ方ヲナス歟或ハ別ニ確實ノ保證ヲ差出シ此銀行ニ預ルコトアル可シ

第十三條 此銀行ノ本店ハ申ニ及ハス各地出張所等ニテ萬一公金ヲ引負スルコトアル時ハ兼テ差入レ置タル貨物ハ勿論速ニ償辦ノ手續ヲナシ其引負ニ於テ生スル損分ハ便宜ノ處分ヲナシテ之ヲ取立且ツ其引負ノ次第取札ノ上國法ニ從ヒ至當ノ罰ニ處ス可シ

第十四條 東京ハ素ヨリ各地共ニ毎週一度出納察官員此銀行ニ出張シテ諸帳面ノ記載方出納ノ順序及ヒ金庫ノ有高ヲ取調各種ノ貨幣内譯トモ検査スヘシ尤東京銀行於テハ各種ノ拂金ヲナシ省中持出シ金等ノ都合ニ因リ暫時庫中ヨリ假ニ差出シ置ク所ノ金高ヲ計リ預ケ金總額ノ内拾萬圓

マテハ除之計算相立可シ

但本文ノ外臨時出張スヘクニ付諸帳面其外錯亂之レナキ様順序相立置可シ

第十五條 諸上納金ノ内未タ本納ノ手續ニ至ラス假預リノ分ハ別簿冊ヲ設ケ夫々順序ヲ立テ金種並納先等詳明ニ記載シ別段ニ預リ置ヘシ此金ト雖モ勿論銀行ニ於テ自己ニ運用ス可カラサルハ申迄モ之ナク候得共萬一不分明ノ處置致シ候節ハ其金高一倍ノ違約料ヲ差出ス可シ

但東京並各地トモ出納察ハ勿論造幣租稅土木紙幣諸察ノ官員臨時此銀行ヘ出張シ右預ケ金ノ有高及簿冊ノ記載方ヲ検査ス可シ

第十六條 此銀行ニ於テ金銀受拂ノ取扱ヒ並預リ金ノ請負等ヲナスニ依リ保險並手数料トシテ預ケ金ノ内高百萬圓迄ハ百分ノ三右以上ハ百分ノ二ト定メ毎年六月十二月ト兩度ニ之ヲ拂ヒ渡ス可シ

但各地有高ノ内ヲ爲換スルニ一口ト金高百萬圓未滿ナレハ手数料ナク銀行ニテ便宜之ヲ交換スヘシ尤百圓以上ノ高ナレハ其時ノ相場ニヨリテ爲換打歩ヲ遣スヘシ若又全ク現金ニテ運輸ノ節ハ相當ノ運輸費ヲ渡スヘシ

附リ各種爲換打歩ノ割合ハ相當ノ見込ヲ以テ時々銀行ヨリ出納察ヘ申立置ク可シ
右ノ條々ノ約定スルニ付此書面ニ通テ作リ保證ノ爲メ各其姓名ヲ自記シ且之ニ調印シ本紙一通ハ大藏省ヘ納メ他ノ一通ハ銀行ヘ交付スル者也

明治六年六月

大藏省事務總裁

參議大隈重信 印

出納頭馬渡俊邁 印

検査頭安藤就高 印

第一國立銀行頭取

取締役

- 三井八郎右衛門 印
- 三井三郎助 印
- 三井次郎右衛門 印
- 三井元之助 印
- 小野善助 印
- 小野善次郎 印
- 小野善太郎 印
- 小野善右衛門 印
- 三野村利左衛門 印
- 永田甚七 印
- 向井一郎兵衛 印
- 行岡庄兵衛 印
- 田畑謙藏 印
- 古河市兵衛 印
- 江林嘉平 印
- 齋藤專藏 印
- 今井友五郎 印
- 脇田久三郎 印
- 三野村利助 印

支配人

- 山縣平八 印
- 向井小右衛門 印
- 松本常造 印
- 近藤忠藏 印

○第二百三十八號 (七月三日)(布)

本年第八十五號布告各國在留公使以下ノ給料及其他洋銀ヲ以支給致來候分本年六月一日ヨリ新貨ヲ元ニ相立候儀ハ同日以後可相渡分ヲ改定致シ候儀ニテ同日以前繰越ヲ以既ニ渡濟ノ分ハ圓弗ノ差分相立ルニ不及候條此旨相達候事

○第二百三十九號 (七月五日)(布)

人民相互ノ諸證書面ニ爪印或ハ花押等ヲ相用ヒ候者間々有之候處當明治六年十月一日以後ノ證書ニハ必ス實印ヲ用ニ可シ若シ實印無之證書ハ裁判上證據ニ不相立候條此旨可相心得事但商法上ノ證書ニ商用印ヲ用ヒ請取通帳等ニ店判ヲ用ヒ候ハ別段ノ事

○第二百四十號 (七月七日)(布)

本年第一百十六號布告非常出兵戍兵更番ノ節人馬遣方章程第八則但書左ノ通增加候條此旨相達候事

○第二百四十一號 (七月八日)(布)

但先觸面ノ通現人馬集置不用相成候節ハ繼立賞錢ノ半高相渡候條區別明瞭相立可受取事
囚人賄料ノ儀無籍ノ外一切自費ニ候處一時不審筋ヲ以テ留メ置推糺ノ後事理明瞭放解ノ者ニ限り有籍ト雖モ自今總テ官費支給候條此旨相達候事

○第二百四十二號 (七月八日)(布)

附錄大政官第五十七年大政官第百二十三號通ニ依リ消

十五年大政官第七十號通ヲ以テ廢止

十年第四十四號布告ヲ以テ廢止

九年太政官第六十四號

戶籍法則中第廿則第廿二則第廿三則六ヶ年目戶籍改ノ條例追テ相違候迄不及施行候事

○第二百四十三號 (七月九日) (布)

壬申年第三百九號布告旅費定則第十章但書中左ノ通增補候條此旨相違候事
一臨時出張ノ者御用先ニ於テ免職ノ節其處ヨリ從前在職ノ地迄ハ舊官相當ノ旅費ヲ賜リ夫ヨリ鄉里迄免職歸國ノ旅費ヲ賜ルヘシ尤復命スルニ及ハス出張先ヨリ直ニ歸鄉候者ハ其處ヨリ鄉里迄免職歸國ノ旅費ヲ賜ルヘシ

一支廳等ニ於テ常務取扱中免職ノ節ハ其處ヨリ鄉里迄免職歸國ノ旅費ヲ賜ルヘシ若シ御用ノ都合ニ依リ本廳迄立戻リ候節ハ前條ノ通り賜ルヘシ

第四百一十一號

○第二百四十四號 (七月十日) (布)

東京ヨリ各地方ヘ往復ノ郵便ハ縣地本廳所在ノ内半ノ日或ハ丁ノ日等ノ分モ本年八月一日以來毎日相開キ遞送セシメ候此旨布告候事

○第二百四十五號 (七月十四日) (布)

本年二月第二百一十一號金札引換公債證書發行ノ儀布告候處詮議ノ次第有之本年一月廿九日以後一ヶ月五朱ノ割合ヲ以テ利子可拂渡候條此布令到達ノ日ヨリ四十日間ニ右證書交收ヲ可願出若此期限ニ後願出候者ハ本年三月十四日以前ノ利子ハ不相渡候此旨布告候事

○第二百四十六號 (七月十五日) (布)

米麥ノ儀是迄海外輸出制禁候處國內ノ都合ニ依リ海關無稅ヲ以來ル八月一日ヨリ輸出差許候尤時宜次第此布告ヲ變換候節ハ二月以前ニ可相違此旨布告候事

○第二百四十七號 (七月十七日) (布)

今般訴答文例並附錄別冊ノ通被相定候ニ付來ル九月一日ヨリ原被告人共訴答文式都テ此例ニ照準

可致此旨相違候事

(別冊)

訴答文例

第一卷 原告人ノ訴狀

第一章 原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第一條 訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管轄ノ村役場ノ添翰ヲ以テ被告人ノ現任管轄ノ村役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書付ヲ取タル後訴狀ヲ作ル可シ若シ住所氏名身分明瞭ナラハ其書付ヲ取ルニ及ハス

住所トハ某管下某國某郡某村住居又ハ寄留ト記スノ類

身分トハ官名役名華族士族神職僧尼百姓何職何商賣何渡世ト記スノ類

若シ一戸ノ本主ニ非スシテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某厄介ト記ス可シ

第二條 原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄ノ村役場ニ願ヒ役場ノ交通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書付ヲ取ルモ亦妨ケ無シトス但シ役場交通ノ入費ハ原告人ヨリ償フ可シ

但此章原告外國人ナル時ハ本人名前本國職分及寄留ノ處ヲ訴狀中ニ記載シ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載ス可シ

第二章 代書人ヲ用フル事

第三條 原告人訴狀ヲ作ルハ必ス代書人ヲ撰ミ代書セシメ自ラ書スルヲ得ス但シ從前ノ差添人ヲ廢シ之ニ代ルニ代書人ヲ以テス

第四條 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付被告人ト往復スルノ文書モ亦代書人ヲシテ書セシメ且

十年司法省丁第二十七號

八年第四十四號

制度變革ニヨリ凡

第三百三十九號

七年第七十五號

代書人ノ氏名ヲ記入セシム可シ若シ代書人ヲ經サル者ハ訴訟ノ證ト爲スコヲ得ス

第五條 代書人疾病事故アリテ之ヲ改撰スル時ハ即日頼主ヨリ裁判所ニ届ケ且ツ相手方ニ報告ス可シ其裁判所ニ届ケス被告人ニ報告セサル以前ハ假令代書スルモ代書人ト看做スコヲ得ス但外國人ハ此章ノ限ニアラス

第三章 訴狀ノ定則ノ事

第六條 訴狀ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 訴狀ハ簡明確實ニシテ憑據ト爲スコキ事件ヲ掲ケ文飾冗長ナラサルコトニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ナキ事件ヲ述ルコトヲ得ス

第二 一切ノ訴狀ハ首ニ原被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ共末ニ年月日ヲ記シ原告人ト代書人トノ氏名連印スヘシ附錄第一號ヲ見合ス可シ

但外國人ノ爲ニハ第一章但シ書ヲ見ル可シ

第三 訴狀ノ末ニ署スル氏名ハ其本人自署ス可シ若シ自署スルコト能ハサル時ハ共冒ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第四 訴狀ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具ス可シ但外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以認ルコトヲ得ヘシ其日本翻譯ハ裁判所ニ於テ正副二通ヲ認メ共手数料ヲ取立ツヘシ

第五 被告人ノ住所呼出ヲ受ク可キ裁判所ノ八里ノ距離外ニ在ル時ハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左側ニ記載ス可シ若シ八里以内ナル時ハ其里數ヲ記載スルニ及ハス

第四章 訴狀ノ書式ノ事

第七條 貸附米金等淹滞ノ訴狀

貸附米金等淹滞ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ計算ト貸渡シタル年月日トヲ標記シ次ニ證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ過キテ返済セサル事情ヲ書ス可シ附錄第二號ヲ見合ス可シ田島ヲ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ損料金又ハ諸種ノ立替金又ハ召抱人等ノ引負金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家等ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

但以下十九條迄原告外國人ナル時ハ其訴訟ノ趣意並願意ヲ簡明ニ記載ス可シ但附錄第十八號ヲ見合ス可シ

第八條 預ケ米金淹滞ノ訴狀

預ケ米金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預ケタル年月日トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返済セサル事情ヲ書ス可シ

借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持參金又ハ實家若クハ親族等ノ仕送り金ヲ受取ントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第九條 賣掛代金淹滞ノ訴狀

賣掛代金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標記シ次ニ其帳面總計ノ高ヲ出シ之ニ被告人ノ證明アルヲ記入シ次ニ違約淹滞シタル事情ヲ書ス可シ附錄第三號ヲ見合ス可シ賣掛代金又ハ旅籠代金賄代金等通帳附込帳等ニ被告人ノ證明アル時ハ原告人ノ證據ト爲スコヲ得ス

第十條 手附金買賣違約ノ訴狀

諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限内ニ殘金ヲ渡サントスル時ニ至リ被告人違約シテ諸物品ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ買付タル物品ノ總高次ニ手付金ヲ渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物品ヲ受取可キ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ得ス

十七年司法省甲第一號告示ヲ以テ訴狀ノ行數等ヲ改メ

書ス可シ附錄第四號ヲ
見合ス可シ

諸物品ヲ賣リ手附金ヲ受取リ約定期限ニ至リ殘金ヲ受取ル可キ時ニ被告人違約シテ殘金ヲ渡ササルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ手附金ヲ受取リタル年月日及ヒ殘金ヲ受取リ物品ヲ渡ス可キ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ附錄第五號ヲ
見合ス可シ

第十一條 受負料淹滞ノ訴狀

諸職業受負淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ受負ヒタル年月日ト受負ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未タ受取ラサル金數トヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ

第十二條 奉公人違約ノ訴狀

奉公人ニ年期ヲ約シ前金ヲ渡シ其年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取返サントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ抱入レタル年月日ト約定ノ年期ト前渡シノ金數トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ

職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第十三條 專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀

專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ摸倣密賣スル者ヲ差留メントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル年月日ト免許ヲ受タル役所ノ名ト專賣免許ノ年限トヲ標記シ次ニ免許ノ證印又ハ證書ヲ寫載シ次ニ其密賣ノ事情ヲ書ス可シ

諸商工專賣ノ免許ナクシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨アルヲ以テ他人ノ商業ヲ差留ル事ヲ訴ルコトヲ得ス

第十四條 商社中取引ノ訴狀

商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人ニ對シ各種ノ取引ノ米金又ハ物品ノ類ニテ乘合商賣ト稱スル者モ證書確實ナル者ハ之ヲ訴ルコトヲ得可シ其訴狀ハ取引ノ摸倣ニ付キ各種ノ本條ニ照ス可シ

先ニ開キシ商社ニ後ニ開カントスル商社ノ妨クルコトアルヲ以テ之ヲ訴ルコトヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯スコトヲ得サルノ法ト相抵觸スルコトナカル可シ第十三條ヲ
見合ス可シ

第十五條 夫妻離別ノ訴狀

夫妻離別ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及ヒ婚姻ノ年月日ヲ標記シ次ニ其戸長役場ヘ届置キタル戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離別ヲ爲ス可キ原由ヲ書ス可シ

原告人夫ナレハ其父母若シ父母在ラサレハ祖父祖母父母在ラサレハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等ノ親同等ノ親在ラサレハ昇族ノ親昇族ノ親在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ與書連印ヲ爲ス可シ附錄第六號ヲ
見合ス可シ

原告人妻ナルモ前條ニ照シテ其父母親族等ヨリ訴フ可シ若シ事危急ニ出テ親族等ニ告ルニ暇ナキ時ハ自ら訴フ事ヲ得可シ

第十六條 養子女ヲ離別スル訴狀

養子女ヲ離別スルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ養子女ノ生年ト其養子女トナシタル年月日ヲ標記シ次ニ原被雙方ノ戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離別ス可キ原由ヲ書シ原告人親族在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ與書連印ヲ爲ス可シ

本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴狀モ本條ニ照ス可シ若シ本生父母在ラサレハ其親族ヨリ訴ルコトヲ得ヘシ

養子女ヨリ養父母ヲ相手取リテ自ら離別ヲ請ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第十七條 家督相續ノ訴狀

家督相續ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ハ死亡ノ年月日生父母ハ其生年ト原告人生年トヲ標記シ次ニ其原被告方ノ戸籍人別ト讓狀遺狀等ノ證書アレハ其全文ヲ寫載シ次ニ自己相續ス可キ條理ト被告相續ス可キ條理ヲキコフヲ書ス可シ附錄第六號

第十八條 田畠山林等賣買違約ノ訴狀

田畠山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ヲ受取ラントスルノ訴狀及ヒ貸地貸家ヲ取戻サントスルノ訴狀モ第十條ノ第一項ニ照ス可シ

田畑山林屋敷建家等ヲ賣リ之ヲ引渡シテ其代價受取ントスルノ訴狀モ第十條ノ第二項ニ照ス可シ

第十九條 經界ヲ爭フノ訴狀

國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ其舊記繪圖ノ枚數ヲ標記シ次ニ被告人ノ非理ヲ書ス可シ

舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト爲シ目錄ヲ附シ各番號ヲ朱記ス可シ

繪圖ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用ヒ被告ノ區域ハ黃色ヲ用ヒ爭フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他ノ經界ハ別色ヲ用ユ可シ附錄第七號

但第七條但シ書ヲ見ル可シ

第二十條 控告ノ訴狀

原告人預審又ハ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其裁決ニ服セスシテ之ヲ上等ノ裁判所ニ控告セントスルノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ訴訟ノ題目ト其年月日ト裁判所ニ呼出サレタル度數共年月日ト訟庭ニ臨ミタル裁判役ノ氏名ヲ知ルヲ得可キニ於テハ之ヲ記載シ次ニ其裁判言渡書ノ寫ト裁決ニ服

八年第九十三號布告ニ依リ但舊消滅

八年第九十一號布告ニ依リ消滅

セサルノ旨趣トヲ書シ且ツ前訴狀ノ寫ヲ別冊ト爲シ訴出可シ但シ控告人ノ住所ト被告ヲ爲ス裁判所トノ距離八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ得ルノ外裁決ノ言渡ヲ受タル日ヨリ三ヶ月ノ期限ヲ過ル時ハ控告ヲ爲スヲ得ス

預審又ハ終審ノ裁判以前ノ場合ニ於テ其裁判役ノ曲庇壓制等アルヲ以テ原告人ノ上等ノ裁判所ニ申告スル者モ亦本條ニ照ス可シ

第五章 一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止ル可キ事

第二十一條 原告人共人員多少ニ拘ラス訴狀ハ一事ヲ一冊ニ書スルニ限ル可シ又原告人一名ニシテ同時ニ數件ヲ訴フルモ訴狀ヲ各冊ニ作ル可シ

第六章 一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スヲ得ル事

第二十二條 貸借ニ事以上ニシテ原告人共別人ニ非レハ一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スヲ得可シ

第七章 原告人連名ノ訴狀ノ事

第二十三條 債主連名ノ證文ヲ以テ米金等ヲ貸附タル訴狀ハ連名ヲ以テ訴フ可シ若シ債主連名二人ナルヲ一人ニシテ訴フル時ハ他ノ二人ヨリ依頼ノ證書ヲ以テ訴フ可シ附錄第八號

第二十四條 債主二人以上ニシテ管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ訴ルモ乙ノ管轄ニ訴ルモ其便宜ニ從フ可シ

第八章 連名ノ被告人ヲ訴フル事

第二十五條 負債主連名ノ借用證文ヲ以テ貸渡シタル米金等ノ訴狀ハ連名ノ人數ヲ盡ク相手取ル可シ

第二十六條 負債主連名中若シ失踪死亡等ニテ相續人ナキ者アラハ連名ノ末ニ其人名ヲ記シ年月

日失踪死亡等ノ事ヲ其者ノ管轄戸長某ヨリ承ルト附載スヘシ附錄第九號ヲ見合ス可シ
第二十七條 負債主ノ連名中管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ於テ審判スルヲ願モ乙ノ管轄ニ於テスルヲ願フモ原告人ノ情願ニ任ス可シ

第九章 讓證文ヲ以テ訴ル事

第二十八條 甲ヨリ乙ニ貸シ又ハ預ケタル米金ヲ甲ヨリ丙ニ讓リタルニ乙ヨリ丙ニ返濟セスシテ丙ヨリ乙ヲ相手取り其米金ヲ受取ントスル訴狀モ住所氏名ノ次ニ甲ヨリ丙ニ讓リタル證文ヲ寫載シ若シ甲ヨリ丙ニ讓リタル證文無レハ甲ト乙ノ關係ニシテ乙ト丙トノ關係ナシトス故ニ丙ヨリ乙ヲ相手取ルコトヲ得ス附錄第十號ヲ見合ス可シ
第二十九條 父母祖父母等ノ貸附タル米金等ハ其家ノ相續ヲ爲シタル者ニ非レハ其子孫ニシテ貸附證文ヲ所持スト雖モ父母祖父母等ノ讓渡シタル證書ナキ時ハ之ヲ訴ルコトヲ得ス
但外國人ハ其本人ノ國法ニ隨ヒ正シキ權ヲ得可シ

第十章 代官ノ事

第三十條 原告人ノ情願ニ因テ代官人ヲシテ代官セシムルコトヲ許ス代官人ヲ用フル者ハ其訴狀ノ與書ニ代官人ニ依頼シタル旨ヲ記載シテ原告人及ヒ代官人ノ連印ヲ爲ス可シ若シ連印ナケレハ代官セシムルコトヲ許サス附錄第十一號ヲ見合ス可シ
第三十一條 原告人代官人ヲシテ代官セシムル時訟庭ニ同席スル事ハ其情願ニ任カス
第三十二條 訴訟ニ關係スル書類ハ代官人又ハ保證人ノ類ト雖モ原告人ノ證ト爲ル可キ者ハ原告人ノ撰ヒタル代書人ヲシテ代書セシメ其代書人ノ氏名ヲ記入セシム可シ原告人ノ自書ヲ用フルコトヲ得ス

九年第十八號告示ヲ以テ代官人ノ條廢止以下倣之

書面ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ヒ代書人ヲシテ代書セシム可カラズ若シ本人自署スルコト能ハサレハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

但第二章但シ書ヲ見ル可シ

訴訟中原告人又ハ代官人ノ疾病事故ニ因テ假リノ代官人ヲ出ス時ハ原告人又ハ代官人ヨリ假リノ代官人ニ依頼スルノ證書ヲ出ス可シ若シ證書ナケレハ假リノ代官人ト爲スコトヲ許サス附錄第十二號ヲ見合ス可シ

第二卷 被告人ノ答書

第一章 答書ノ定則ノ事

第三十三條 答書ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

- 第一 被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ル時原告人ノ陳述スル所條理アラハ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フ事ヲ得ヘシ其場合ニ於テハ代書人ヲシテ熟議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ヲ裁判所ニ呈ス可シ第四十七條及四十八條ヲ見合ス可シ
- 第二 原告人ノ述ル所非理不實ニシテ辨解ス可キ確證アラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ書ス可シ
- 第三 答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ答書ノ末ニ年月日ヲ記シ被告人ト代書人トノ氏名連印アル可シ附錄第十三號ヲ見合ス可シ
- 第四 答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ユ可シ若シ本人自署スルコト能サル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ
- 第五 答書ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具ス可シ

十七年司法省甲第一號告示ヲ以テ答書ノ行數等ヲ改ム

第二章 代書人ヲ用フル事
 第三十四條 被告人自ラ答書ヲ書スルヲ許サス、必ス代書人ヲシテ代書セシム可シ、其代書人ヲ撰ミタル時ハ即日裁判所ニ届ケ且原告人ニ報告スヘシ、其他代書人ヲ用フル方法ハ第三條第四條第五條第六條ニ照ス可シ

第三章 代書人ノ事

第三十五條 被告人ノ代書人ヲ用ルモ、亦其情願ニ任ス、然レモ、必ス本人自ラ同伴シテ、訟庭ニ出席シ、其結局ハ本人ヨリ決答ヲ爲ス可シ
 第三十六條 被告人代書人ヲ出ス時ハ、答書ノ奥書及ヒ連印等ノ方法第三十條ニ照ス可シ
 第三十七條 答書ニ關係スルノ書類ハ代書人又ハ保證人ノ類ト雖モ、被告人ノ證ト爲ルヘキ者ハ、被告人ノ撰ミタル代書人ヲシテ代書セシメ、且ツ代書人ノ氏名ヲ記入セシム可シ、被告人ノ自書ヲ用フルヲ得ス
 書面ノ末ニ署名スル氏名ハ、其本人ノ自筆ヲ用ヒ代書人ヲシテ代書セシム可カラズ、若シ本人自署名ルコト能ハサル時ハ、其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

第四章 原告人ノ返リ證文ヲ所有シタル答書ノ事

第三十八條 負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原ノ證書ヲ還付セサルヲ以テ二重ノ催促ヲナス訴訟ハ、被告人其答書ニ返リ證文ヲ其米金受取ノ證書ヲ交付スルヲ云フヲ寫載シ次ニ原告人二重ノ催促ヲ爲シタル旨ヲ書ス可シ

第三十九條 原告人米金等ヲ受取リタルノミノ證書ニシテ貸附ノ米金ヲ受取リタル確證ノ文字ナク又ハ他ノ憑據トス可キ證跡ナキ時ハ、其米金ヲ受取タルノミノ證書ヲ以テ返リ證文ト看做ス可シ

ヲ得ス

第五章 原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事

第四十條 借用ノ米金等ヲ返濟ス可キ期限ニ至リ負債主ヨリ債主ニ熟議シテ返濟延期ノ約ヲ結ビ其證書ニ押印ヲ爲シタル債主ヨリ其約ヲ破リ本證文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札ハ返濟延期ノ證書アルコトヲ記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタルコトヲ書ス可シ
 第四十一條 負債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ債主本證文ニ據リ訴出タル理由アル時ハ負債主ナル者己レヨリ約ヲ破リタル返濟延期ノ證書ヲ以テ原告人破約ノ證トナスコトヲ得ス

第六章 原告人證書ヲ偽造シタル答書ノ事

第四十二條 被告人ノ證書ヲ原告人偽造シタル答書ハ其偽造ヲ證スル爲ニ管轄村ノ役場ニ届ケ置タル年月日ノ人別帳ノ寫ヲ記載シ次ニ此人別帳ノ印ト證書ノ印ト相違シタル旨ヲ書ス可シ

第七章 經界ヲ爭フ答書ノ事

第四十三條 國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ答書ノ方法ハ第十九條ヲ照ス可シ

第八章 既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件ヲ接續スル事

第四十四條 負債主米金ヲ返濟ス可キ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ル可キ米金アリテ其受取可キ期限モ亦タ過キ未タ訴ヘスト雖モ雙方均シク返濟ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ヲ接續シ差引ノ計算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ其別ニ受取ル可キ米金ノ證書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ爲スノ旨ヲ書ス可シ

第四十五條 負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ答ルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返濟セサルヲ以テ既ニ訴ヘ

ラレタル乙某ノ事件ト未ダ訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返濟ヲ爲ス可キ米金ヲ以テ
乙某ニ返濟センコトヲ答ルヲ許サス何トナレハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ス丙ノ借ル所ノ者
ハ甲ニシテ乙ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章 對決前熟議解認ヲ爲シタル答書ノ事

第四十六條 被告人訴狀ニ對シ辨解スルコト能ハサル者ハ速ニ原告人ト熟議シ對決前ニ解認ヲ爲シ
タル答書ハ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第十四號

第四十七條 前條ノ場合ニテ貸借淹滞ノ訴ニ起ル解認ノ答書ハ償ノ既濟又ハ未濟ト雖モ更ニ延期
ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照ス可シ各種違約ノ訴訟ハ原被告雙方ノ熟和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ條
約ヲ立テタル等モ亦前條ニ照ス可シ

第十章 對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四十八條 原告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返濟スルノ延期ヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シ其
審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解認ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ
旨趣ヲ書シテ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第十五號

第十一章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ解認ヲ爲シタル答書ノ事

第四十九條 原告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償センコトヲ
請ヒ原告人之ヲ承諾セハ熟議解認ノ答書ニ其延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ與書連
印ヲ爲サシム可シ附錄第十六號

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第五十條 原告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償センコトヲ請
ヒ原告人之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解認ノ證書ヲ呈セント

スル者ハ其答書ニ延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第十七號

訴答文例附錄

第一號

訴狀表紙ノ式 美濃紙、大牛紙、又ハ右寸法、
ニ同シキ紙ヲ用ニ可シ

年月日

某訴狀

住所

身分
氏名

某訴狀トハ假令ハ貸金ノ淹滞ヲ訴ルハ貸金催促ノ訴狀ト記シ流質地ノ爭訟ハ流質地引渡催促ノ訴
狀ト記スノ類

訴狀ノ式

住所

身分
原告人 氏名

某訴

八年第九十六號
布告ニ依リ用紙寸
法消滅以下倣之

第三百十二號ヲ以テ宛名毎號トモ第
十八號書式ニ照依
セシム

標記云々
右原告人氏名中上候私儀云々
年月日

住所
被告人 氏名
住所
代書人 氏名印

第二號

貸金催促ノ訴狀

貸金催促ノ訴

住所
原告人 氏名
住所
被告人 氏名

一元金何圓 年月日貸附
一利金何圓 年月日期限

合何圓
右證文ノ寫左ノ如シ
借用證文

一金何圓
右云々

貸主

名當

右原告人氏名中上候云々

年月日

某
御裁判所

借主 氏名
證人 氏名

住所
被告人 氏名印
住所
代書人 氏名印

第三號

賣掛代金淹滞ノ訴狀

賣掛代金淹滞ノ訴

| | |
|-----|----|
| 原告人 | 住所 |
| 氏名 | 身分 |
| 被告 | 住所 |
| 氏名 | 身分 |

一金何圓

右賣掛帳ノ總計高ニ御坐候

但帳面ニ被告人ノ證印有之候

若賣掛帳ニ非スシテ證文ナレハ其證文全文ノ寫ヲ出ス可シ

右原告人氏名申上候云々

年月日

| | |
|------|----|
| 原告人 | 住所 |
| 氏名 | 身分 |
| 被告 | 住所 |
| 氏名 | 身分 |
| 代書人 | 住所 |
| 氏名 | 身分 |
| 御裁判所 | |
| 某 | |

第四號

買附米引渡違約ノ訴狀

買附米引渡違約ノ訴

| | |
|-----|----|
| 原告人 | 住所 |
| 氏名 | 身分 |
| 被告 | 住所 |
| 氏名 | 身分 |

一米何石 此年月日買取約定済

代金何圓 何石ニ付

内何圓 年月日手附金トシテ渡済

殘何圓 年月日限現米引替ニ渡ス可キ約定

右約定證書ノ寫左ノ如シ

證書云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

| | |
|------|----|
| 原告人 | 住所 |
| 氏名 | 身分 |
| 被告 | 住所 |
| 氏名 | 身分 |
| 代書人 | 住所 |
| 氏名 | 身分 |
| 御裁判所 | |
| 某 | |

第五號

賣附生絲代金引渡違約ノ訴狀

賣附生絲代金引渡違約ノ訴

一金何圓 年月日限生絲引替ニテ
 元金何圓 年月日可キ殘金高ニテ
 元金何圓 年月日生絲何斤賣附
 但何斤ニ付何圓替
 内何圓 年月日手附金トシテ
 受取済
 右約定證書ノ寫左ノ如シ
 證書云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

住所

身分

氏

名

住所

身分

氏

名

原告人
被告人

住所

身分

氏

名印

代書人

某
御裁判所

第六號

妻離別ノ訴狀

妻離別ノ訴

夫 氏名當何職
 妻 氏名當何職
 年月日娶ル

某御役所ニ差出置候年月日ノ戶籍人別帳ノ寫左ノ如シ

人別帳云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

住所

身分

氏

名

住所

身分

氏

名

原告人
被告人

住所

身分

氏

名印

代書人

住所

身分

氏

名印

原告人ノ祖父
母父母等

前書申上候處相違無御坐候
年月日

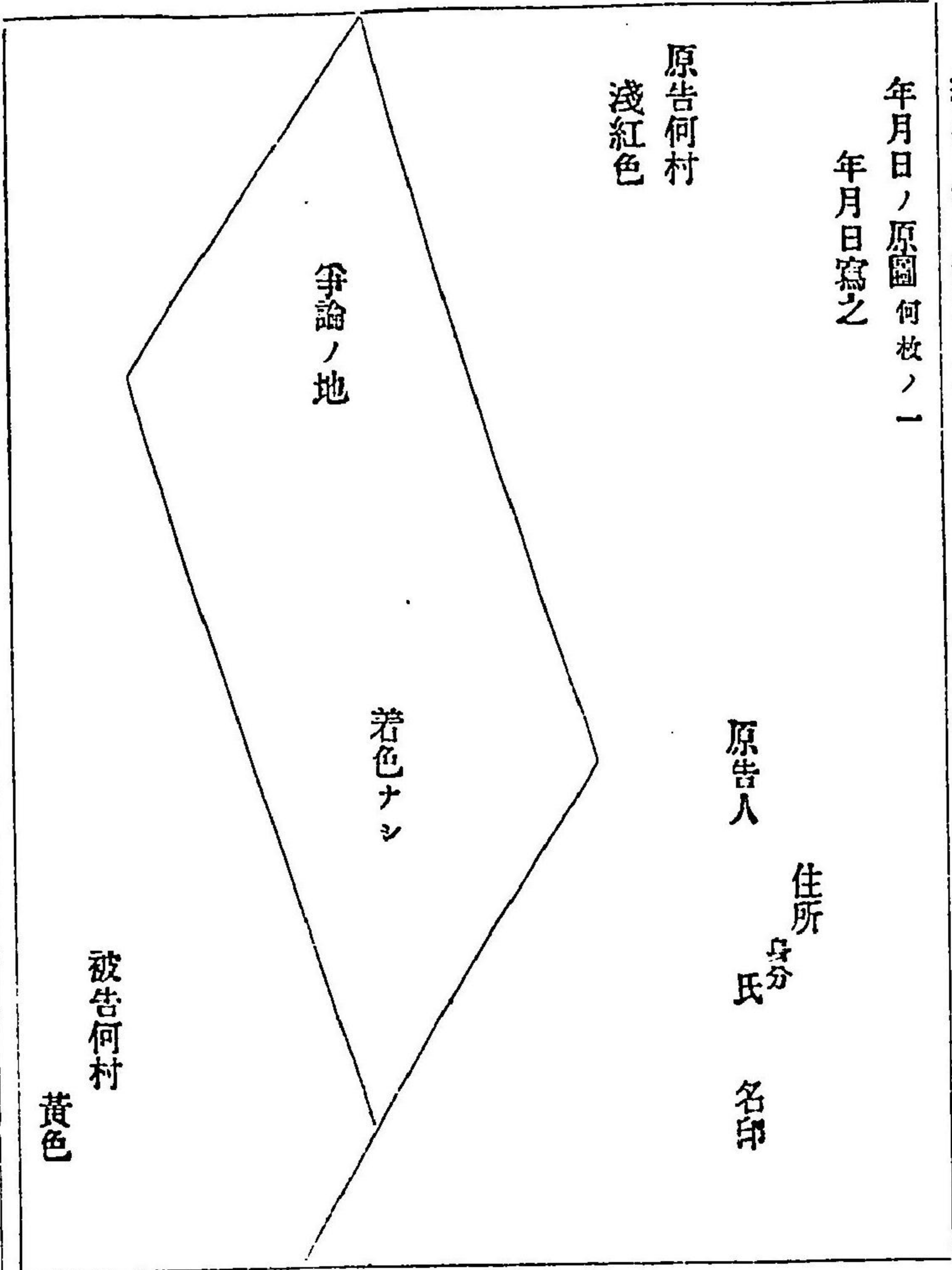
某

御裁判所

第七號

經界ヲ爭フ繪圖ノ式

年月日ノ原圖何枚ノ一
年月日寫之



第八號

原告人三人以上ナルヲ一人ニ任スル訴狀

某ノ訴

標記云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

| | | | |
|----|-----|----|-----|
| 住所 | 原告人 | 住所 | 被告人 |
| 身分 | 氏 | 身分 | 氏 |
| 名印 | 名 | 名印 | 名 |

| | | | |
|----|-----|----|-----|
| 住所 | 代書人 | 住所 | 被告人 |
| 身分 | 氏 | 身分 | 氏 |
| 名印 | 名印 | 名印 | 名印 |

前書ノ儀原告私共連名ニテ御願可申上管ニ御坐候處病氣云々ニテ難罷出ニ付何ノ誰江總代相頼候然ル上ハ何之誰ヨリ申上候事柄並ニ御受仕候事柄共後日ニ至リ私共ヨリ異議申上問敷候爲後證與印仕候

年月日

某
御裁判所

代書人 住所 氏 名印

第九號
被告人連名中脱走又ハ痴死人アルノ訴狀

原告人 住所 氏 名
被告 住所 氏 名
元住所 氏 名
被告人 住所 氏 名
右何ノ誰ハ年月日脱走致シ候
段何村役人何之誰ヨリ承知仕
候
被告人 住所 氏 名
右何ノ誰ハ年月日死亡致シ候

右原告人氏名申上候云々
年月日

段何村役人何之誰ヨリ承知仕
候

代書人 住所 氏 名印

某
御裁判所

第十號
讓證文ヲ以テ催促スル訴狀

某ノ訴
一元金何圓
一利金何圓
合何圓
右證文ノ寫左ノ如シ
證書云々

原告人 住所 氏 名
被告 住所 氏 名

右讀證文ノ寫左ノ如シ
 證書云々
 右原告八氏名申上候云々
 年月日
 氏 名印
 住所
 代書人 氏 名印
 身分

第十一號
 代、言、人、ヲ、頼、ム、訴、狀

某ノ訴
 標記云々
 右原告代、言、人、氏、名、申、上、候、云、々
 住所
 原告代、言、人、 氏 名
 身分
 住所
 被告、人、 氏 名
 身分

年月日
 氏 名印
 住所
 代書人 氏 名印
 身分
 前書之儀私ヨリ御願可申上答ニ御坐候處何々ノ旨趣ニ付何之誰江代言相頼候然ル上ハ何之誰ヨリ申上候事柄並ニ御受申上候事柄共後日ニ至リ私ヨリ異議申上問敷候爲後證眞印仕候
 年月日
 住所
 原告人 氏 名印
 身分
 某
 御裁判所

第十二號
 一、時、假、リ、ノ、代、言、人、ヲ、出、ス、證、書

住所
 當日代、言、人、 氏 名印
 身分
 右ハ何々ノ儀私ヨリ訴出候付罷出委曲申上度奉存候處病氣ニ付今日限何之誰へ代言相頼候若御尋之儀同人ニテ御對申上兼候廉有之候ハ、私快氣次第

罷出可申上候

年月日

住所

身分
氏名印

住所

身分
氏名印

某

御裁判所

第十三號

答書表紙ノ式 用紙寸法第一號
訴狀ノ法ノ如シ

年月日

某ノ答書

住所

身分
氏名

答書ノ式

住所

身分
氏名

某ノ答

右住所身分何之誰何々之儀訴出候付今何日御呼出之御狀拜見仕御答申上候

私儀云々

證據ノ書類アラハ其寫ヲ記載スヘシ
右之通御坐候

年月日

住所

身分
氏名印

某

御裁判所

第十四號

對決前熟識解訟ノ答書

住所

身分
氏名

被告人

某ノ訴濟口ノ答
右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼出ノ御狀拜見仕原告人江熟
談濟方仕候趣申上候
私儀云々
年月日

前書被告人何之誰ヨリ申上候通熟談濟方仕候付此上對決ノ御裁斷不奉願候
住所
代書人 氏 名印
身分

年月日

原告人

住所

氏 名印

代書人

住所

氏 名印

某
御裁判所

第十五號

對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書

某ノ訴濟口日延ノ答
右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼出ノ御狀拜見仕原告人江熟
談之上濟方日延約定仕候段左之通御坐候
私儀云々
年月日

前書被告人何之誰申上候通熟談之上濟方日延約定仕候付來何年何月何日迄
御裁斷御猶豫奉願候
住所
代書人 氏 名印
身分

年月日

原告人

住所

氏 名印

代書人

住所

氏 名印

某
御裁判所

第十六號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル解訟ノ答書

住所

身分

氏名

被告人

某ノ訴何之誰ヨリ日延代償ニテ濟口之答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼出之御狀拜見仕原告人江熟

談之上親族中何之誰ヨリ日延代償約定仕候段左之通御坐候

私儀云々

年月日

氏名印

住所

身分

氏名印

代書人

前書被告人何之誰申上候通私共ヨリ日延代償ノ約定仕候段相違無御坐候

住所

身分

氏名印

代償人

年月日

住所

身分

氏名印

代書人

前書被告人何之誰申上候通私共承諾仕候付此上對決ノ御裁斷不奉願候

年月日

住所

身分

氏名印

原告人

某

住所

身分

氏名印

代書人

御裁判所

第十七號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル答書

住所

身分

氏名

被告人

某ノ訴何之誰代償濟口日延ノ答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼出之御狀拜見仕原告人江熟

談之上親族中何之誰ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段左之通御坐候

私儀云々

年月日

住所

身分

氏名印

代書人

前書被告人何之誰申上候通私共ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段相違無御坐

候

年月日

代價人 住所 氏 名印

代書人 住所 氏 名印

前書被告人何之誰申上候通熟談之上何之誰ヨリ代償濟方日延約定任候付來
何年何月何日迄御裁判御猶豫奉願候

年月日

原告人 住所 氏 名印

代書人 住所 氏 名印

某
御裁判所

第十八號

外國原告人訴狀ノ式

訴狀
原告人 住所 氏 名
被告人 住所 氏 名

右原告人氏名ヨリ右被告人氏名ニ對シ當御裁判所へ左之通訴訟申上候

第一云々

第二云々

第三云々

依之原告ヨリ御裁判所へ云々被成下度願上候事

日本地名
年月日

原告人 氏 名花押
代理人 氏 名花押

某

裁判所長
氏 名

○第二百四十八號 (七月十七日) (布)

大藏省中國債寮被置候條此旨布告候事

但二等寮ノ事

○第二百四十九號 (七月十七日) (布)

神社佛寺共古來所傳ノ什物衆庶寄附ノ諸器並ニ祠堂金等ノ類ハ神官僧侶ハ勿論氏子檀家ノモノタ
リ自儘ニ處分可致筋無之候條若不得已儀有之候ハ、委詳具狀ヲ以テ教部省へ可申立候此旨布告
候事

十年太政官第三號
通ヲ以テ廢止

九年教部省第三號
九年內務省
乙第三十九號
八年同甲第十六號
通テ看

○第二百五十號 (七月十七日) (布)
宮内省中内膳司内匠司調度司被廢候條此旨布告候事

府 縣

○第二百五十一號 (七月十七日) (布)
從前府縣分合廢置或ハ長官轉免等ノ際事務請渡ノ規則無之ヨリ往々諸事錯亂シ施政上多少ノ障
ヲ爲スモノ不少候ニ付別紙ノ通規則被相設候條自今渾テ右ニ照準シ請渡候様平常注意可致此段相
達候事

(別冊)

府縣事務受渡規則

第一章 廢府縣又ハ長官轉任免職等ノ節ハ奉職中ノ事務並取懸リノ事件後來ノ見込ヲ詳記セル演
說書ヲ作り先前ヨリ繼送ノ書並現今取扱ノ諸簿册等目錄ヲ添ヘ土地人民引渡新任舊官互ニ受渡
ノ證書ヲ交付スヘキ事

但長官轉任免職ノ節ハ其次官ヘ引渡シ追テ新官赴任ノ上其次官ヨリ更ニ新官ヘ可引渡事

(正)但長官轉任免職ノ節ハ其次官ヘ引渡シ追テ新官赴任ノ上其次官ヨリ更ニ新官ヘ可引渡事

第二章 管轄ノ一方分割合併ノ節モ右ニ準シ引渡ス可キ事

第三章 租税金穀何年ハ皆納何年ハ未納ノ譯並何年分ハ何々ノ帳簿大藏省ヘ差出置勘定 既濟何年
分何帳ハ既ニ差出何々帳ハ未タ差出サス等明了ニ演說書ニ記載スヘキ事

第四章 租税金穀上納既濟未濟ノ區別ヲ明ニシ別紙書式ニ倣ヒ仕譯書ヲ以引渡ス可キ事

第五章 出納課ニ屬スル金穀勘定帳ノ類大藏省檢査既濟未濟其外年賦返納等ノ譯詳細演說書ニ記
載ス可キ事

第六章 本年ノ出納ニ屬スル勘定ハ大藏省ヨリ請取元高及ヒ口々仕拂高別紙書式ニ倣ヒ仕譯書ヲ

規則中制度ノ變更
ニ依リ消滅ニ歸セ
シモノアリト雖モ
本令ハ事務請渡手
續ノ概略ナルヲ以
テ一々之ヲ記載セ
ズ

第四百二號參看八
年太政官第百六十
二號送テ以テ但書
改正

以引渡スヘキ事

第七章 府廳限取扱ノ金穀馬車人力車等増税ノ増分ヲ以テ道路橋梁修繕費等ニ宛テ候類又モ
縣廳造立費三分二同修繕費管内公帖差立貨等民費課出ノ類ヲモ云
總テ前章ニ照準シ元拂ヲ明ニシ仕譯書ヲ添ヘ引渡スヘキ事

第八章 聽訟斷獄未決ノ分ハ一件毎ニ是迄吟味ノ手續ヲ詳記シ司法省ヘ伺中ノ分ハ右寫書ヲ以テ
引渡スヘシ尤裁判所アル縣ハ此例ニアラス

第九章 溝河ヲ疏通シ堤防ヲ修築シ新道ヲ開キ工藝ヲ興シ勸業ノ方法ヲ設クル等ノ類許可ヲ得又
ハ手限リ施行シ未タ竣功ニ至ラサルモノハ最前稟議ノ旨趣利害得失ノ計算費用ノ出納及ヒ將來
踐行ノ考案ヲ演說書ニ詳記ス可キ事

第十章 受渡相濟次第其段新任ヨリ正院並大藏省ヘ届出ヘキ事

第十一章 先官ノ成績國家ニ鴻益アルモノハ勿論引渡條件ノ内其處分成規例格ニ乖戻スルカ或ハ
後來ノ弊害トナリ引受難キ件々ハ其事情ヲ詳ニシ主務ノ省ヘ稟議ス可キ事

第十二章 租稅出納共現在金穀ノ仕譯書ト右ニ關スル諸帳簿ノ結末トヲ照合シ差違ナキヲ詳知シ
テ後請取ヘキ事

但受取濟居ノ節米金仕譯書寫大藏省ヘ差出スヘキ事

第十三章 置金並堤防營繕等ノ費用臨時請取金其外諸稅取立金取立濟ニテ未タ大藏等ハ爲替方ヨ
リ取置候不動産ヲ記載スル證書並兼テ爲取替候約定證書又ハ其簿記計算ノ方法爲替納排ノ順序
等ニ至ル迄無遺漏請渡スヘキ事

第十四章 右ノ規則ニ隨ヒ一旦受渡證書交付ノ上ハ總テ新官引受調理スヘキ事

諸帳簿ノ類目錄ヲ添ヘ受渡スヘキ必用ノ書目左ノ通

一戸籍帳

一官員簿

| | |
|-----------|------------|
| 一 區長戶長印鑑帳 | 一 賞屬祿高帳 |
| 一 社寺明細帳 | 一 社寺朱黑印祿高帳 |
| 一 伺眉指合留 | 一 神社官祭書類 |
| 一 公布留 | 一 學校取扱書類 |
| 一 徵兵名前書上帳 | 一 賞典取計留 |
| 一 村々回狀順帳 | 一 民費取立帳 |
| 一 聽訟斷獄件名簿 | 一 贖贖金取立帳 |
| 一 入牢徒刑人名帳 | 一 警邏捕亡取扱書類 |
| 一 盜賊 居書類 | 一 處刑ノ者名前書帳 |
| 一 管轄地圖 | 一 檢地帳扣 |
| 一 高段別一村限帳 | 何年 |
| 何年 | 一 郡村地租帳扣 |
| 一 雜稅帳扣 | 何年 |
| 一 歲入皆濟帳扣 | 一 上計帳扣 |
| 一 租稅收納帳 | 一 貢額帳 |
| 一 割賦帳 | 一 租稅取立帳 |
| 一 免下場一村限帳 | 一 荒地一村限帳 |
| 一 雜稅下組帳 | 一 租稅下調帳 |
| 一 村々步刈帳 | 一 內見帳 |
| 一 釀造稅帳 | 一 石代相場書留 |
| | 但月々相場共 |
| | 一 船稅帳 |

| | |
|---------------------|-------------|
| 一 碓泊稅帳 | 一 銃獵免許稅帳 |
| 一 蠶種紙稅帳 | 一 生絲印紙 |
| 一 奴婢人力馬車稅帳 | 一 證券印紙二元拂帳 |
| 一 地券大帳 | 一 官內定用界紙 |
| 一 地引繪圖 | 一 牛馬渡世免許稅帳 |
| 一 證印稅帳並表 | 一 地券一筆限帳 |
| 一 開市場收稅帳 | 一 地券稅帳 |
| 一 官林帳 | 一 市中收稅帳 |
| 一 官有地箇所限帳 | 一 不用品拂代取立帳 |
| 一 新開墾下年季留帳 | 一 同拂代取立帳 |
| 一 官普請箇所付帳 | 一 荒蕪地其外拂下元帳 |
| 一 圍穀帳 | 一 未納金加息取立帳 |
| 一 出納御勘定帳 | 一 鑛山箇所付帳 |
| 一 凡積入用米金受取帳 | 一 村限明細帳 |
| 一 官員月給明細帳 | 一 郵便切手請拂帳 |
| 一 第一常備金遣拂仕譯書並小譯明細書共 | 一 計出並欠米明細帳 |
| 一 第二常備金繰替仕譯帳 | |
| 一 元何齊知事 家祿米明細帳 | |
| 一 用水開梓見守給米明細書 | |
| 一 捕亡入費仕譯書 | 一 免職並病死ノ官員 |
| | 一 被下品明細書 |

一 營繕 入用仕上帳
 一 貸附金穀元帳
 一 官舎拂代取立帳
 一 長官爲換方約定書
 一 縣廳限取立金仕譯帳
 一 官宅宿代取立仕譯帳
 一 爲換方ヨリ差出
 一 候證書並通帳
 右ハ一般平常取扱事務ノ書目ヲ概載候迄ニ付縣ニヨリ一簿冊ヲ以テ數事ヲ兼或ハ相洩ル、廉モ可有之右等ハ更ニ如此部分ヲ設備スルニ不及從前取扱來リ候簿冊其儘引繼取扱中又ハ將來廢與釐正等見込ノ事件ニ至ル迄詳ニ記載シ事理明瞭ナラシメ渾テ錯亂遺漏無之様請渡スヘシ

諸帳簿引渡書式

一 何帳簿

何冊

一 何仕譯或明細書

何冊

一 何留

何冊

一 何圖

何枚

一 合何冊何枚

右ノ通引渡申候也

年月日

苗字 名印

租稅米金引渡目錄書式

何縣知事 苗字 名殿

郡村地租ノ内收入高

雜稅ノ内

市街地券稅ノ内

一 米何程

一 金何程

釀造稅 許金ノ内

一 金何程

釀造稅 許金ノ内

總テ其年租稅ニ屬スル分ニテ引渡月迄取立タルモノハ其名目限リ記載スヘシ

合 米何程

内 米何程

金何程

外 金何程

米何程

金何程

大藏省納濟 但納證書何通

收入濟大藏省へ可納分

未納何月迄可收入分

右者拙者在勤中何年租稅ノ内當一月ヨリ何月迄收入米金引渡仕譯書面ノ通候也

何縣知事 苗字 名殿

苗字 名印

出納米金引渡目錄

一 米何程

一 金何程

内 金何程

金何程

米何程

金何程

凡積入用米金大藏

省ヨリ受取候分

第一常備金拂

第二常備金操替

貫屬祿渡

捕亡入費渡

此ハ諸縣限記載スヘシ

- 小以 米何程
 - 殘 米何程
 - 一金何程
 - 內
 - 金何程
 - 殘金何程
 - 一金何程
 - 一金何程
 - 一金何程
 - 小以金何程
 - 內
 - 金何程
 - 金何程
 - 合 米何程
 - 金何程
- 在高
- 大藏省納濟
但納證書何運
現在高
- 大藏省ヨリ請取
整繕費
- 何月何日渡濟
但請取證書何運
在高
- 不用品拂代
官舍拂代
官林拂代
贖贖金

但爲換方何誰外何人預リ證書何通通帳何册ノ通リ

右者拙者在勤中何年凡積入用米金並堤防營繕費ノ内何月ヨリ何月マテ諸渡殘諸品拂代金取立濟ノ分共書面ノ通候也

何府知事 苗字名殿

苗字名印

演說書文例

今般 何縣被廢
拙者 何縣ニ付縣政引渡ノ條件左ニ及演說候

一 常管轄ノ儀ハ家數何軒人口何人段別何程概テ地勢 山嶽 田野 平地 ニシテ 肥腴 運輸 不便 人民 勉勵 物産 多風 俗 厚 云々ノ國柄ニ有之候則戸籍帳管轄地圖地券大帳段別高帳御引渡申候

一 管内檢地ノ儀ハ 古檢六尺五寸 中檢六尺三寸 新檢六尺一分 竿相用候趣ニ有之則檢地帳寫御引渡申候

一 何郡何村外何ヶ村ハ 永年 定免 何村外何ヶ村ハ檢見租稅付致シ候檢見仕法ノ儀舊慣區々ニ有之候年ヨリ御規則ノ通改正坪竿ノ儀ハ 六尺三寸 竿用來候旨先申送ニ付同様相用申候

一 何郡何村某ヨリ同村某へ掛リ候地所境界出入一件年歷相立候事ニテ訴答證據判然不致猶實地見分ノ者可差出見込ノ處今般 廢縣ニ付書類其儘御引渡申候此上可然御處分有之度候

一 何年分出納御勘定去ル何月中大藏省へ差出置候處未檢査不相濟尤本年分ハ別紙仕譯書ヲ以殘米金御引渡申候

何府知事 苗字名殿

苗字名印

右文例ニ倣ヒ左ノ件々廉限無遺漏事實詳明ニ演述可致事

演說書ニ記スヘキ箇條

- 一 人民ノ勤惰風俗ノ厚薄施政ノ難易
- 一 土地ノ肥瘠運輸ノ便否
- 一 郡村制置ノ得失
- 一 租稅方法要略
- 一 備役方法大略
- 一 開墾牧場工藝場病院養兒養育法學校
- 一 外國人雇入有無並給料
- 一 官舎ノ營繕堤防橋梁ノ修築
- 一 鑛山ノ景況
- 一 支廳ノ箇所
- 一 港灣監船所
- 一 番人捕亡ノ配置
- 一 公園地
- 一 掛屋取扱ノ手續
- 一 官有公有ノ地拂下見込
- 一 市街郡村取締規定
- 一 懲役方法徒刑人員
- 一 囚徒犯罪ノ蹤跡
- 一 犯罪人追捕中ノ者
- 一 聽訟ノ條件

一 貸付金取立方法

右ノ外總テノ事務伺中及隨行中ノ分ハ其實況ヲ記載スヘシ

○第二百五十二號 (七月十七日)(布)

負債者身代限ニ遇フ節其者ヘ對シ貸金穀其他義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ノ分處置振左ノ通被定候條此旨相達候事

第一條 貸金穀又ハ義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ニハ訴出ルコトヲ許サ、ル規則ナレ、其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者右期限未滿内ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルコトヲ得ヘシ

第二條 定約期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ權利ヲ有シ身代限財產糶賣金ノ分配ヲ受ルコトヲ得ヘシ

第三條 請人證人等連印ニテ本人返濟相滞ルニ於テハ引受返濟可致ノ明文之レアル證書ヲ取置タル者ハ本人身代限財產糶賣金ノ分配ヲ受ケ尙ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至請人證人ニ掛リ之ヲ訴ルコトヲ得ヘシ

第四條 身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返濟セント欲スル時ハ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シテ原告人ノ承諾ヲ求ルヲ必要トス

第五條 負債者滿期ヲ保スル爲メ改テ請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シ原告人之ヲ承諾スル時ハ其原告人ハ此同ノ身代限財產糶賣金ノ分配ヲ求ムルコトヲ得ヘカラス

第六條 定約期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期限未滿内ニ訴フルモ滿期後ニ至リ訴フルモ共者ノ情願ニ任スト雖、身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取リ置タル債主ハ右動不動産ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付己レノ受取ル可キ金高ヲ求ルコトヲ得ヘキ而已ニテ糶賣

ヲ爲ス事ヲ拒ムヲ得可ラス

第七條 動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル者ハ其財産糶賣金ノ内ニテ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其定約ノ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ル可キノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置タル者ニ分配ス可キ金高ヲ引渡ス可シ

第八條 引當又ハ質物ヲ取置カサル金穀ノ債主定約期限未滿内ニ訴出ル時ハ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ヘキノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲ス可シ

○第二百五十三號 (七月十八日)(布)

火葬ノ儀自今禁止候條此旨布告候事

○第二百五十四號 (七月十八日)(布)

府 縣

本年六月第二四號布告ノ類卷冊ト雖モ盡ク揭示スヘキ旨布告候處全國一般ヘ相達スヘキモノト各應限リ可相心得モノトト問ハス概シテ之ヲ揭示候テハ事務繁忙ノ際徒ニ手數ヲ費シ候ニ付向後左ノ通區別ヲ立テ相達候條夫々可取計候此旨可相心得候事

各廳及官員限リ達書結文例

云々候條此旨相心得候事

全國ヘ布告結文例

云々候條此旨布告候事

華士族或ハ社寺ヘ結文例

云々候條此旨華士族ヘ布告候事

○第二百五十五號 (七月十九日)(布)

八年第八十九號布告ヲ以テ廢止

七年太政官第四十八號達十四年同第百一號達十九年勅令第一號ニ依リ消滅

十二年第三十六號布告ヲ以テ廢止

鎮臺條例別冊ノ通改定候條此旨布告候事

標題

軍管師管部

第一條至第十條

要塞部

第十一條至第十四條

憲兵部

第十五條至第十七條

府縣官部

第十八條

市非裁判所部

第十九條

近衛部

第二十條至第二十四條

檢閱使部

第二十五條至第二十八條

司令將官本務部

第二十九條至第五十六條

鎮臺條例

第一條 凡ソ 皇國域内ニ駐割スル各種ノ兵隊ハ別テ七軍管トナシ各鎮臺ノ司令將官ヲシテ之ヲ統率セシムル事左ノ如シ

第一軍管ハ第一師管(營所東京)第二師管(營所佐倉)第三師管(營所新澗)ヲ包括シ東京鎮臺ニ

統率ス

第二軍管ハ第四師管(營所仙臺)第五師管(營所青森)ヲ包括シ仙臺鎮臺ニ統率ス

第三軍管ハ第六師管(營所名古屋)第七師管(營所金澤)ヲ包括シ名古屋鎮臺ニ統率ス

第四軍管ハ第八師管(營所大阪)第九師管(營所大津)第十師管(營所姫路)ヲ包括シ大阪鎮臺ニ

統率ス

第五軍管ハ第十一師管(營所廣島)第十二師管(營所丸龜)ヲ包括シ廣島鎮臺ニ統率ス

八年第三十三號布告ヲ以テ改正

八年第三十三號布告ヲ以テ改正

第六軍管ハ第十三師管(營所熊本)第十四師管(營所小倉)ヲ包括シ熊本鎮臺ニ統率ス

第二條 凡ソ六軍管ハ其管下ノ兵員戰時ニ當リ略一軍ヲ興スニ足ルヲ以テ軍管ト名ツケ其師管ハ略一師ヲ興スニ足ルヲ以テ師管ト名ク

第三條 凡ソ師管ノ内又分テ數箇ノ營所ヲ置ク左ノ如シ

| | | | | |
|---------|------------|-------------|---|-----|
| 東京師管管内 | 小田原 | 静岡 | 岡 | 甲府 |
| 佐倉師管管内 | 水更津 | 水戸 | | 宇都宮 |
| 新潟師管管内 | 高田 | 高崎 | | |
| 仙臺師管管内 | 福島 | 水澤 | | 若松 |
| 青森師管管内 | 盛岡 | 秋田 | | 山形 |
| 名古屋師管管内 | 豊橋 | 岐阜 | | 松本 |
| 金澤師管管内 | 石川縣内 七尾 | 福井 | | 西京 |
| 大坂師管管内 | 兵庫 | 和歌山 | | |
| 大津師管管内 | 敦賀 | 津 | | |
| 姫路師管管内 | 鳥取 | 岡山 | | 豊岡 |
| 廣島師管管内 | 松江 | 濱田 | | 山口 |
| 丸龜師管管内 | 徳島 | 高知縣内 須崎浦 | | 宇和島 |
| 熊本師管管内 | 千歳 | 飢肥 | | 鹿兒島 |
| 小倉師管管内 | 福岡 | 長崎 | | 對馬 |
| | | | | 琉球 |

第四條 凡ソ營所ノ數四十師管ノ營所ト合シテ五十四トナシ各共區域ヲ畫シテ三府六十三縣略々相表裏シ以テ管内ノ靜謐ヲ保護セシム

八年第三十三號布告ヲ以テ改正

第五條 其北海道ハ第七軍管トス其守備方法他ノ諸道ト異ナルヲ以テ茲ニ之ヲ舉ケス

凡ソ六管鎮臺ニハ司令ノ將官一員ヲ置テ管内ノ軍務ヲ董督シ上 天皇大憲ノ下ニ屬シ直チニ陸軍卿ニ隷ス

第六條 其臺下ニハ各步騎砲工輜重ノ常備諸軍隊ヲ置キ以テ不虞ヲ警メ緩急ニ應シ四出回轉シテ方面ノ寇賊ニ禦ルノ備ヘヨナサシム

第七條 凡ソ師管ノ營所ニハ唯步兵一聯隊ヲ置キ以テ管内ヲ鎮壓シ方面ノ草賊ニ備ヘシム

第八條 其他營所ハ逐年兵員増加スルニ從ヒ之ヲ置クノ目的ニシテ現今若シ事情之ヲ要スル時ハ師管ノ分遣隊ヲ分屯セシム

第九條 凡ソ六管ノ鎮臺ニ至重ノ將官ヲ置テ其管下ヲ統括セシムルハ各師管ノ一致同揆ニシテ多岐乖戾莫ラシメ以テ平時ニ在テハ彼此隔絶スルノ兵隊ヲシテ畫一ノ令ヲ守ラシメ戰時ニ在テハ應援分合其宜シキヲ得セシムル所ナリ

第十條 凡ソ隷屬ノ法營所ハ師管ニ隷シ師管ハ軍管ニ隷スルヲ以テ平常ノ報告並ニ物品ノ度支ハ各其序ヲ逐フヲ正例トナスト雖モ地勢彼此懸絶スルヲ以テ尙此以下諸條ニ開示スル方法ニ從フ可シ

第十一條 凡ソ要塞ノ司令將校ハ砲兵方面ニ屬シ其司令ヲ歴テ陸軍卿ニ隷スルヲ正例トス然レモ現今要塞ノ設未タ備ラス其箇所タル多カラサルヲ以テ姑ク其軍管ノ司令將官ニ隷シ文移報告並ニ物品度支ノ諸項皆鎮臺ト往復ス可シ但此例内別ニ掲示スル條ハ此例ニ非ラス

第十二條 凡ソ要塞ノ衛戍ヲ要スル地ハ要塞司令官ヨリ陸軍省ニ牒シ師管ノ許可ヲ得テ再ヒ鎮臺ノ司令將官ニ牒シテ取リ充ルヲ許ス其每期ノ更番ノ法ノ如キハ全ク鎮臺司令將官ノ權内ニ在ル可ク但問歇アルヲ許サハルノミ

第十三條 其將校部下兵隊ヲ率并テ己ノ所轄ニ屬セサル城堡内若クハ城堡周圍ノ戰線内ニ割駐スル者ハ其要塞司令官ノ請ヒニ應シ報知ヲナシ又要塞ノ服役警備ノ爲メニハ哨兵ヲ置キ若クハ必要ナル分隊ヲ出ス可シ

第十四條 其哨兵若クハ分隊ハ要塞司令官ニ隷屬スルヲ以テ其要塞ノ周圍戰線内ニ於テ彼此ニ分駐スル士官下士兵卒ハ要塞ノ司令官監視ヲ加ヘ若シ犯法ノ者アル時ハ速カニ停駐ヲ命シ而シテ其隊ノ司令將校ニ報ス可シ

第十五條 凡ソ憲兵部ハ現今未タ之ヲ置カスト雖モ後來施設ニ及フ時ハ亦鎮臺ノ司令將官ニ屬ヒス直チニ其司令ヲ歷テ陸軍卿ニ隷スルヲ正例トス

第十六條 重大ノ事件起ル時ハ兩隊ヲ造リ本隊ヲ以テ陸軍卿ニ報シ副隊ヲ以テ其駐スル地ノ軍管ノ司令將官ニ進報ス可シ

第十七條 其軍管ノ司令將官ヨリ其地方ノ憲兵部ノ將校ニ移牒シテ事情消息ヲ問フ事アレハ憲兵部ノ將校仔細ヲ悉シテ應酬ス可シ又火急ノ事變ニ遭テハ軍管ノ司令將官ノ命ヲ奉シテ服事ス可

第十八條 凡ソ軍管ノ司令將官ハ其管内各府縣ノ政令並ニ改革創設ノ事件ニ就テハ知事令ヨリ報知ヲ受ルノ權ヲ有シ且世上ノ靜謐ニ關涉スル事情アレハ詳細開説ヲ受ルノ權ヲ有ス

第十九條 其司法所轄ノ府縣裁判所ヨリモ亦改革創設ノ事件並ニ風憲事務ノ世上ノ靜謐ニ關涉スル項ハ詳細開説ヲ受ルノ權ヲ有ス

第二十條 凡ソ軍管内近衛ノ兵隊アル時一般ノ軍紀要塞ノ服役等其他世上ノ風紀ニ關涉スル事ニ就テハ鎮臺所管ノ兵隊ハ其助成ヲ受ルノ權ヲ有ス

第二十一條 凡ソ東京ヲ除クノ外近衛ノ諸兵隊軍管内ニ屯駐スル時操練ノ便宜ノ爲ニ鎮臺ノ諸兵隊ト合シテ合一ノ大操練ヲ催サシムルヲ得可シ

第二十二條 其東京ニ在テハ或ハ陸軍卿ノ好ミニ由リ或ハ近衛都督軍管ノ司令將官トノ合議ノ後陸軍卿ノ許可ヲ得テ之ヲ施行スルコアル可シ

第二十三條 凡ソ近衛ノ兵隊ハ其長官ノ前ニ在シテハ觀兵ノ式ニ於テ整列行進セサルヲ正例トス然レモ近衛ノ一兵隊東京ノ外他方ノ衛戍ニ到ルコト有テ師管若クハ營所アル首邑ヲ過ル時其隊長師管若クハ營所ノ司令官ヨリ官位下等ナレハ師管及ヒ營所司令官觀兵ノ式ヲ以テ行進セシムルノ權ヲ有ス

第二十四條 凡ソ近衛ノ兵隊東京ノ外他ノ管下ニ屯駐シ祭儀慶典ノ事有テ一般ノ觀兵ヲ催ス時ハ近衛ノ兵隊モ召集ニ應ス可シ此時ハ近衛ノ將校ニテモ鎮臺ノ將校ニテモ其官位ノ高下ト在任ノ新營トヲ照シ第二等ニ當ル者ヲシテ諸隊ノ司令官タラシム可シ

第二十五條 凡ソ諸隊將校下士兵卒進級ノ事ノ爲ニ檢閱使各軍管内ヲ巡迴スル時ハ檢閱ノ後其作ル所ノ各隊ノ評草ヲ以テ之ヲ其所管ノ鎮臺ノ司令將官ニ進納ス

第二十六條 其司令將官評草ヲ受ケテ自己ノ所見ニ從ヒ商評ヲ加ヘ而シテ後管内諸隊ヲ合シ別ニ一本ヲ繕寫シテ之ヲ直チニ陸軍卿ニ進呈シ而シテ各隊評草ノ原本ハ猶鎮臺ニ貯フ

第二十七條 其後鎮臺ノ司令將官期日ヲ刻シ各兵ノ檢閱使ヲ會シ自ラ首座トシテ進級表稿本ヲ撰シ此稿本ノ表ト檢閱使作ル所各隊評草ト併セテ之ヲ陸軍卿ニ呈ス

第二十八條 凡ソ毎年歲終ニ陸軍卿ノ命ニ因テ近衛司令長官並ニ軍管ノ司令將官北海道司令將官ヲ東京省内ニ會合セシメ將校進級總表ヲ撰定セシメ以テ次年拔擢進級ノ序ヲ定ム以上四條現今未行司令將官本務)

第二十九條 凡ソ管内兵革ノ警アリト雖モ事他邦ト相關涉スル者ハ 天皇典戰ノ權ニ係ルヲ以テ

八年第三十三號布告ヲ以テ註文刪去

八年第三十三號布告ヲ以テ刪去

同上

八年第三十三號布告ヲ以テ改正

設リニ一卒ヲ動かカスヲ許サス但シ萬一火急應セサルヲ得サル時ハ守戰ノ形ヲ取り之カ爲メニ十分據證ヲ有ス可シ

第三十條 凡ソ管内草賊ノ警アリ事火急ニ起リ兵力ヲ要シ各府縣ノ知事令領臺ニ移牒シテ出兵ヲ請フ時ハ之ニ應シ時宜ヲ權リ衆寡ヲ量リ兵ヲ出ス事ヲ許ス

第三十一條 凡ソ上條ノ時ニ當リ事竣ニシテ時間アレハ府縣ヨリ兩隊ヲ移シ同時ニ省並ニ臺ニ報シ臺又速ニ省ニ報シテ卿ノ區處ヲ受クルヲ正例トス領臺ノ將官擅ニ兵ヲ出スヲ許サス

第三十二條 凡ソ草賊ノ警開アリ其事情測リ難キ事アル時ハ領臺ノ將官其地方ノ知事令ト相議シ參謀部ノ將校ヲ遣シ或ハ其地方ノ營所若クハ要塞ノ司令官ニ命シテ情狀ヲ探偵セシメ其原山並ニ目下ノ形勢人數ノ多寡等ヲ知悉シテ逐一ニ開具シ要スル所ノ兵數取ル可キ所ノ策略ヲ書シ密封ヲ以テ次ヲ逐ヒ卿ニ申報ス可シ

第三十三條 其事狀ノ報告ハ公文ノ例ニ從フト雖モ策略ノ申告ハ必ス密啓ヲ要シ若シ電報ヲ便用スルモ其露泄ヲ謹ム可シ唯事ノ大小ヲ計リ便宜ヲ以テ事ニ從フハ將官ノ權内ニ在リ

第三十四條 凡ソ管内州縣ノ山野等ニ強盜悍賊アリ拿捕地方警視部ノ力ニ能ハスシテ兵力ヲ要スル時ハ知事令並ニ警視部ノ長官ノ請ニ應シ捕獲ノ方略ニ於テ力ヲ併スコヲ得可シ

第三十五條 變災若クハ他ノ事故アリ警護ノ爲メ兵備ヲ要シ其地方ノ知事令ヨリ事由ヲ具シテ之ヲ請フ時ハ之ニ應シ事情ヲ斟酌シテ事ニ從フコヲ得可シ

第三十六條 凡ソ前數條ニ舉ル所皆臨時若クハ急遽ノ際ニ出ル時ハ服事スルノ後速ニ卿ニ申報スルヲ許ス然レモ事竣ニシテ往復ノ時間アル時ハ必ス先ツ卿ニ申報ス可シ且警護ノ兵ヲ出スコ常例トナルニ係ル者ハ必ス卿ノ區處ヲ受クルノ後ニ非スシテ服事スルヲ許サハル事

第三十七條 凡ソ外國公使ノ送迎鴻臚ノ議禮朝儀祭典等ニテ警備或ハ觀兵ノ爲メニ兵隊ヲ要シ該

事ニ係ル衙門ヨリ事由ヲ具シテ之ヲ請フ時ハ之ニ應スルヲ許ス其部署布置ノ方法ハ一切司令將官ノ任タリ但此等ノ時ニ當リ率子卿ヨリ下令アルヲ正例トス唯遠隔ノ地下令未ダ達セサル便チ此例ニ從フ可シ

第三十八條 凡ソ府縣ノ官至重ノ俘囚ヲ送り陸軍彈藥糧食等ヲ送り或ハ外國人ノ旅行等ニ護送ノ兵ヲ要スル時ハ該事ニ係ル衙門若クハ官人ノ具狀ノ上ニ地方時限ヲ量定シ一部ノ兵ヲ出シ護送ニ供スルヲ許ス但シ月報ヲ以テ本省ニ申告ス可シ

第三十九條 凡ソ屯營ノ轉移兵隊ノ進退ハ卿ノ區處ヲ受ルニ非レハ司令將官護リニ之ヲ處分スルヲ許サス又軍伍編制及ヒ内外務等ハ本省頒布スル所ノ成則ヲ遵守シ一切變更スルヲ許サス

第四十條 其屯營變災若クハ他ノ事故ニ由テ一時轉移セサルヲ得サル時ハ地方ノ知事令ニ牒シ近隣ノ地ニ於テ便宜ノ場所屋舎ヲ撰ヒ假リニ轉移シ急報ヲ以テ省ニ申告シ卿ノ區處ヲ受ク可シ但シ其報中目下ノ事情向來ノ便宜ヲ縷陳スルヲ要ス

第四十一條 其營傍延燒ノ時ハ司令長官速ニ近傍場地ニ於テ兵隊ヲ整列セシメ而後ニ人員ヲ量リ器具ヲ引カシメ防火ニ從事セシムル等時宜ニ依リ權宜ヲ制ス可シト雖モ勉メテ兵隊ノ混淆ヲ防ク可シ

第四十二條 其軍伍隊列ノ編制若クハ内外務ニ於テ一時ノ事情ニ因リ若クハ地方ノ便宜ニ由テ一ニ變更ヲ要スル時ハ月報ヲ以テ報告シ詳カニ事由ヲ縷陳ス可シ

第四十三條 凡ソ管下諸兵隊日課ノ操練ハ預メ卿ノ許可ノ上臺ヨリ指定シタル場地ノ外設リニ他ノ場地ニ於テスルヲ許サス若シ實彈試發野營操練等ノ舉ニ就テ一定ノ場地ナキ時ハ本臺ニテ一

地ヲ撰定シ所轄ノ府縣ニ請フテ便宜ヲ議定シ本省ニ申報シテ卿ノ許可ヲ受ク可シ

第四十四條 凡ソ軍人軍屬ノ犯罪軍律ニ屬ス可キ者ハ東京ヲ除クノ外成規ヲ照シ軍法會議ヲ立テ

律ニ依テ治斷セシム可シ但シ東京ニ在テハ輕重ニ拘ラス陸軍裁判所ニ送附ス可シ

第四十五條 凡ソ隊中逃亡アル時ハ該隊ノ司令官同伍若クハ他ノ數人ニ命シ踪跡シテ捕縛セシム可シ若シ能ハサレハ事由ヲ開具シ臺ニ報知シ臺ヨリ其原貫ノ府縣ニ移牒シテ他日捕縛ノ地ヲナシ而後二月報ヲ以テ本省ニ申報ス可シ

第四十六條 凡ソ諸隊ヨリ呈スル定例ノ報告ハ一本ヲ臺ニ留メ一本ヲ以テ臺ヨリ本省ニ移シ定期ニ後ル可カラス

第四十七條 凡ソ管下諸隊定例報告ノ外鎮臺ノ司令將官ヨリ三箇月ノ初毎ニ管内諸隊ノ景況ヲ續陳スル報告ヲ本省ニ進呈ス可シ其報告ハ次ノ款々ヲ開列スルヲ要ス

第一 軍中ノ士氣兵法並ニ政令ニ關涉スル利害如何

第二 諸種ノ兵隊軍紀ヲ守リ定規ヲ遵奉スル程度如何

第三 衛戍若クハ分屯ニ在ル兵隊ノ舉動如何

第四 諸兵隊其地ノ住民ト相關涉スル情狀如何

第五 諸兵隊操練ノ熟不熟如何

第六 將官自己ノ論說並ニ改正ノ目的方略如何

第七 編員外ノ將校就職ノ方法如何

第四十八條 凡ソ管下ノ屯營病院若クハ庖厨及其他ノ廩舍ニ於テハ司令將官時々巡迴シ監視ヲ加ヘ部下兵隊ノ爲メニ便利ニシテ妨碍ナキヤヲ察ス可シ

第四十九條 凡ソ屯營病院物品配賦等ノ事ニ係リテ部下兵隊ノ需要スル項ハ管下ノ監督部砲兵部工兵部ニ令シテ求メニ應セシメ新規例外ノ事ハ本省ニ牒告ス可シ

第五十條 凡ソ陸軍卿ヨリ平常鎮臺ノ將官ヘ移牒スル條款ハ左ノ如シ

八年第三十三號布告ヲ以テ改正

第一 人員ノ轉任休暇不在差役等下令ノ事

右將校ニ係ル下令ハ鎮臺ノ將官ニ下シ隊中下士兵卒ニ係ル令ハ直チニ該隊ノ司令官ニ下ス

第二 兵隊動靜ノ下令並ニ諭旨

右諭旨内ニ目的期限等ヲ巨細ニ述ヘ兼テ路程規則ヲ附ス

第三 兵隊ノ編制並ニ就役ノ下令

右モ諭旨ヲ附シテ詳備ヲ悉ス可シ

第四 屯營ノ改正修復ノ諭旨

諭旨内施行ノ方法ヲ述ヘ且算計書ヲ附ス可シ

第五 入兵後備軍調馬隊軍法學校會計等ノ事務ニ就テ下令並ニ諭旨

第五十一條 凡ソ鎮臺ノ將官新タニ拜命スル時若クハ拜命ノ後初テ鎮臺ヘ赴ク時ハ左ノ禮款ヲ受ルノ特准ヲ得但シ他ノ時ニ於テハ陸軍卿ノ特命ニ非サレハ行フヲ得ス

第一 祝砲

第二 護衛騎兵一大隊 但騎兵ヲ置サル鎮臺ニハ步兵一大隊ヲ用フ鎮臺ノ在ル府縣郊外ヨリ十里ノ地マテ旗幟音樂ヲ具ヘ隊長之ヲ率ヒテ迎送ス

第三 要塞司令官出迎 其地ノ郊外マテ

第四 臺下兵隊拜迎 臺下割駐ノ諸兵隊並ニ衛戍ノ諸兵隊ハ經過ノ途次ニ於テ戰隊ニ列シ階銃ヲ吹ク可シ
ノ後ヲナシ衛兵哨兵守兵共ニ銃ヲ持シ旗幟ハ禮禮ヲ表シアウシヤンヲ鼓シ喇叭ハマルス

第五 軍隊拜候 持正服ニテ
參臺ス可シ

第六 鎮臺ヲ置ク府縣ノ知事令及ヒ參事ハ到着ノ日ヨリ三日内互ニ存問スヘシ 但官等昇キ者ヨリ先ツヘシ

第七 其鎮臺ニテ管轄スル府縣ノ知事令參事ハ三十日内互ニ移文シテ存問スヘシ 但同上

第八 地方裁判所ノ長ハ互ニ僥慮ヲ遣リ存問ス可シ但同上

第五十二條 凡ソ鎮臺ノ司令將官初テ臺下諸兵隊ノ閱兵若クハ管内ヲ巡行シ管下兵隊ノ閱兵ヲ行フ時ハ 天皇ノ命ヲ奉シ其諸兵隊ニ酒ヲ賜フヲ得可シ

第五十三條 凡ソ鎮臺下並ニ管内營所諸隊ノ司令官ハ定期ノ期毎ニ部下兵隊ノ景況^{疾病康} 服役^{平等} 勤惰^{軍紀} 操練^等ノヨニ就テ所轄ノ司令將官ニ之ヲ通報シ又隊中庶務ニ就テハ其時々報告シテ命令ヲ受ク可シ

第五十四條 其部下兵隊ノ便宜兵卒ノ生計等事或ハ一隊ニ涉ルモ或ハ一人ノ身上ニ係ルモ總テ經理會計ノ事ニ就テ申告セル愁訴該隊ノ司令官查確シテ其實ヲ得ハ鎮臺ノ將官ニ申告シテ會計監督副監督ニ移シテ處置ヲ請フヲ得可シ但シ士官下士兵卒トモ所屬外ニ於テ生計等ノ事ヲ申告スルト軍秩ヲ紊ルトヲ許サス

第五十五條 凡管内營所ノ兵隊モ總テ臺下ノ兵隊ニ異ナルコトナシ唯地方ノ騷擾事非常ニ涉ル者便宜ヲ量定シテ鎮臺本省ト地方ヲ異ニスル時ハ兩告ノ例ニ從フ可シ

第五十六條 凡各鎮臺ノ間一管内ニ非常ノ事變アル時ハ本省ニ報告スルノ外互ニ通報遞聞ス可シ但仙臺鎮臺ハ獨リ東邊ニ在テ他ノ鎮臺ト其間本省アルヲ以テ此例ニ在ラス

○第二百五十六號 (五月十九日) (布) 各地方違式註違條例別冊ノ通被定候條此旨布告候事

但地方ノ便宜ニ依リ斟酌増減ノ廉ハ鎮臺臺ヘ可伺出且條例揭示ノ儀モ同寮ノ指揮ヲ可受事 (別冊)

違式註違條例

第一條 違式ノ罪ヲ犯ス者ハ七十^ニヨリ少ナカラス百五十拾錢^{ヨリ}多カ^ニナル贖金ヲ追徴ス

第二條 註違ノ罪ヲ犯ス者ハ六錢貳釐五毛ヨリ少ナカラス拾貳錢五釐ヨリ多カラサル贖金ヲ追徴ス

第三條 違式註違ノ罪ヲ犯シ無力ノ者ハ實決スルコト左ノ如シ

- 一 違式 答罪二十ヨリ少ナカラス
- 一 註違 拘留二日ヨリ少ナカラス

但シ二罪トモ適宜懲役ニ換フ

第四條 違式並ニ註違ノ罪ニヨリ取上クヘキ物品ハ贖金ヲ科スルノ外別ニ沒收ノ申渡シヲ爲スヘシ

第五條 違式註違ノ罪ヲ犯シ人ニ損失ヲ蒙ラシムル時ハ先ツ其損失ニ當ル贖金ヲ出サシメ後ニ贖金ヲ命スヘシ

違式罪目

第六條 地券所持ノ者諸上納銀ヲ怠リ地方ノ法ニ違背致ス者

第七條 製造ノ飲食物並ニ腐敗ノ食物ヲ知テ販賣スル者

第八條 往來又ハ下水外河中等ヘ家作並孫庇等ヲ自在ニ張出シ或ハ河岸地除地等ヘ願ナク家作スル者

第九條 春書及ヒ其類ノ諸器物ヲ販賣スル者

第十條 病牛死牛其他病死ノ禽獸ヲ知リテ販賣スル者

第十一條 身體ヘ刺繡ヲナス者

第十二條 男女入込ノ湯ヲ渡世スル者

第十三條 乘馬シテ猥リニ馳驅シ又ハ馬車ヲ疾驅シテ行人ヲ觸倒ス者

明治六年七月 太政官 第二百五十六號 (各地方違式註違條例)

八年第三十三號布告ヲ以テ改正

十三年第三十六號布告ニ依リ消滅

七年太政官第八號二十五年丙務省乙第二十五號達案石

九年第六十九號布告ヲ以テ第二條改正
九年第九十七號布告ヲ以テ第三條改正

七年太政官第三十號達案ヲ以テ第六條條追加
九年第六十九號布告ヲ以テ第六條條追加

但殺傷スルハ此限ニアラス

- 第十四條 外國人ヲ無届ニテ止宿セシムル者
- 第十五條 外國人ヲ私ニ雜居セシムル者
- 第十六條 夜中無燈ノ馬車ヲ以テ通行スル者
- 第十七條 人家稠密ノ場所ニ於テ妄リニ火技ヲ玩フ者
- 第十八條 火事場ニ關係ナクシテ乘馬スル者
- 第十九條 戲ニ往來ノ常燈臺ヲ破毀スル者
- 第二十條 馬及ヒ車留ノ掲示アル道路橋梁ヲ犯シテ通行スル者
- 第二十一條 男女相撲並ニ蛇遣ヒ其他醜體ヲ見世物ニ出ス者
- 第二十二條 川堀下水等ヘ土芥瓦礫等ヲ投棄シ流通ヲ妨クル者
- 第二十三條 他人持場ノ海藻類ヲ斷リナク刈採ル者
- 第二十四條 他人ノ持場又ハ免許ナキ場所ニ魚筭ヲ設ル者
- 第二十五條 毒藥並ニ激烈氣物ヲ用ヒ魚鳥ヲ捕フル者
- 第二十六條 他人分ノ田水ハ勿論組合持ノ田水ヲ斷リナク自恣ニ我カ田ニ引入ル者
- 第二十七條 他人ノ持場ニ入り筭或ハ管領ヲ無斷採リ去ル者
- 第二十八條 掘堀場ヲ汚損シ並ニ其圍ヲ墮毀スル者
- 第二十九條 堤ヲ壞チ又ハ斷リナク他人ノ田圃ヲ灌ル者
- 第三十條 道敷内ニ菜蔬豆類ヲ植或ハ汚物ヲ積ミ往來ヲ妨クル者
- 第三十一條 他村又ハ他人持場ノ草或ハ苗代草等ヲ斷リナク刈採ル者
- 第三十二條 婚姻祝儀等ノ節事及ヒ托シ往來又ハ共家宅ニ妨害ヲ及スル者

十月十三日號外布告ヲ以テ正誤

七年太政官第三十四號並ニ但書ヲ添加シ八年內務省乙第五十八號及乙第九十號並ニ以テ改正

- 第三十三條 馬夫或ハ日雇稼ノ者等仲間ヲ結ヒ他人ノ稼ヲ爲スニ故障スル者
 - 第三十四條 神物祭事ニ托シ人ニ妨害ヲナス者
 - 第三十五條 往來ニテ死牛馬ノ皮ヲ割キ肉ヲ屠ル者
 - 第三十六條 他人ノ墓碑ヲ毀損スル者
 - 第三十七條 官有ノ山林等ニ禁制ノ榜示アルヲ犯セシ者
 - 第三十八條
 - 第三十九條 御用ト書タル小旗提燈等ヲ免許ナク猥リニ用ル者
 - 第四十條 他人ノ繫舟ヲ無斷棹シ遊フ者
 - 第四十一條 官有或ハ他人ノ山林田畠ニ入り植物ヲ損害スル者
 - 第四十二條 神社佛閣ノ器物類ヲ破毀スル者
- 註違罪目
- 第四十三條 狹隘ノ小路ヲ馬車ニテ馳走スル者
 - 第四十四條 夜中無提燈ニテ諸車ヲ挽キ又ハ乘馬スル者
 - 第四十五條 斟酌ナク馬車ヲ疾驅セシメテ行人ヘ迷惑ヲ掛ケシ者
 - 第四十六條 馬車及ヒ人力車荷車等ヲ往來ニ置キ行人ノ妨ヲナシ及ヒ牛馬ヲ街衢ニ横タヘ行人ヲ妨ケシ者
 - 第四十七條 禽獸ノ死スル者或ハ汚穢ノ物ヲ往來等ヘ投棄スル者
 - 第四十八條 婦人ニテ謂レナク斷髮スル者
 - 第四十九條 荷車及ヒ人力車行逢フ節行人ニ迷惑ヲカケシ者
 - 第五十條 下掃除ノ者蓋ナキ糞桶ヲ以テ搬運スル者

- 第五十一條 旅籠屋渡世ノ者止宿人名ヲ記載セス或ハ之ヲ屈ケ出テサル者
- 第五十二條 往來筋ノ號札又ハ人家ノ番號名札看板等ヲ戲ニ破毀スル者
- 第五十三條 喧嘩口論及ヒ人ノ自由ヲ妨ケ且警愕スヘキ喫鬪ヲ爲シ出セル者
- 第五十四條 往來常燈ヲ戲ニ消滅スル者
- 第五十五條 竊忽ニ依リ人ニ汚穢物及ヒ石礫等ヲ抛澆セシ者
- 第五十六條 田園種藝ノ路ナキ場ヲ通行シ又ハ牛馬ヲ牽入ル者
- 第五十七條
- 第五十八條 荷車及ヒ人力車等ヲ並ヘ挽キテ通行ヲ妨ケシ者
- 第五十九條 誤テ牛馬ヲ放チテ人家ニ入レシメシ者
- 第六十條 犬ヲ鬪ハシメ及ヒ戲ニ人ニ噬スル者
- 第六十一條 巨大ノ紙鳶ヲ揚ケ妨害ヲ爲ス者
- 第六十二條 醉ニ乘シ又ハ戲ニ車馬往來ノ妨碍ヲナス者
- 第六十三條 雜魚乾場ニ妨害ヲナス者
- 第六十四條 海苔乾場ニ妨害ヲナス者
- 第六十五條 他人ノ墳墓等ニ妨害ヲナス者
- 第六十六條 濫田濫墾外用水ニ妨害ヲナス者
- 第六十七條 水陸杭ニ妨害ヲナシ又ハ之ヲ拔取ル者
- 第六十八條 他人ノ竹木ニ妨害ヲナシ又ハ枝葉ヲ拾取ル者
- 第六十九條 他人ノ獵場ニ妨害スル者
- 第七十條 他人ノ植籬牆垣ヲ損毀スル者

- 第七十一條 渡船ニテ不當ノ賃錢ヲ取リ或ハ等閑ニ行人ヲ待シメ用便ヲ妨クル者
- 第七十二條 往還ノ並木及ヒ苗木ヲ徒ニ害スル者
- 第七十三條 渡舟橋梁ノ賃錢ヲ不拂シテ去ル者
- 第七十四條 誤テ牛馬ヲ放チ他人ノ田圃及ヒ物品ヲ損害スル者
- 第七十五條 猥リニ他人ノ爭論ニ荷擔スル者
- 第七十六條 行人ニ合力等ヲ申掛ル者
- 第七十七條 牧場外猥リニ牛馬ヲ放チ飼スル者
- 第七十八條 他人ノ獸畜類等ニ犬ヲ噬シ掛ル者
- 第七十九條 他人ノ墳墓等ノ供品類ヲ猥リニ毀損スル者
- 第八十條 水車水碓等ニ妨害ヲナス者
- 第八十一條 行人ニ強テ車馬駕籠等ヲ勸メ過言ヲ申掛ル者
- 第八十二條 他人ノ曝網ニ妨害ヲナス者
- 第八十三條 他人ノ海苔棚内ヘ斷リナク舟ヲ棹シ入ル者
- 第八十四條 山林原野ニテ徒ラニ火ヲ焚者
- 第八十五條 總テノ標柱ニ牛馬ヲ繫キ或ハ破毀スル者
- 第八十六條 橋柱ニ舟筏ヲ繫ク者
- 第八十七條 神祠佛堂又ハ他人ノ垣壁等ニ樂書ヲナス者
- 第八十八條 田畝中ニ瓦礫竹木等ヲ投入ル者
- 第八十九條 遊園及ヒ路傍ノ花木ヲ折リ或ハ植物ヲ害スル者
- 第九十條 往來並木ノ枝ニ古草鞋等ヲ投掛ル者

○第二百五十七號 (七月二十日)(布)

府 縣

谷府縣管内荒蕪不毛地並官林等望ノ者ハ士民ヲ論セス入札ヲ以テ拂下ケ可申旨幸未八月壬申五月兩度ニ大藏省ヨリ相達置候處自今差止候條此旨布告候事

但不得止事情有之拂下ケ不致候テ難相成節ハ詳細具狀シ大藏省へ可伺出事

○第二百五十八號 (七月二十日)(布)

太陽曆ニ掲載ノ御祭日御祝日等ハ追テ確定スヘキ旨壬申第三百六十號布告候處今般歷世 皇繼以下御祭日及御祝日等月日相當推歩相成本月廿四日ヨリ別紙ノ通被改候條此旨布告候事

但成務天皇御祭典ハ己ニ被爲濟一條天皇光明天皇後宇多天皇ハ本年限り舊日ヲ以テ被爲行候事

一神宮以下諸社御祭日ノ儀ハ舊曆定日ヲ新曆日ニ充テ尤從前干支ヲ用ヒ來リ候分ハ當年相當ノ日

ヲ以テ永ク御祭日ト被定候事

一一月一日ヨリ一ヶ年諸御祭日御祝日等ハ來七年甲戌曆面ニ掲載追テ頒行可致事

七月廿四日 後宇多天皇

同 廿六日 垂仁天皇

同 廿七日 鳥羽天皇

同 廿九日 成務天皇

同 三十一日 一條天皇

八月三日 白河天皇

同 四日 光明天皇

同 九日 孝德天皇

同 十一日 後龜山天皇

同 十三日 光嚴天皇

同 同 大鳥祭

同 十五日 男山祭

同 十六日 宇佐祭

同 十八日 堀河天皇

同 同 三島祭

同 廿日 鹿島祭

同 廿四日 香取祭

同 廿五日 鎌倉祭

同 廿七日 弘文天皇

同 廿八日 後深草天皇

同 廿九日 齊明天皇

同 三十日 嵯峨天皇

同 三十一日 近衛天皇

九月一日 六條天皇

同 七日 孝昭天皇

同 同 桃園天皇

同 同 孝謙天皇

同 同 後堀河天皇

| | |
|-------|-------|
| 同 八日 | 宇多天皇 |
| 同 九日 | 稱光天皇 |
| 同 十日 | 雄略天皇 |
| 同 十日 | 生國魂祭 |
| 同 十日 | 仁賢天皇 |
| 同 十一日 | 朱雀天皇 |
| 同 十一日 | 後水尾天皇 |
| 同 十二日 | 二條天皇 |
| 同 十五日 | 石上祭 |
| 同 十六日 | 敏達天皇 |
| 同 十七日 | 神宮神嘗祭 |
| 同 十八日 | 後二條天皇 |
| 同 廿一日 | 豐國祭 |
| 同 廿一日 | 光孝天皇 |
| 同 廿二日 | 崇德天皇 |
| 同 廿二日 | 白峰祭 |
| 同 廿三日 | 井伊谷祭 |
| 同 廿三日 | 秋季祭 |
| 同 廿四日 | 靈元天皇 |
| 同 廿五日 | 安康天皇 |

第四百六號ヲ以テ
二十一日ヲ二十八
日ニ改ム

| | |
|--------|--------|
| 同 同 | 後陽成天皇 |
| 同 廿六日 | 國懸祭 |
| 同 廿七日 | 日前祭 |
| 十月一日 | 後醍醐天皇 |
| 同 四日 | 懿德天皇 |
| 同 七日 | 天武天皇 |
| 同 十一日 | 後奈良天皇 |
| 同 十一日 | 孝元天皇 |
| 同 十二日 | 文德天皇 |
| 同 十四日 | 龜山天皇 |
| 同 十六日 | 順德天皇 |
| 同 廿一日 | 伏見天皇 |
| 同 廿八日 | 醍醐天皇 |
| 同 三十日 | 陽成天皇 |
| 同 三十一日 | 後光明天皇 |
| 十一月三日 | 後土御門天皇 |
| 同 十日 | 天長節 |
| 同 十三日 | 新嘗祭班幣 |
| 同 十三日 | 土御門天皇 |
| 同 十四日 | 淳仁天皇 |

第三百九號ヲ以テ
十二月一日神宮月
次祭ヲ十一月四日
神宮月次祭幣帛發
遣ト改定

八月第五十五號布
告第七十八年太政
官第七十號連ヲ以
テ工部省ヲ廢シ鐵
山事務ヲ農商務省
ニ屬ス

七月二十八日天然
本資ハ本質ノ誤ナ
ルヲ布告ス

九年內務省甲第三
號連ヲ以テ土石掘
取規則ヲ定ム

七年工部省第一號
連ヲ以テ本法第三
十一條ヲ除ク外順
同等工部省ニ差出
サシム

七年工部省第三十
號連九年同第三十
號連若

- 同 廿日 舒明天皇
- 同 廿二日 鎮魂祭
- 同 廿三日 新嘗祭
- 同 廿七日 孝德天皇
- 同 十一月一日 冷泉天皇
- 同 四月 神宮月次祭
- 同 六月 明正天皇
- 同 十月 後桃園天皇
- 同 十月 花園天皇
- 同 十月 後小松天皇
- 同 十月 光格天皇
- 同 十月 崇峻天皇
- 同 十月 景行天皇
- 同 十月 後櫻町天皇
- 同 三十一日 大祓

○第二百五十九號 (七月二十日) (布)

今般鐵山其他諸坑業ノ規則別冊ノ通改定候ニ付テハ凡坑物ニ關係ノ事件ハ工部省ニ於テ總管セシ
候條自今金屬其外諸坑物營業ノ儀都テ同省へ可申立候此旨布告候事
(別冊)

日本坑法

第一章 坑物

第一 正理ヲ以テ論スルハ凡無機物タル者ハ生活ノ機ナ 都テ坑業ノ部分ニ屬ス此無機物品質ニ
類ニ分ル即第一類ハ有鐵質第二類ハ無鐵質タリ凡諸金屬ノ天然本資ヲ以テ出ル者或ハ他ノ物質
ト化合シテ出ル者ハ右第一類ニ屬ス燃質物山鹽燐酸石灰美石及玉璞ノ類ハ右第二類ニ屬ス
所ノ有鐵質無鐵質トモ總テ是ヲ坑物ト
稱ス坑山坑業坑區坑產等皆之ニ倣ヘ

第二 前ニ掲記セシ物類凡日本國中ニ於テ發見スル者ハ都テ日本政府ノ所有ニシテ獨政府ノミコ
レヲ採用スル分義アリ

第三 築石土砂粘土其他建築耕作所用ノ諸物品ハ都テ地主タル者ノ所有トスヘシ

第四 日本ノ民籍タル者ニ非サレハ試堀ヲ作シ坑區ヲ借リ坑物ヲ採製スル事業ノ本主或ハ組合人
ト成ルコトヲ得ス 坑產ノ割合及損益ニ關係ス若シコレヲ犯ス者ハ共業ニ屬スル所有物ヲ官ニ沒入
シテ共業ヲ禁止スヘシ

第二章 試堀

第五 試堀ヲ作サント欲スル者ハ鐵山寮ニ願出許可ヲ得テ之ヲ行フベシ試堀ヲ行フ爲ニ必要ノ地
面他人ニ屬セハ其價金ヲ對談處分ス可シ地主ニシテ自ラ試堀ヲ企ル者ハ衆ニ超テ許可ヲ得ヘキ
分義アリトス然レモ自ラ試堀ノ資本無クシテ他人ノ舉ヲ拒ミ或ハ不當ノ價金ヲ貪ラハ鐵山寮或
ハ地方官ニテ正價ヲ裁決シテ其地ヲ買上クヘシ

第六 試堀ニテ坑物發見スルハ直ニ見本ヲ添テ鐵山寮ニ届出ツ可シ且試堀中ハ一月七月兩度毎
ニ前六ヶ月間ノ行業日數及工數並產量ヲ開報ス可シ

凡產礦ハ借區券ヲ第十款得ル後ニ非サレハ恣ニ賣却スルヲ得ス若シ之ニ背カハ其全價ヲ沒收ス
可シ

第七 試掘ハ都テ一年間ヲ以テ期限トス若延期ヲ願出ルニ實ニ未タ開坑ヲ決スルコトヲ得サル事理判然タラハ之ヲ許可スルコト有ル可シ

第八 試掘人廢業スルハ第二十七款廢坑則ノ如クスヘシ

此時ニ産鑛ハ鑛山寮ノ許可ヲ得テ賣却シ第三十一款ノ坑物稅ヲ納ム可シ

試掘人損失ニ因テ廢業スル事實判然タルニ於テハ坑物稅ヲ免スルコト有ルヘシ

第三章 借區開坑

第九 開坑スル者ハ先ツ坑區ヲ得ヘシ坑區ノ廣狹ハ其適實ナル起業ノ目途ニ應シテ之ヲ得セシム可シ

有鑛質坑ヲ開ク者ハ必ス製鑛ノ業ヲ兼ヌ可シ

凡借區開坑ハ鑛山寮ニ願出ヘシ此願書ニ其得ント欲スル坑區ノ測量圖ヲ添テ出ス可シ

(但石炭坑ノ借區ハ壹萬坪以上ニ限ルヘシ)

試掘ヲ經テ借區願出ル者ハ其坑區中別ニ地主有リト雖モ之ヲ拒ムヲ得ス尤其處分ハ借區券ヲ得ルノ後廿二款ノ如クナルヘシ

第十 願出ノ借區ハ鑛山寮官員之ヲ驗測シ標石ヲ植テ境界ヲ識別スヘシ巡回官員歸報ノ後許可スヘキハ工部全權ノ證印ヲ以テ借區券ヲ附與スヘシ

第十一 凡借區ハ通常十五年間ヲ以テ定期トス之ヲ終ルニ至テ繼年期ハ新ニ願出スヘシ

第四章 通洞

第十二 通洞ハ坑道ハ縱横ニ小坑ヲ穿ツヲ通常トス別ニ探鑛疏水運輸等ノ我カ借區中ニ非スト雖モ之ヲ企ルコトヲ得ヘシ此時ハ願書ニ目論見明細圖ヲ添テ鑛山寮ヘ出スヘシ若シ其通洞他人ノ借區ニ亘涉スヘキハ豫メ其借區人ニモ報知ス可シ

通洞ハ高九尺幅六尺ヨリ減スヘカラス是ヨリ小ナルハ通洞トセス

第十三 願出ノ通洞ハ鑛山寮官員實地踏踏報ノ後許可スヘキハ工部全權ノ證印ヲ以テ免狀ヲ附與ス可シ免狀ヲ得ルノ後若シ目論見圖ニ違ヒ方向ヲ轉シ或ハ距離ヲ延縮セント欲セハ更ニ鑛山寮ヘ願出許可ヲ得テ之ヲ行フ可シ

第十四 借區人何レモ自ラ通洞ヲ開クヘキ資本有ニ非サレハ我區中タリト雖モ他人ノ舉ヲ拒ムヘカラス

通洞保全ノ爲メニ其周圍ノ土石ヲ外ヨリ厚サ一間半以内ニ掘入ルヘカラス然レモ其跡ニ自己ノ入費ヲ以テ支柱ヲ構造シ崩潰ノ患無カラシムル者ハ此限ニ非ス是ハ坑物ヲ得ンカ爲ニ一旦土石ヲ掘出ス時ノ如キ是也

第十五 通洞ニ因テ諸借區人便利ヲ得ルコトアラハ通洞發起人ニ其謝金ヲ出スヘシ若シ之ニ就テ對談穩當ナラスハ鑛山寮ヨリ處斷スヘシ

通洞ヲ開ク者ハ借區人未定之所ニ於テハ通洞ノ周圍内ヨリ出ルタケノ礫石ヲ取ルコトヲ得ヘシ他人ノ借區中ニ於テハ此礫石ノ一半ヲ借區人ニ歸スヘシ

第五章 坑業

第十六 都テ坑業ニ付テハ坑物ヲ坑中支柱ノ爲ニ存ス可キ所ノ外ハ成ル丈坑利ヲ遺ストナク取出スヘシ此法ヲ犯シ其他都テ坑ノ利用ヲ害スルモノハ其輕重ニ隨テ罰金ヲ徵ス可シ

第十七 試掘開坑或ハ通洞等ヲ企ルニハ舍屋鐵道河流及道路ノ如キ其害ヲ受ヘキ場所ハ度ヲ計テ之ヲ避ケ殊ニ城堡ハ七十間以内ノ地ヲ避ケ可シ

凡場所ノ主タル者應諾スルニ非スシテ此ヲ犯ス者有レハ城堡ハ其律ニ任シ餘ハ其損害ヲ償復スル一倍ノ費額ヲ取テ本費ハ其主ニ附與スヘシ

第十八 凡初發許可ヲ得シ坑物ノ外ニ別種ノ坑物ヲ見出ス者ハ速ニ鑛山寮ニ報知スヘシ之ヲ背ク

十五年第三十八號
布告ヲ以テ但書追
加

十四年第七十二號
布告參看

八年第八十三號
布告ヲ以テ一倍ノ
費額ヲ取テ本費ノ
半額十四年第七十
二號布告參看

者ハ其坑物又ハ代價ヲ取揚クヘシ

如此類ノ借區稅ハ第三十一條ニ照準シ高價ナル方ノ例ヲ以テ納ムヘシ

第十九 開坑人ハ歲々一月七月兩度毎ニ前六ヶ月間ニ産出セシ坑物量其賣出高並代價及行業日數工數ヲ具記シテ鑛山寮ニ報知ス可シ

有鑛質ハ坑產量並製出量且製出セシ混淆物二種以上ノ金屬ヲ含有スルハ其試驗ノ割合ヲモ具記シテ賣出高以下都テ前ノ如クスヘシ右數量不正或ハ開報違期ノ罰ハ金五十圓トス若シ賣出高並代價ヲ減書スル者ハ其減書セシ高ノ三倍ヲ徵收ス可シ

第二十 通例開坑又ハ廢礦ヲ採製スルニモ一年間ノ事業ハ地面五百坪ノ下ニ就テ壯健ナル一夫三百日ヲ以テ成セル程ノ工數ヨリ減スヘカラス若シ之ニ背ク者實ニ百方免レ難ク妨碍判然タルニ有ラスンハ其業ヲ禁止スヘシ

第二十一 坑業人ハ互ニ隣坑ノ風通シヲ便利ニスヘシ且甲區ヨリ乙區ノ地中ニ水道ヲ通シ地上ニ要路ヲ通センコトヲ求ルニ於テハ不當ノ賃金ヲ食ル可ラス若相對ヲ以テ決ヒスンハ鑛山寮ヨリ所斷スヘシ

右堀通シニ付テ出ル礫石ハ其所ノ借區人ニ屬スヘシ

第二十二 凡借區人ハ區上ニ於テ藏庫詰所作事場洗礦所鑛鑛所通路等其他坑業ニ必要ナル地面ハ地主タル者ニ豫メ賃金ヲ辨ス可シ若シ異論決ヒスンハ鑛山寮或ハ地方官ニテ正價ヲ裁決シ其地ヲ買取ル可シ

第二十三 總テ坑區ヨリ隣區ニ患害損傷ヲ被ラシムルトキハ之ヲ償フヘシ若シ賃金決ヒスンハ鑛山寮ヨリ裁決スヘシ

第二十四 凡借區人其坑業ヲ年限中他人ニ讓渡ス如キハ前以テ雙方ヨリ鑛山寮ニ願出許可ヲ請フ

八年內務省乙第三
號達示

七年工部省第八號
布達示

ヘシ若シ之ニ背ク者ハ其業ヲ禁止スヘシ

第二十五 凡借區年限終リ又ハ法ニ背ヒテ其業ヲ禁止セラレ或ハ自ラ廢業スルニ至ル者有レハ都テ其借區ハ政府ニ還復シ其事業ニ就テ如何ナル負債アリト雖モ總テ其坑山ニハ關係セサル者ト

ス此時ニ當テ地中ノ結構ハ坑山ニ屬シテ政府ノ有タルヘシ
地上ノ營造ハ其主ノ取去ルニ任スト雖モ其地ノ地面ハ完全ニ修復ヲナスヘシ

第二十六 坑業人ハ其坑山地方ノ住民同様トス因テ其地方官ノ諸法令ヲ遵守ス可シ

第六章 廢業

第二十七 坑業ヲ廢セント欲スル者ハ堅坑ノ口ヲ掩ヒ又柵圍ヒスヘシ鑛山寮ヨリ其堅坑ヲ當然ニ

堅固ニセシヤ且坑内ノ營造完全存在スルヤヲ検査スヘシ若疎漏アラハ鑛山寮ニ於テ是ヲ繕治ス可キ費額ノ一倍ヲ徵收スヘシ

第二十八 鑛山寮ヨリ疏水ヲ命スルニ背キテ其事ヲ行ハス之カ爲ニ坑中廢没スルニ至ル者ハ其業ヲ禁止ス

第七章 鑛所建築

第二十九 凡開坑人坑山外ノ場所ニテ有鑛質物ヲ製出セン爲ニ建築スヘキモノアラハ先鑛山寮ニ許可ヲ請フ可シ

第二十 已ニ製煉セシ鑛物ヲ精製スルニ當リ丁銅、錫、鉛、鐵、銅、銀、金、ニ製スル類ヲ云
シ六ヶ月毎ニ元鑛量並製出品量等ヲ具記シ鑛山寮ニ開報スヘシ

第八章 稅納

第三十一 鑛ヲ除クノ外有鑛質物ヲ採取スル坑區ハ面積五百坪毎ニ一ヶ年金壹圓ツ、借區稅トシテ毎年一月ニ前一年分ヲ鑛山寮ニ納ムヘシ、借區稅ハ地租、鑛及ヒ無鑛質ノ諸物品ヲ採取スル坑區

明治六年七月 太政官 第二百五十九號 (日本坑法)

三八九

十四年第四十九號
布告ヲ以テ一
ヶ年分ヲ鑛山寮ヘ
納ムヘシ其年

九年工部省第四號
達示

一ヶ年分ノ前納スヘシト改メ結尾ニ「但恐納者ハ借債ヲ取切テヘシ」ヲ追加ス
同上ヲ以テ借債初年以下十六字ヲ借債初年ノ區稅券下付ノ前納スヘシト改ム
八年第二號布告ヲ以テ當分坑物稅廢止

ハ面五百坪ニ付前條ノ半高ヲ納ムヘシ即金五十錢トス
廢礦ヲ採取スル坑區ハ面千坪ニ付常例ノ稅額ヲ納ムヘシ
開坑區面五百坪廢礦區面千坪トニ足サルモノハ總テ右面積ノ比例ニ隨テ納ムヘシ
借債初年ノ區稅ハ月割ニテ納ムヘシ
前書借債稅ノ外ニ採製セシ金屬及諸坑物ニ就テ代價百分ノ三ヨリ百分ノ二十迄ヲ坑物稅トシテ
每歲一月七月兩度ニ鑛山寮ニ納ム可シ
但稅額ノ儀ハ其坑業ノ盛衰ニ隨ヒ鑛山寮ヨリ命スヘシ
第三十二 試堀開坑或ハ通洞等ニ付テ前後諸條款ニ記セル稅或ハ罰金償金等ヲ納メサル其業ニ
屬スル所ノ運移スヘキモノ殘ラス鑛山寮ヨリ入札拂ニシテ代價ノ中ヨリ不納高ヲ引去リ其殘金
ハ之ヲ本人ニ還付スヘシ
第三十三 凡坑法ノ意旨ニ戾ル過失有ル者ハ輕重ニ隨テ罰金ヲ命スヘシ若事業疎略ニシテ人命ヲ
失ハ、國律ヲ以テ論處ス可シ
右章款ニ記載セル方法ハ明治六年九月一日ヨリ施行スヘシ從前ノ法則及ヒ舊習等若シ此法ニ矛盾
スル者ハ都テ廢停タル可シ

坑法附示

坑業及製鑛ノ業ヲ舉行スル者西洋ノ學術及工作ヲ用ヒシカ爲メ一定ノ給料ヲ以テ外國技術家ヲ雇
入ル、カ如キハ我坑產損益及ヒ所有物ニ關係スル事無キニ因テ坑法第四款ノ禁ニ觸レズ然レモ之
ヲ雇入ル、以前其職業給料及年限ヲ分明ニ記載シ其案紙ヲ鑛山寮ヘ送呈シテ結約ノ許可ヲ可請候
事

書類式樣

八年工部省第十三號布達ヲ以テ改
正參看

表面ニ
試堀願

某縣貫籍某國某郡某町某職業
某

試堀願

私儀某縣管下某國某地ニ於テ何礦ヲ掘得ヘク覺候故先試堀仕度候間御開届被下度奉願候以上
年號月日
某縣貫籍某國某郡某町某職業
某 印

前書願出之趣御開届相成度候也

年號月日

某縣令某印

七年工部省第十三號布達ヲ以テ改
正參看

試堀人ニ與ル證
某縣某地某位置誰地ニ於テ某貫籍某職業某何礦試堀願ノ通開届候尤日本坑法ニ違反致間鋪者也
年號月日
鑛山寮印

表面ニ
借債開坑願

某縣貫籍某國某郡某町某職業
某

某

借區開坑願

私儀某年月某地ニ於テ試掘相願候處何處發見イタシ、又後來何處ヲ掘出、候ニ付別紙圖面ノ場所ニ於テ借區開坑被差許度此段奉願候以上

年號月日

某縣貫籍某國某郡某村某職業

某 印

前書願出之通御開届相成度候也

年號月日

某縣令某印

借區券

某年月某地幾方面某貫籍某職業某々境界云々之場所ニ於テ別紙圖面之通十五ヶ年間借區開坑差許候尤日本坑法ヲ確奉可致者也

年號月日

工部全權某印

七年工部省第三十三號布達ヲ以テ改正奉看

八年工部省第十三號布達奉看

表面ニ 通洞願

某縣貫籍某國某郡某村某職業

某

通洞願

私儀疏水運輸或通洞堀通シ度右通洞別紙圖面之某場所ニ有之候尤通洞ノ地位ニ當リ候借區ノ主

某ニ報知仕置候右通洞堀方御開届被下度奉願候以上

年號月日

某縣貫籍某國某郡某村某職業

某 印

前書之通御開届相成度候也

年號月日

某縣令某印

通洞券

某年月願出候某貫籍某職業某某地ニ於テ別紙圖面ノ通洞堀通候事差許候尤日本坑法ヲ確奉可致者也

年號月日

工部全權某印

十三年第三十六號布告ニ依リ治滅

○第二百六十號 (七月二十日)(布)
官吏受財條例別紙ノ通制定候條此旨布告候事

(別紙)

官吏受財條例

凡枉法不枉法ヲ以テ論シ及ヒ准シテ論スル罪平民ハ等外人ト同ク罪ヲ科ス。

○第二百六十一號 (七月二十日)(布)

聖上 皇后宮來ル八月三日午前第六時二十分御出門相州宮ノ下溫泉場へ 行幸於同所御駐籠同二十日 還幸被 仰出候條此旨布告候事

御泊割左ノ通

行幸ノ節

三日 藤澤

四日

小田原

五日

宮ノ下

御着

○第二百七十一號奉看

還幸ノ節

廿八日 小田原 廿九日 藤澤 三十日 還幸

○第二百六十二號 (七月二十日)(布)

本年二月第五十六號同五月第百五十五號布告證券印紙貼用心得方規則第二十六條以下尙又別紙ノ
通増補候條此旨布告候事

七年第八十一號布
告ヲ以テ廢止

(別紙)

受取諸證文印紙貼用心得方規則第二增加

第二十六條

一第二十三條第二十四條ニ掲載セル諸帳簿證印附込金高ヲ以テ證印願出ノ儀尙後總テ一ケ年限可
附込金高ヲ以テ願出證印可申請候尤帳簿紙數多少ハ適宜ニ任セ一帳簿ヲ以テ數年相用候共證印
ノ儀ハ其年一ケ年限ノ證ト相心得翌年尙其帳簿へ可附込金高見込更ニ其年分ノ證印願出候様可
致事

但是迄證印濟ノ分ハ共儘相用一ケ年未滿ニテ附込金高相充候上ハ何時ニテモ願出ノ上證印可
申請候以來ハ一ケ月或ハ半ケ年見込ヲ以テ金高見積候儀ハ不相成候事

一諸帳簿證印可致分ノ内帳簿上へ金錢記載無之物品ヲ以テ記載セル荷物判取帳ノ類附込金高計算
難積立分ハ附込物品ノ多少ニ拘ラス尙後一帳簿ニ付一ケ年分總テ金五錢ノ印稅ヲ以テ證印可致
事

第二十七條

一諸切手類正引換ノ節ハ戻シ主於テ墨朱等ニテ曾テ消印有之印紙面ヲ抹却可致事

第二十八條

一諸約定金共外借川金ノ類金高多ニテ一時返戻又ハ償入難相成分漸々入金等致シ候分ハ假令元金
高ニ相當セル印紙貼用有之トモ請取書ハ返戻償入ノ證ト可致譯ニ付金高十圓以上ハ其都度都度
一錢印紙ヲ貼用可致事

第二十九條

一第二十條ニ掲載有之候印紙貼用アル證書類ヲ引當トシ乙云々トハ第一類ニ屬セル印紙アル證書
ヲ以テ尙第一類ニ屬セル證書ニ其類ヲ以テ引當候上ハ印紙貼用ニ不及候得共印紙アル第一類之
證書ヲ以テ第二類之證書へ引當取引候節ハ照準ニ難相成新證書へハ別段二類之印紙貼用可致事
一證印アル帳簿類盜火難等ニテ紛失之節ハ更ニ印稅上納之上新帳簿へ證印可申請事

第三十條

一諸賣買又ハ貸借等一切之約定證書類相互ニ都合ニ寄リ爲取替致シ候分同事件又ハ同員數ニ候共
各爲取替候各通毎ニ印紙貼用可致事

但甲乙通帳ノ類モ自他各證ト可爲者ハ本文同様印稅上納之上證印可申請事

第三十一條

一界紙ヲ偽造スル者ハ帳簿類へ押用スル印稅收領之印章ヲ模擬セル者ト同様之罪科可申付
事

一界紙可相用書類へ界紙ヲ用ヒサル者相顯ル、於テハ爲科料金五十錢可爲差出事

一第二類之印稅可相納諸帳簿へ證印不申請者ハ第八條ニ掲載セル印紙二類ヲ不貼用科料之半高爲
科料可爲差出事

但荷物附込帳ハ一類之印紙ヲ不貼用科料半方ニ準シ可申事

一 第一類之帳簿ヲ曲ケテ第一類ノ帳簿ニ取替ヒ證印申請候者ハ同條十圓以上ノ高ヲ曲テ云々之料半方爲科料可爲差出事

一 證印申請候帳簿へ餘白有之逆願濟金高ヨリ過剩附込候者ハ 第一類ニ應シ候帳簿へ證印不申請者之科料ト同様可爲差出事

○第二百六十三號 (七月二十二日) (布)

本年一月第二十八號布告華士族家督相續ノ儀御詮議ノ次第有之左ノ通第一章改正並ニ一章追加相成候條此旨華士族へ布告スヘキ事

第一章改正

家督相續ハ必總領ノ男子タル可シ若シ亡没或ハ癡癡疾等不得止ノ事故アレハ共事實ヲ詳ニシ次男三男又ハ女子江養子相續願出ツヘシ次男三男女子無之者ハ血統ノ者ヲ以テ相續願出ツヘシ若シ故ナク順序ヲ越テ相續致ス者ハ相當ノ咎可申付事

一章追加

婦女子相續ノ後ニ於テ夫ヲ迎ヘ又ハ養子致シ候ハ、直ニ其夫又ハ養子へ相續可相讓事

十三年第四十七號
布告ニ依リ消滅

○第二百六十四號 (七月二十二日) (布)

本年三月第百廿一號布告金札引換公債證書發行條例第三條第四條第五條第七條中別紙之通改定候條此旨布告候事

(別紙)

金札引換公債證書發行條例之内

第三條第三節

記名利札兩證書共發行之年ヨリ十五ヶ年ノ間流通セシム可キ者ニシテ證書ヲ所持シタル年ヨリ二ヶ年之間ハ只利足ノミヲ拂渡シ四ヶ年目ヨリハ何時ニテモ政府之都合ニヨリ抽籤之方ヲ以テ元金ヲ拂戻スヘケレハ證書ノ所持人ハ此時ニ至ルモ決シテ之ヲ拒ムノ權アラサルヘシ是ヲ以テ發行之年ヨリ十五ヶ年後ハ是非トモ政府悉行ノヲ買揚ルノ權アルヘシ

第四條初節但書

但シ受取シ内贖札アル時ニハ其贖札ニ相違ナキノ確證ヲ持參人へ指示シ其種類金高枚數等ヲ帳面ニ記シ置キ其札ハ即座ニ之ヲ斷截ニ附スヘシ

贖札持參之者ニ疑シキ事アレハ之ヲ探察シ又ハ之ヲ推測スル事勿論タルヘシ

第五條第四節

記名證書之利息拂方ハ其期月前紙幣寮ヨリ利息請取切手 第九號條ヲ直ニ證書之所持人へ相送り又時宜ニヨリテハ地方廳ヲ通シ差送ルヘケレハ所持人ハ切手之裏面ニ雛形ノ通り記名調印シテ之ヲ其名宛之場所ニ持參シテ利息ヲ請取ヘシ若病氣其他止ムヲ得サル事故ニ由テ所持人自ラ其場所ニ至リ請取事能ハサル時ニハ名代人ヲ命シ切手ヲ持參シテ請取事ヲ得ヘシ尤名代人ヲ任スルニハ自筆記名調印之委任狀ヲ渡置ヘシ拂場所ニ於テハ本人自筆ノ委任狀ヲ見シ上ニテ利息ヲ拂渡スヘシ利札證書之利息請取方ハ本人ニテモ代人ニテモ其證書ヲ利息拂場所ニ持參スレハ證書之下端ニ附添セル利札ヲ切取りテ其利息ヲ相渡スヘシ

第七條

七ヶ年ヲ經タル後ヲ三ヶ年ヲ經タル後ト改ム

表面

切手雛形 第九號

(欄外並ニ印面ハ朱)

| | | |
|----------|---------------------------|----|
| 第何號 | 何記號 <small>自何番至何番</small> | 何枚 |
| 一何圓記名證書 | 何記號 | 一枚 |
| 一何圓記名證書 | 何番號 | 一枚 |
| 表面證書之利息 | 證書所持人 | 何某 |
| 一金何圓 | 何縣何村何番地 | |
| 明治何年月日渡 | | |
| 當何年上六ヶ月分 | | |
| 當何年下六ヶ月分 | | |
| 第何號 | 證 | |

| | |
|---------------------------|---------|
| 何記號 <small>自何番至何番</small> | 何枚 |
| 一何圓記名證書 | 何枚 |
| 何記號 | 壹枚 |
| 一何圓記名證書 | 何縣何村何番地 |
| 表面證書之利息 | 證書所持人 |
| 一金何圓 | 何某 |
| 書面之金高前書證書所持人へ可相渡候也 | |
| 明治何年月日 | |
| 當何年上六ヶ月分 | |
| 當何年下六ヶ月分 | |
| 紙幣頭何某印 | |
| 何地出張紙幣寮 | |
| 何縣廳公債掛 | |
| 何縣何銀行 | |
| 何某宛 | |

請取證書
 表書之金私所持之公債證書當何年下上六ヶ
 月分之利息トシテ御渡被下正ニ請取申候
 仍如件

明治何年月日

表書

證書所持人

何 某

何地出張

紙幣寮

何縣府

公債掛宛

何縣府

何銀行

紙幣寮

○第二百六十五號 (七月二十三日)(布)

院省使府縣

雇入外國人之儀ハ其業ノ優劣ニ因リ奉務之件ヲ定メ或ハ其職ノ繁簡ヲ視テ時間ヲ限リ至當ノ給料ヲ以テ結約イタシ候上ハ雇繼ノ節限ニ増給不相成尤本人非常ノ功績等有之増給不致候テハ難叶情實有之候ハ、其旨趣詳細具狀シ可伺出候此旨相達候事

八年太政官第二百
 十七號達ニ依リ消
 滅
 十三年第三十六號
 布告ニ依リ消滅

○第二百六十六號 (七月二十三日)(布)
 竊盜條例左之通相定候條此旨布告候事

竊盜條例

凡竊盜四犯財ヲ得ル者ハ賊ノ多寡ヲ論セス懲役終身

○第二百六十七號 (七月二十四日)(布)

名例律再犯加等罪例條例及ヒ賊盜律監守盜常人盜條例左ノ通創定候條此旨布告候事

再犯加等罪例條例

凡監守及ヒ常人盜再犯スル者ハ、竊盜ト同ク並ニ、後犯ノ本罪ニ、一等ヲ加フ。

監守盜條例

凡監守盜再犯スル者ハ、財ヲ得スト雖モ、一等ヲ加フ。三犯、三十圓以下、懲役終身、三十圓以上、絞

常人盜條例

凡常人盜再犯スル者ハ、財ヲ得スト雖モ、一等ヲ加フ。三犯、四十圓以下、懲役終身、四十圓以上、絞

○第二百六十八號 (七月二十五日)(布)

大坂造幣寮ニ於テ貨幣鑄造地金收納之儀本年九月一日ヨリ同十一月十五日迄一切相斷候條此旨布告候事

○第二百六十九號 (七月二十四日)(布)

十三年第三十六號
 布告ニ依リ消滅

明治六年七月 太政官 第二百六十五號 第二百六十六號 第二百六十七號 第二百六十八號 第二百六十九號 四〇一

強盜條例左之通創定候條此旨布告候事

強盜條例

凡強盜、脅誘セラレ、畏懼隨行、二次ニ及フ者ハ、本律ニ依テ科シ、減等ノ例ヲ用ヒス。

○第二百七十號 (七月二十四日) (布)

給沒贓物條例左之通創定候條此旨布告候事

給沒贓物條例

凡正贓轉輾シテ、遠地ニ在ル者、其郵遞費用ハ、本犯ニ償ハシムト雖モ、本犯資力ナケレハ、本主ニ償ハシム。若シ本主、郵遞ノ經費ヲ厭フ者ハ、正贓所在ノ地ニ於テ、其物品ヲ販賣シ、金圓ヲ本主ニ還給ス

○第二百七十一號 (七月二十七日) (布)

聖上 皇后宮來ル八月三日午前第六時二十分御出門相州宮ノ下温泉場へ 行幸被 仰出候旨本年

第二百六十一號布告候處同日午前第五時二十分御出門更ニ被 仰出候條此旨布告候事

地 租 改 正 法

上諭

朕惟フニ租稅ハ國ノ大事人民休戚ノ係ル所ナリ從前其法一ナラス寬苛輕重率キ其平ヲ得ス仍テ之ヲ改正セント欲シ乃チ所司ノ詳議ヲ採リ地方官ノ衆論ヲ盡シ更ニ內閣諸臣ト辨論裁定シ之ヲ公平

(上諭以下百四十三字朱書)

蓄一ニ歸セシメ地租改正法ヲ頒布ス庶幾クハ賦ニ厚薄ノ弊ナク民ニ勞逸ノ偏ナカラシメン主者奉
行セヨ

明治六年七月廿八日

○第二百七十二號 (七月二十八日) (布)

今般地租改正ニ付舊來田畑貢納ノ法ハ悉皆相廢シ更ニ地券調査相濟次第土地ノ代價ニ隨ヒ百分ノ三ヲ以テ地租ト可相定旨被 仰出候條改正ノ旨趣別紙條例ノ通可相心得且從前官廳並郡村入費等
地所ニ課シ取立來候分ハ總テ地價ニ賦課可致尤其金高ハ本税金ノ三ヶ一ヨリ超過スヘカラス候此
旨布告候事

(別紙)

地租改正條例

第一章 今般地租改正ノ儀ハ不容易事業ニ付實際ニ於テ反覆審按ノ上調査可致尤土地ニ寄り緩急
難易ノ差別有之各地方共一時改正難出來ハ勿論ニ付必シモ成功ノ速ナルヲ要セス詳密整理ノ見
据相立候上ハ大藏省へ申立允許ヲ得ルノ後舊稅法相廢シ新法施行イタシ候儀ト可相心得事

第二章 地租改正施行相成候上ハ土地ノ原價ニ隨ヒ賦稅致シ候ニ付以後假令豐熟ノ年ト雖モ増稅
不申付ハ勿論違作ノ年柄有之候トモ減租ノ儀一切不相成候事

第三章 天災ニ因リ地所變換致シ候節ハ實地點檢ノ上損墮ノ厚薄ニヨリ其年限リ免稅又ハ起返ノ
年限ヲ定メ年季中無稅タルヘキ事

第四章 地租改正ノ上ハ田畑ノ稱ヲ廢シ總テ耕地ト相唱其餘牧場山林原野等ノ種類ハ其名目ニ寄
リ何地ト可稱事

十年第七十號布告
ノ以テ田畑ノ稱ヲ
廢用セシム

明治六年七月 太政官 第二百七十二號 (地租改正法)

四〇三

十年第一號第二號
布告發布十七年第
七號布告ヲ以テ廢
止

十年司法省丁第六
十號達參事

十三年第三十六號
布告ニ依リ消滅

第五章 家作有之一區ノ地ハ自今總テ宅地ト可相唱事

第六章 從前地租ノ儀ハ自ラ物品ノ稅家屋ノ稅等混淆致シ居候ニ付改正ニ當テハ判然區分シ地租ハ則地價ノ百分一ニモ可相定ノ處未タ物品等ノ諸稅目與ラサルニヨリ先ツ以テ地價百分ノ三ヲ稅額ニ相定候得共向後茶煙草材木其他ノ物品稅追々發行相成歲入相增其收入ノ額二百萬圓以上ニ至リ候節ハ地租改正相成候土地ニ限リ其地租ニ右新稅ノ增額ヲ割合地租ハ終ニ百分ノ一二相成候迄漸次減少可致事

第七章 地租改正相成候迄ハ固ヨリ舊法據置ノ苦ニ付從前租稅ノ甘苦ニ因リ苦情等申立候トモ格別偏重偏輕ノ者ニ無之分ハ一切取上無之候條其旨可相心得尤檢見ノ地ヲ定免ト成シ定免ノ地無餘義願ニ因リ破免等ノ儀ハ總テ舊貫ノ通タルヘキ事
右之通相定候條詳細ノ儀ハ大藏省ヨリ可相達事
明治六年七月

八年第五百五十二號
加 布告ヲ以テ俱舊道
七年第五百三十三號
加 告ヲ以テ第八草道

地租改正施行規則

第一則 今般地租改正被 仰出候ニ付テハ兼テ相渡罷候券面地價ノ儀舊來石盛ノ不同ト貢租ノ甘苦ニ寄リ高低有之儀ニ付更ニ土地一歲收獲ノ作益ヲ見積各地ノ慣行ニ因リ何分ノ利ヲ以テ地價何程ト見込相立更ニ持主銘々ヨリ爲申立當否檢査ノ上適當可相定事
第二則 最前地券渡濟ノ地ハ地所ノ廉落等無之旨ニ候得共自然廉落又ハ殘歩等ノ懸念有之候分強チ舊帳簿ニ據ル時ハ地ノ廣狹其實ヲ失ヒ陰ニ地價ノ昂低ヲ爲シ共當否ヲ檢スルノ準據無之候ニ付更ニ精數ノ反別爲申立候様可致事
第三則 郡村宅地等價難定場所ハ其村耕地ノ平均又ハ隣村宅地ノ比較ヲ以テ相定候旨可相心得

事

第四則 山間海岸其他ノ宅地他ノ比較無之地價難定分ハ一反ニ付拾錢ヨリ不少稅額ヲ定其趣ヲ券面ニ可記載事

第五則 鄉藏其外學校貧院ノ類是迄無稅ノ地トイヘトモ人民ノ共有スル者ハ宅地同様可相心得事
第六則 一村又ハ數村總持ノ山林秣場等ノ公有地ハ總テ相當ノ地租收入ノ積相心得假ニ地價ヲ定メ規則ノ通收稅可致事

第七則 從前一村又ハ數村ニテ貢租辨納致シ來候堤敷敷道敷共有墓地等ノ類有之候ハ、自今無稅ニ相定候條其反別ノミ可申立事
但從前持主有之分作德米一村ヨリ價ヒ來候類ハ是迄ノ通據置候トモ又ハ一村ニテ右地所買受候トモ相對次第タルヘキ事

第八則 海川ノ附洲湖水線等ノ不定地或ハ試作ノ地所等反別確定無之分ハ何不定地凡反別何程ト相記シ地價相定規則ノ通收稅可致事

第九則 總テ舊來大細受ノ地所ハ現步調查ノ上地價相定規則ノ通收稅可致事
但舊來大細受ノ地所トイヘトモ不定地ノ分ハ第八則ノ通タルヘキ事

第十則 渾テ年季ヲ定メ無稅ノ積開屆置候荒地ノ儀ハ損害ノ厚薄ニ寄リ更ニ起返スヘキ難易ヲ量リ年季ノ長短ヲ定メ年季中無代價ノ地券可相渡事

第十一則 池沼等ニテ持主有之水草其他ノ利潤アルモノハ相當ノ池沼代價ヲ定メ規則ノ通收稅可致事

第十二則 新開場銀下年季中ノ分ハ其年季中無稅ノ積相心得新開場ノ代價ノ無代價ノ券狀可相渡事

九等以上改正正局甲
第十條改正正局甲
第十一條改正正局甲
第十二條改正正局甲
第十三條改正正局甲
第十四條改正正局甲
第十五條改正正局甲
第十六條改正正局甲
第十七條改正正局甲
第十八條改正正局甲
第十九條改正正局甲
第二十條改正正局甲
第二十一條改正正局甲
第二十二條改正正局甲
第二十三條改正正局甲
第二十四條改正正局甲
第二十五條改正正局甲
第二十六條改正正局甲
第二十七條改正正局甲
第二十八條改正正局甲
第二十九條改正正局甲
第三十條改正正局甲
第三十一條改正正局甲
第三十二條改正正局甲
第三十三條改正正局甲
第三十四條改正正局甲
第三十五條改正正局甲
第三十六條改正正局甲
第三十七條改正正局甲
第三十八條改正正局甲
第三十九條改正正局甲
第四十條改正正局甲
第四十一條改正正局甲
第四十二條改正正局甲
第四十三條改正正局甲
第四十四條改正正局甲
第四十五條改正正局甲
第四十六條改正正局甲
第四十七條改正正局甲
第四十八條改正正局甲
第四十九條改正正局甲
第五十條改正正局甲
第五十一條改正正局甲
第五十二條改正正局甲
第五十三條改正正局甲
第五十四條改正正局甲
第五十五條改正正局甲
第五十六條改正正局甲
第五十七條改正正局甲
第五十八條改正正局甲
第五十九條改正正局甲
第六十條改正正局甲
第六十一條改正正局甲
第六十二條改正正局甲
第六十三條改正正局甲
第六十四條改正正局甲
第六十五條改正正局甲
第六十六條改正正局甲
第六十七條改正正局甲
第六十八條改正正局甲
第六十九條改正正局甲
第七十條改正正局甲
第七十一條改正正局甲
第七十二條改正正局甲
第七十三條改正正局甲
第七十四條改正正局甲
第七十五條改正正局甲
第七十六條改正正局甲
第七十七條改正正局甲
第七十八條改正正局甲
第七十九條改正正局甲
第八十條改正正局甲
第八十一條改正正局甲
第八十二條改正正局甲
第八十三條改正正局甲
第八十四條改正正局甲
第八十五條改正正局甲
第八十六條改正正局甲
第八十七條改正正局甲
第八十八條改正正局甲
第八十九條改正正局甲
第九十條改正正局甲
第九十一條改正正局甲
第九十二條改正正局甲
第九十三條改正正局甲
第九十四條改正正局甲
第九十五條改正正局甲
第九十六條改正正局甲
第九十七條改正正局甲
第九十八條改正正局甲
第九十九條改正正局甲
第一百條改正正局甲

第十五則 村方ヨリ差出候一筆限地價相當ナルトキハ兼テ相渡置候券狀爲差出更正ノ反別並地價
ヲ券狀ノ裏ニ相記可下渡事
但券狀裏書ノ上相渡候ニ付テハ別段手数料等收入ニ不及候事
第十六則 村方ヨリ差出候地價不相當ナルトキハ調直ノ儀申渡若心得違ノ者有之及理解候上尙不
服ノ節ハ入札法ヲ以テ地價相定候カ又ハ申立ノ代價ニテ可買上事
第十七則 地券調査相濟候ハ別紙離形ノ通地稅表ヲ製シ施行以前租稅寮ヘ可差出事
離形ハ追テ達スヘシ
右之通相達候事
大藏省事務總裁
參議 大隈重信
明治六年七月

別冊地方官心得書相達候條右之内人民ヘ告知スヘキ條件ハ地租改正若手ノ順序緩急ヲ計リ實際不
都合無之様可取計事
大藏省事務總裁
參議 大隈重信
明治六年七月廿八日

(別冊)

第一章 今般地租ノ改正ハ至大至重ノ事業ナルヨリ論ヲ深メ共調査ヨロシキヲ爲サレハ從前

ノ偏輕偏重ヲ平均スル能ハス故ニ調査ノ間最モ詳悉考按スルヲ要ス

第二章 調査ノ難キ地價ヲ定ムルヲ第一難事トシ土地ノ廣狹ヲ量ルト落地或ハ重複ノ地ナキヲ檢
スル亦之レニ亞ケリ故ニ調査ノ間最モ此兩件ニ注意スヘシ

第三章 地價ヲ定ムルハ賦稅民益ノ因テ分ル所ニシテ若シ其毫釐ヲ調ルルハ民ノ幸不幸ヲ生ス故
ニ下條ニ示ス檢査例ヲ熟記シ土地ノ景況ヲ審按シ然ル後處分スルヲ要ス

第四章 今調査ノ方法ヲ分ツテ二節ト定ム第一ハ人民ヨリ差出セル書上ニ就キ其當否ヲ檢シ第二
ハ實地ニ臨ミ人民言フ所ノ實否ヲ檢スルニアリ

第五章 地所一筆限地價ヲ調査シテ村々ヨリ差出ス時ハ先合計上ニテ第十二章以下ノ檢査例ニ據
リ合計ノ地價目的ノ準據ニ合スルヤ否ヲ檢シ準據ニ合スル者ハ假ニ之ヲ可ト定メ算者一筆限ノ
算計ヲ檢ス可シ

第六章 人民申立ノ地價ヲ準據ト照合シ準據ノ價ヨリ低下スル一割迄ノ分ハ假ニ之ヲ可トスヘシ

第七章 若シ準據ノ價ニ合セサル一割以上ナル時ハ其人民地價商量ノ方ヲ糾シ其言フ所證據アラ
ハ先假ニ之ヲ可トスヘシ

第八章 若シ準據ヨリ低下シテ之ヲ推問スルニ其證據ナキモノハ其調査ニ誤失アルモノトナシ其
事柄ヲ厚ク教諭シ再ヒ調査ヲ遂ケシムヘシ

第九章 若シ一村又ハ數村申合收穫米ヲ詐ル時ハ定免村ハ近傍檢見村ノ坪苜初ノ歩合ヲ參酌シ其
當否ヲ檢シ彌不相當ト察スルルハ先一人一戸耕ヤス所ノ畝歩ヲ推問シ從前一段ノ貢額ト村費諸
掛ヲ尋問シ其餘ス所若干ヲ問ハ、其數必ス尠カルヘシ其數尠ナキハ何ヲ以テ生活スルヤト推
究シ猶厚ク説諭シ其眞ノ收獲ヲ言ハシムヘシ

第十章 第十二章以下檢査ノ法ハ只道理上ニテ地價ノ生スル所以ノモノヲ以テ説明シ之ヲ算定セ

人民ノ差出セル
地價ヲ檢スルノ
法

ルモノナレハ所謂理窟ツメノ者ニシテ活法ニ非ラス如何トナレハ元來土地ノ眞價ハ都鄙ノ便否
人民ノ好惡耕鋤ノ難易營業ノ殊異等相須テ生スルモノニシテ強チ作益ノ多少ノミニ關セサルハ
論ヲ待タス而シテ其好惡ト便否トノ如キハ各人ノ胸間ニ含蓄スル所ノ者ニシテ其形ノ露出セルモ
ノナシ故ニ臆度ヲ以テ其價ヲ算知ス可カラス是ヲ以テ幾回モ賣買シテ各人相競ヒ相糶ルニ非
レハ其實ヲ得難シトス故ニ今其露出セル實益ニ就キ檢査ノ法ヲ設ク則此法ハ地價ヲ定ムル要領
ト知ルヘシ若シ衆人相競ヒ相欲スルノ地ハ此算則ヨリモ其價ヲ増スハ必然ノ理アルヲ以テ必シ
モ此法ニ拘泥ス可ラス

第十一章 此檢査ノ法タル耕鋤其他ノ諸費ヲ除去シ全ク所得ノ實益上ヨリ算ヲ起シ來ルヲ以テ此
準據ヨリ減スルモノハ決シテ無シト言ヒ難シト雖モ多クハ減スヘキノ理ナシ故ニ若シ減スル者
アラハ人民不好不便ノ地乎或ハ違算不調等ノコアルカ殊ニ能ク其所由ニ注意スヘシ

第十二章 檢査例

(甲ハ朱書)

第一則

一田一段歩

此收獲米一石六斗

代金四圓八十錢

内

金七十二錢

殘金四圓八錢

内

種敷肥代一
畝五分引

但一石ニ付
代金三圓四

地租三分ノ
一村入費引

金四拾錢八厘

金一圓二十二錢四厘

小以金一圓六十三錢二厘

殘金一圓四十四錢八厘

此地價四十圓八十錢

此百分ノ三

第二則

一田一段歩

此收獲米一石六斗

此小作米一石八升八合

代金三圓二十六錢四厘

内

金四十錢八厘

金一圓二十二錢四厘

小以金一圓六十三錢二厘

殘金一圓六十三錢二厘

此地價四十圓八十錢

此百分ノ三

一圓二十二錢四厘

地租算法

收獲米代ノ内種肥代ヲ引去タル殘數ヲ甲ト名ツケ 第二則ハ小作米代之ヲ實トシ二年間金利ノ歩合
金ヲ直ニ甲トス

へ百ヲ乘シ稅率三ト村費ノ一トヲ加ヘ法トス 四ハ六歩利ナルハ之ニ法ヲ以テ實ヲ除キ得ル所ノ數ヲ村入費トシ之ニ三ヲ乘シテ地租トス

第十三章 自作ノ地ヲ檢スルハ第一則ヲ以テシ小作ノ地ハ第二則ヲ以テス之ヲ正例ト定ム然レモ各地ノ習慣區別アレハ尙別紙變例ヲモ參酌シ此方法ノ行レ難キ地ハ別段ノ方法ヲ設ケ稟議スヘシ

第十四章 小作米ハ地主ト小作人ト相競ルノ間ヨリ出ルモノナレハ收穫ノ多寡ヲ推知スヘキ確證ニシテ人民互ニ欺隱スル能ハサル者タルヲ以テ第二則ヲ適實ノ者トス故ニ自作地ノ分ハ合計上ニ於テ小作地反別ノ比例ヲ以テ自作地小作米ノ假標ヲ設ケ第二則ニ據リ調査シ其當否ヲ見ルノ參考ニ供スヘシ

第十五章 土地ヲ人ニ預ケ小作セシムルハ自ラ耕作スルト其勞費殊異アルハ勿論隨テ收益モ亦多寡異カル可ラス故ニ小作地ヲ以テ自作地ニ比スレハ其利自ラ少キノ理アリ譬ヘハ收益ノ利分自作地六分ノ利ナレハ小作地ハ四分ニテ相當ナルヘシ檢査ノ際尤注意スヘシ

第十六章 小作米ハ地價ヲ求ムルノ標のナリト雖モ古來ノ名田小作永小作ノ類地主ノ其地ヲ自由スルノ權利アラサル者及ヒ小作人ニテ貢米諸役ヲ出スノ類ハ此標的ト爲ス可ラス

第十七章 今收穫ヲ量ルニ一郡一村中ニ古檢新檢其他間竿ニ長短アリ區々入交リタル地ハ一步ノ收穫ニ多少ノ差アルヲ以テ右様ノ地ヲ檢査スルノ際彼此混同セサル様注意スヘシ

第十八章 地價ヲ檢査スルノ際種子肥糞ノ歩合ハ一定ノ標的ヲ設ケサレハ比例ノ計算スヘキナレ故ニ第十二章ニ掲グル所ノ收穫米代ノ一割五分ヲ以テ定率トス且土地ニ課スル村入費ハ從前一定ノ規則ナシト雖モ今後地租ノ三分一ヨリ超過スヘカラサルヲ以テ檢査ノ際必之ヲ以テ村費ノ定率トスヘシ

第十九章 土地ヲ賣買スルヤ各人ノ好惡ニ因リ其利分低昂アリト雖モ其差等ノ如キハ概略二分利ヨリ六分利マテヲ以テ普通トス故ニ今地價ヲ檢スルノ際自作地ハ七分利小作地ハ五分利ヲ以テ其極度トスヘシ

第二十章 米價ハ從來其地ニテ用ヒ來レル各所ノ相場ヲ推問シ申立ノ米價ト照合シ其當否ヲ檢スヘシ

第二十一章 畑方ハ小作米金ヲ以テ地價ヲ算スルヲ本則トス可シ時トシテハ第二十四章ニ照準其價ヲ定ムヘシ

第二十二章 鹽田ハ竈元諸器械モ其地ニ屬セサレハ營業ノ成リ難キヲ以テ地價ヲ定ムル甚難シ故ニ賣買ノ代價ヲ以テ定ムヘシ

第二十三章 人民所有ノ山林藪澤ノ類其價ヲ定ムル亦難シ其ノ收入ト賣買代價ノ照應ヲ以テ定ムヘシ

第二十四章 總テ收穫ノ利益詳カナラス價ノ當否決シカタクモノハ鑒定人ヲ設ケ實地上ニ於テ其價ヲ言ハシメ變例中第一則ノ意ニ基キ鏡耀セシメ鑒定人ノ言ト參的シテ其價ヲ定ムルモ亦可ナリ

第二十五章 席上ノ調査相整ヒ地價ノ概略見込相立ツ時ハ左ノ略表ヲ制シ實地調査ノ目的トスヘシ

新舊稅額比較表

| 田 | 畑 | 宅地 | 存反別舊稅額金改正反別地 | | | 價地券稅 | | | 稅金比較 | | |
|----|----|----|--------------|----|----|------|----|----|------|----|----|
| | | | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 |
| 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 |
| 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 |
| 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 |
| 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 | 何程 |

實地ヲ検査スルノ法

第二十六章 派出ノ人員ハ適宜ニ定ムヘシト雖モ主事タル者ハ權大屬以上タルヘシ

第二十七章 實地派出ノ節ハ兼テ地券掛ヲ命シタル郡村附屬又ハ地理ニ明ナル者ヲ撰ミ隨行セシメ願問ニ備フヘシ

第二十八章 實地ニ臨ムニニテ手又ハ三手ニ分レ派出セハ其始メ一同集合シ先ツ一村ヲ検査シ着手ノ方法ヲ試ミ各員異様ノ處分ナキヲ要スヘシ

第二十九章 耕地巡視ノ時ハ一筆毎ノ畝抗ヲ改メ落地ノ有無ヲ點檢シ廣狹ノ當否ヲ視察シ三四ヶ所竿入様歩イタシ書上ノ步數ト増減アルトキハ再調ヲ命スヘシ

第三十章 様歩ノ上調査整ヒタルモノハ其近傍便宜ノ場所ニ於テ地價ヲ調査スヘシ

第三十一章 前以テ差出セル帳簿ノ代價至當ナルハ實地ト照考シ格別昂低ヲ生スヘカラスト雖モ第七章ノ如キ低價ニ申立タル地ハ殊更注意シ其言ノ實否ヲ検査スヘシ

第三十二章 若シ人民書上ノ地價不相當ト察スルトキハ篤ト説諭シ猶承伏セサルハ一村ノ中チ上中下數筆ノ地ヲ撰ミ戶長地主一同立會セ變例第一則又ハ第二則ノ手續ヲ以テ入札セシムヘシ

第三十三章 自然入札法ヲ以テ處シカタク時ハ共者申立ノ價ヒヲ以テ官ニ買上ケルモ申分ナキ歟ヲ推問シ申分ナキ旨申立ルトキハ承諾ノ請書ヲ申付ヘシ

第三十四章 請書ヲ申付ケ價ヒヲ増サ、ルハ先適當ノモノト看做シ置派出ノ人員一同會義ヲ盡シ猶隣村同位ノ地價トヲ照考シ其當否ヲ定ムヘシ

第三十五章 買上ノ請書ヲ命スルニ至リ請書差出スニ於テハ其申立ノ價ヒ的當ナルニ近キヲ以テ眞ニ買上ケル手順ニ至ルハ稀ナルヘシト雖モ實ニ詐偽アルト察スル時ハ買上ノ處分ニ及フヘシ

第三十六章 地價ノ參考ニ供センタメ前々ノ割賦帳皆濟帳檢見歩刈帳最前ノ地券大帳地引繪圖等ノ類ハ必ラス携ヘ行クヘシ

第三十七章 當ニ水旱ノ憂アル地ハ其地價モ亦普通ヨリ減少ナルノ理アリ宜シク前々貢額ノ高下ヲ參考シ至當ノ價ヲ定ムヘシ徒ニ人民ノ申分ニ據リ格外ノ低價ニ定ムヘカラス

第三十八章 數村ノ調査畢ラハ最前渡シタル地券ヲ一村毎ニ取廻メ差出サセ地價ノ調査ト共ニ其木應ニ送達スヘシ

第三十九章 本廳ニ於テハ各所ヨリ送達セル調書ヲ再檢シ其總計ヲ算シ前々貢租ノ額ト新稅額トノ増減當否ヲ點檢シ大帳ヲ整理シテ後地券ノ裏ニ更正ノ反別地價ヲ記載シテ下渡スヘシ

但大帳ハ最前調査セル帳簿ヘ朱字ニテ更正ノ反別地價稅額ヲ記スカ又ハ新ニ製スルトモ便宜タルヘシ

裏書式

一 耕地

但何尺竿

代價何程

此百分ノ三

地租

右明治何年何月何日更正授與之

何府縣知事令 苗字 名 印
 検査人
 某官 苗字 名 印

第四十章 稅法改正ニ因リ地價ヲ調理スルハ都テ舊來ノ貢額ニ拘ハラズ銘々實際賣買スヘキ見込

人民ヘ示スヘキ

明治六年七月 太政官 第二百七十二號 (地租改正法)

ノ價左ノ離形ノ如ク書載シテ進達スヘキ旨村々へ布達スヘシ

離形

一田何反歩

何之某印

此收穫米何程

但種肥其外諸費ヲモ引去ラス一作又ハ兩毛作トモ總テ其地一歲ノ收穫ヲ擧ケ可シ

地價何程

一畑何反歩

右同人印

此收穫品何程

但加ハ麥桑茶藍ノ類總テ其品ノ數量判然タルモノハ悉ク記載スヘク其品柄ニヨリ其量ヲ記シ難キモノハ收穫ノ代金ヲ記スヘシ

地價何程

但小作米何程

小作人某印

一屋敷何反歩

右同人印

地價何程

如此一人別ニ相認一村ノ合計左ノコトク仕譯スヘシ

合何拾何町何反何畝何歩

但何一歩何尺半

地價何萬何千何百何拾何圓何拾何錢何厘

內

一田何反歩

地價何程

內

反別何程

自作

此收穫米何程

地價何程

反別何程

小作

此收穫米何程

地價何程

小作米何程

一畑何反歩

地價何程

內

反別何程

自作

此收穫品何程

地價何程

反別何程

小作

此收獲品何程

地價何程

小作金何程

一屋敷何反歩

地價何程

外

一持山何反歩

地價何程

一林何反歩

地價何程

如此種類へ持主仕露
帳別段ニ仕立へキ事

右ハ今般税法御改正ニ付私共村方銘々持地反別代價等可申上旨御達シニ付私共立會從前隱田
切開繩伸ノ類マテ地毎ニ取調箇所落ハ勿論隱歩等一切無御座且取揚米並小作米等聊詐欺ノ儀
不奉申上候若心得違ノ儀有之後日相顯ハル、ニ於テハ如何様ノ御處分有之候トモ毛頭申分無
御座候依之地主一同調印ヲ以奉申上候以上

何國何郡何村

百姓總代

何 某印

戶長

何 某印

年號月日

何府知事 何某殿

第四十一章 右離形ヲ作爲スルニ當リテ左ニ記スル第四十二章ヨリ第四十四章ニ至ル箇條ヲ管内

へ布達シ調理ノ際矛盾アラシムルコ勿レ

第四十二章 一村中古檢新檢入交リ竿繩長短アルモノハ合計ノ内何反歩ハ何尺竿何町歩ハ何尺竿

ト記載セシムヘシ

第四十三章 地代金ハ一ヶ年收獲ノ内種肥代其外諸費ヲ引去全ク地主所得トナルヘキ米金ヲ其村

從前賣買仕來ノ利息割合ヲ以テ現今互ニ賣買スヘキ者ト看做シ見込ノ代價ヲ記載セシムヘシ

第四十四章 離形ニ記セル收獲米ハ是迄年々其地ヨリ登量ノ總數ヲ舉クヘシ尤モ其年々豐凶ニ依

テ一定ナラスト雖モ平年作柄ヲ正實ニ書出サシムヘシ

檢査變例

第一則

一二村申立ノ收獲米及ヒ小作米ノ員數不相當ナルカ又ハ諸入費等多分ナル事ヲ唱へ檢査ノ算當ニ

當ラス一村申合セテ低價ニ書出セルト察スル時ハ臨機左ノ入札法ヲ施スヘシ

一二村ノ耕地ヲ上中下三等又ハ五六等其品位限リ區分シ離形ノ如ク調査セシムヘシ

離形

耕地品位

上ノ部

何番ヨリ
何番マテ

中ノ部

何番

下ノ部

何番ヨリ
何番マテ

何番

何番

上ノ部何反歩

申立代價何程

合計中ノ部何反歩

代價何程

下ノ部何反歩

代價何程

一右品位ノ内各一二ヶ所ツ、戸長小前一同立會ハセ面前ニテ閣取ヲ以テ糶地ヲ定ムヘシ

一右糶地定マラハ村内及ヒ近傍村々ノ者ヲシテ各自買買スヘキ見込ノ價ヲ入札セシメ高札人ニ買取ラシムヘシ

一落札ノ代價最前持主ノ申立ヨリ高價ナルル地主コレヲ賣渡スコヲ欲セサレハ五圓ヨリ少カラス

二十五圓ヨリ多カラサル謝金ヲ其村ヨリ落札人ニ渡サシムヘシ

一若シ又舊地主持續クコヲ欲セサルルハ其者申立ノ代價ヲ以官ニ買上ケ更ニ入札ノ代價ヲ以テ高札人へ賣渡スヘシ若シ落札人即金ニ納メ能ハサルルハ舊地主申立ノ代價ヲ即金ニ納サセ其餘ノ間金ハ年賦ニ申付ヘシ

一若シ落札直段持主申立ノ代價ヨリ低價ナルルハ持主賣拂フコヲ欲セサルハ必然ナレハ入札ノ代價其當ヲ得サルモノト見做シ地主申立ノ代價ヲ以テ地價ト定ムヘシ尤其申立ノ價不當ト察スルルハ時トシテ買上ノ處分スヘシ

一落札代價ノ當否ヲ檢スルニ第十二章ノ例ヲ以テシ粗適當スルルハ其當ヲ得ルモノト見做シ其比類ヲ推シテ一村上中下ノ地價ヲ定ムヘシ

一一人持地ノ上ニテ代價不相當ト察シ規則第十八則ノ手續ヲ以テ入札法ヲ施スニ至ラハ先ツ持主申立ノ代價ヲ公示シテ入札セシメ其高札最前申立ノ代價ヨリ一割以上ニアラサレハ落札セシメ持主申立ヲ相當ト見做スヘシ

一右地所落札ノ代價最前持主ノ申立ヨリ一割以上ナルル持主之ヲ賣渡スコヲ欲セサレハ一圓ヨリ七圓迄ノ謝金ヲ落札人へ渡サシムヘシ

一假令ハ甲所有ノ地ヲ乙落札ニ成ルト雖モ其地所ニ甲ノ作物アルルハ之ヲ共儘乙ニ賣渡ストモ又甲ハ乙ノ小作人トナルル都テ甲乙相對タルヘシ

第二則

一小作入付米ハ小作人種肥手間料等ヲ引去リ其殘數ヲ地主へ差出スヘキモノニテ申立ノ員數欺隱スヘキモノニ非スト云々土地ノ慣習ニヨリ強テ檢査例ニ據リ難キ事情アルルハ臨機小作米ノ入札ヲ施行スヘシ此法ヲ施行セント欲セハ第一則ノ如ク上中下ノ品位ヲ取調サセ閣取ニテ糶田ヲ定メ一村ノ中地所持主五六人此此地ノ地主ハ必ス小作人五六人此此地ノ小作人ハ必ス相集メ向後銘々此地ヲ小作セン歟又ハ人ニ小作セシメント欲セハ何程ノ小作米ヲ出スヘキ乎ヲ入札セシメ其高札人ヲ以テ以來其地ノ小作人ト定ムヘシ

一若落札ノ小作米從前ヨリ相増スル是迄ノ小作人引續キ小作センコヲ欲セハ元小作人ヲ以テ其地ノ小作ト定メ五十錢ヨリ五圓マテノ謝金ヲ元小作人ヨリ取立落札人へ相渡スヘシ

一上中下各等ノ小作米其類ヲ推シテ通算シ先一村合計上ニテ第十一章ノ第二則ニ隨ヒ其村ノ地價ヲ算出スヘシ

一地主ハ毎ニ小作米ノ多カラシムルハ最難シトス故ニ此法ハ地主ノ申立タル小作米ノ高分テ地主ノ申立タルヨリモ多カラシムルハ最難シトス故ニ此法ハ地主ノ申立タル小作米ノ高分

外ニ少クシテ之ニ幾分ヲ増スモ尙小作ノ利益アルヘキヲ確手見据タルキ及ヒ耕地少ク人民多ク手ヲ虚フシテ毎ニ耕スニ地ナキヲ憂ル地ニノミ行フヘキモノトス若シ深ク此時ト地トニ注意スルコトナク此法ヲ妄用スルハ平地上ニ風波ヲ起スコアルヲ以テ最深思熟慮スルヲ要ス

第三則

地主所得ト舊貢米トヲ以テ地價ノ當否ヲ檢スルノ例

一田壹反歩

此舊貢米五斗

此代金壹圓五十錢

一地主全所得米九斗

此代金二圓七十錢

外二斗

合四圓二十錢

内

壹圓四十錢

殘二圓八十錢

此原價四十六圓六十六錢七釐

此百分ノ三二圓四十錢

第四則

最前渡シタル地券ノ代價ト舊貢額トヲ根據トシ今度書出セル地價ノ當否ヲ檢査スルノ例

新稅引

六分利

諸費見込除之

一田一反歩

舊地券ノ地價三十八圓五十七錢 舊稅額存在セル地券代價ナリ

舊貢米五斗

此代金壹圓五十錢

此原價二十五圓

二口合六十三圓五十七錢

内

壹圓二十七錢壹釐

此原價二十壹圓十八錢三釐

殘四十二圓二十八錢七釐

此百分ノ三壹圓二十七錢壹釐

○第二百七十三號 (七月二十八日)(布)

犯姦條例左之通制定候條此旨布告候事

犯姦條例

凡妻妾ヲ縱容シテ人ト通姦セシムル者ハ本夫姦夫姦婦各懲役一年因テ財ヲ圖ル者ハ枉法ニ准シ重キニ從テ論ス

○第二百七十四號 (七月三十日)(布)

居喪犯姦律左之通改正候條此旨布告候事

改正居喪犯姦律

父母舅姑夫ノ喪ニ居リ姦ヲ犯ス者ハ各凡姦ニ一等ヲ加フル律ヲ改メ父母舅姑ノ喪ニ居リ姦ヲ犯ス

十三年第三十六號
布告ニ依リ消滅

同上

十三年第三十七號
加告ニ依リ消滅

者ハ凡姦ヲ以テ論シ夫ノ喪ニ居リ姦ヲ犯ス者ハ有夫ヲ以テ論ス相姦スルノ人ハ並ニ同罪
○第二百七十五號 (七月三十日) 布 府 縣

從來犯罪逃亡之者人相書一定ノ文例無之往々粗漏ニシテ搜索ノ手掛リニ相成兼候儀モ有之ニ付自
今左之通書式一定候條右ニ照準シ知り得ヘキ丈ケ詳細ニ記載シ司法省ヘ可届出此旨相達候事

第一ヶ條

一犯人ノ生國及ヒ以前寄留ノ地現今住居ノ地等總テ住所移轉ノ地名ヲ記スル事

第二ヶ條

一中年職業ヲ改ムル者ハ元ノ職業ヲ併セ記ス又定業ナシト雖モ所長ノ技藝等有之者ハ之ヲ記載ス
ル事

第三ヶ條

一雇人ハ雇主ノ住所職業姓名及雇入ノ年月並ニ請人ノ住所姓名ヲ記スル事

第四ヶ條

一妻子ノ有無又ハ他方ニ殘シ置キ或ハ奉公ニ遣シ置ク等ヲ記スル事

第五ヶ條

一逃亡之節着用ノ衣服並持チ去ル物品又ハ殘シ置クトコロノ書類物品ヲ詳細ニ記スル事

第六ヶ條

一逃亡之節變形致シ候ハ、其旨ヲ記スル事

第七ヶ條

一宗門ヲ記載スル事

第八ヶ條

教部省第三十號
著

一容貌ヲ記スル事

但シ寫眞ヲ以テ届出ルモノト雖モ寫眞ニテ不明ノ廉ハ書式ニ照シ詳細ニ記載スヘシ

届書雛形

某府第何大區何小區某町何番地住居又ハ寄留

某縣貫屬士族 磁某藩

又ハ某縣管下某國郡某町農工商業幾男

又ハ何某地何身分何某雇人請人某地何身分何某

苗 字 名

舊名 某 何十何年何月

一丈何體

一顏何體

一色何體

一頭髮何體 又ハ逃亡ノ節何體ニ變形ス

一眼何體

一肩何體

一鼻何體

一口及齒何體

一音聲何體

一痘痕又ハ疵所

一逃亡ノ節着用衣服並持去トコロノ物品又書類

一同上ノ節置トコロノ物品又ハ書類
 一住居 生國某地某年某地へ移住又ハ某年ヨリ某地寄留
 一職業 某職業又ハ元某職業當時某職業ニ改メ又ハ元某職業當時定業ナシ
 一所長 某ノ技藝ニ長ス
 一妻子 有之又ハ無之又ハ他方ニ殘シ置或ハ奉公ニ遣シ置ク等
 一何宗門
 右ノ者儀某月某地ニ於テ何々ノ罪ヲ犯シ致逃亡候ニ付各地方ニ於テ嚴密探索捕縛致候様御布告
 有之度此段御届申上候也
 年號幾年何月何日

○第二百七十六號 (七月三十日)(布)

海陸軍刑律別紙ノ通改正增加候條此旨布告候事

(別紙)

海陸軍刑律第十條第十四條改正

凡軍人軍屬租稅地田其他本貫ノ事ニ屬セル諸犯國法之諸犯並ニ失誤朝賀殿廷失儀衝突儀仗至下馬
 牌不下及ヒ違式鞋違等ノ諸犯ハ司法衙門ニ付シ此律ヲ以テ論セサル事

海陸軍刑律增加條例

第一條 凡軍人陸軍ニ在テ各種兵隊ノ艦員タラス海軍ニ在テ艦船乘員及ヒ各種兵隊ノ艦員タラス
 シテ陸海軍省並ニ該管諸寮司等ニ出仕スル者並ニ軍屬當該省司ニ奉事スル者軍務上ノ過誤失錯
 輕犯其罰本律内二十一日ノ禁錮ニ當ラサル以下ノ者ハ尙其輕重ヲ斟酌シテ二週一週三日ノ謹慎
 ヲ以テ論ス

第二條 其罰一週以上ニ當ル者ハ軍法裁判所ニ付シテ之ヲ論決セシメ共三日以下ニ止ル者ハ省内
 ニ在リ局長ヨリ寮司等ニアリ其長官ヨリ命スルコトヲ聽ス

第三條 凡大佐以下並ニ大佐同等ノ軍屬以下輕犯罰三日以内ノ謹慎ニ止ル者苟モ軍秩ヲ紊ルコトナ
 キ時ハ其長官登時之ヲ命シ而後卿ニ申告スルコトヲ聽ス

第四條 其一週以上ニ當ル者奏任官以上ニ在テハ旨ヲ請ヒ推問スルノ例ニ在リ
 但事急卒ニ出テ即時推問セサルヲ得サルハ推問シテ後ニ奏聞スルヲ聽ス

第五條 凡文案ヲ誤署シ時日ヲ稽緩シ數目ヲ差失シ簿書ヲ遺脱スルノ類既ニ行スト雖モ隨テ覺舉
 シ追改シテ事ニ害ナキヲ得ル者ハ其罪ヲ免ス

第六條 凡上件ノ失錯既ニ行シ事爲ニ涉ルニ臨ミ始テ發覺シ然モ未タ事ヲ害スルニ至ラス仍改正
 ヲ得ル者ハ一週ヨリ二日ヲ以テ論ス

第七條 凡誤テ官物ヲ毀損シ若クハ遺失シテ仍補償スルコトヲ得又出納銷算ヲ誤リ仍釐正スルコ
 ヲ得ル者ハ二週ヨリ一週ヲ以テ論ス

第八條 凡ソ日ヲ誤テ公座セス直スヘクシテ直セス宿スヘクシテ宿セサル者皆常律ニ依テ論
 ス

第九條 凡不應爲ノ律ニ當ル者ハ常律ニ依テ論ス
 第十條 凡出納有違那移出納私借官物不覺被盜等ノ諸犯ハ皆常律ニ依テ論ス

○第二百七十七號 (七月三十一日)(布)

府縣 府 縣 府縣社神官ノ月給ヲ廢止シ自今鄉村社同様人民ノ信仰歸依ニ任セ給與可爲致此旨布告候事

○第二百七十八號 (八月二日)(布)

十九年宮内省達第
一號ニヨリ消滅

明治六年八月 太政官 第二百七十七號 第二百七十八號

皇族家令等級左之通改定候條此旨布告候事

内親王家令 官等八等
世襲宮並一代宮家令 官等九等

十三年第三十六號
布告ニ依リ消滅

○第二百七十九號 (八月二日) (布)

詐偽律中偽造斛斗秤尺條例左ノ通創定候條此旨布告候事

偽造斛斗秤尺條例

凡斛斗ノ邊縁ヲ増補シ秤量ノ標星懸紐ヲ變換シテ利ヲ圖ル者ハ懲役一年半情輕キ者ハ不應爲律ニ問ヒ輕重ヲ分ツ

○第二百八十號 (八月二日) (布)

諸省使府縣へ

本年六月第二百二號布告諸公文署名式初條其長次官ノ名ヲ署シ差出スヘシト有之候處向後連署ニ不及長官ノ署名シ長官欠員ノ節ハ次官署名スヘク此旨相達候事

○第二百八十一號 (八月三日) (布)

院省使府縣へ

大禮佩劔別冊之通被定候條此旨相達候事但從前之刀ヲ相用候儀可爲勝手事

(別冊)

大禮佩劔表並圖 勅奏判官並非役有位部

大禮佩劔新制汎則

大禮佩劔ノ制勅任奏任ハ金裝判任ハ銀裝タルヘシ共式後圖ノ如シ

但非役有位四位以上ハ勅任ニ同ク五位以下ハ奏任ニ同シ

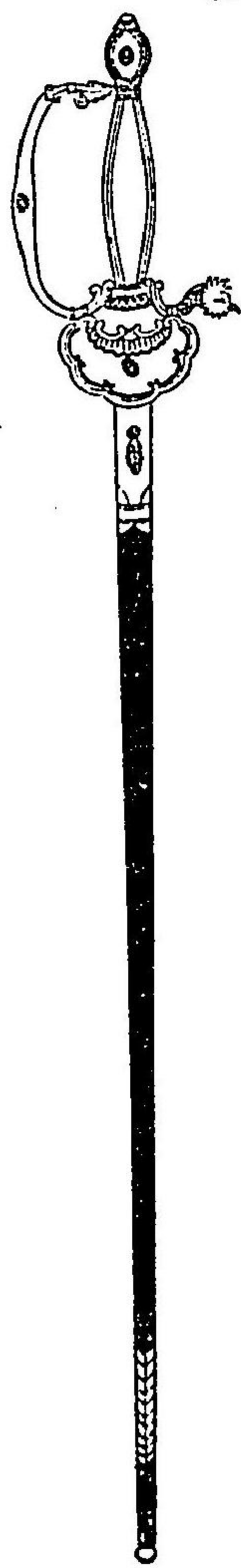
劔ノ總尺概ネ三尺餘ヲ以テ度トス然レモ體格ノ長短ニヨツテ斟酌スヘシ

劔身ノ制圖ノ如キヲ以テ定式トス然レトモ各自適宜ヲ以テ從前ノ刀身ヲ換用スルモ妨ケナシ
但裝飾鍔章等ハ本條ノ定式ニ從フヘシ

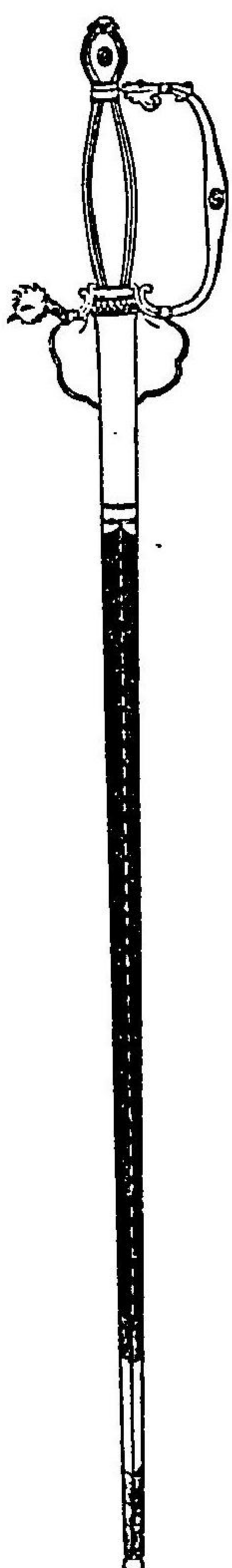
| | | | |
|-----|------------------|--------------|-----|
| 柄 | 勅任 | 奏任 | 判任 |
| 頭環 | 卵形章表裏二箇 桐帶章密紋 | 同上 | 同上 |
| 覆輪絲 | 雲頭章 | 無章 | 同上 |
| 鳥頭 | 鳳 | 同上 | 同上 |
| 鐔 | 卵形章一箇 桐帶章密紋 | 同上 | 同上 |
| 鞘 | 黑革 | 同上 | 同上 |
| 鞘口 | 雲頭章 桐帶章密紋 | 無章帶 桐帶章密紋 | 同上 |
| 鞘舌 | 葉形章 | 同上 | 同上 |
| 鑿 | 桐帶章密紋 | 同上 | 同上 |
| 帶取 | 勅任 | 奏任 | 判任 |
| 運轉環 | 金線裝 | 銀線裝 | 黑羅紗 |
| 鉤 | 金 | 同上 | 同上 |
| 鉤 | 金線裝 | 銀線裝 | 黑革 |
| 鉤 | 金 | 同上 | 同上 |

大禮佩劔全圖

表



裏

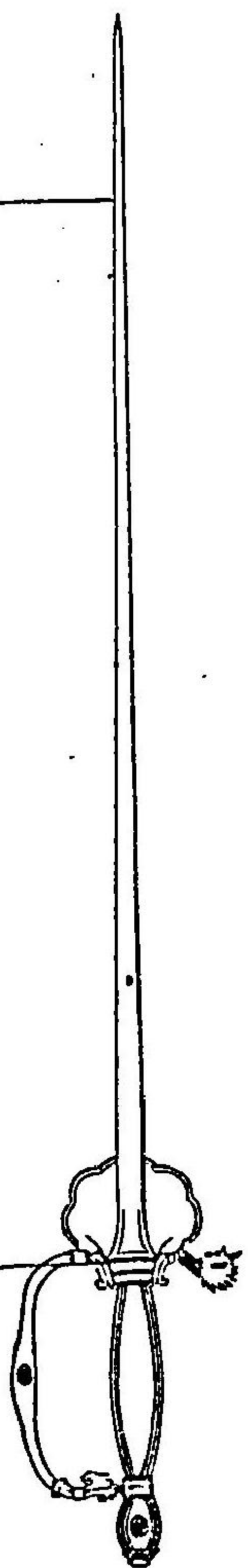


帶取ニ挿入シタル圖



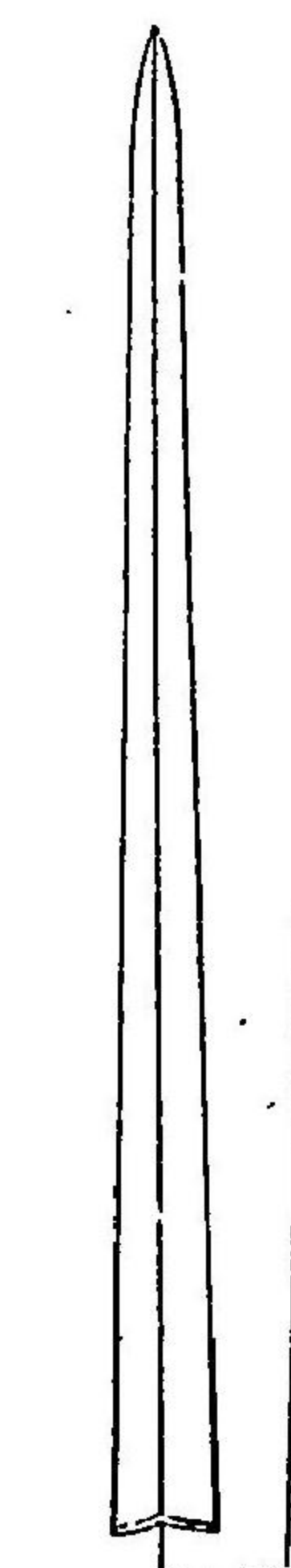
劔身之圖

裏面



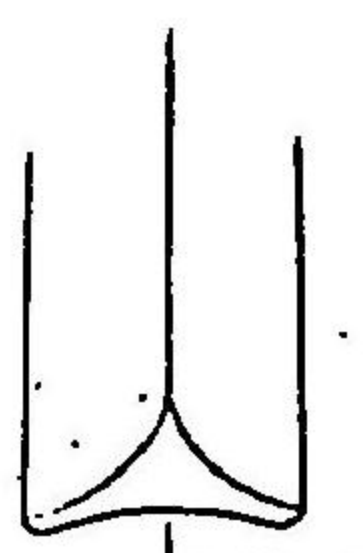
劔頭截斷之圖

表面

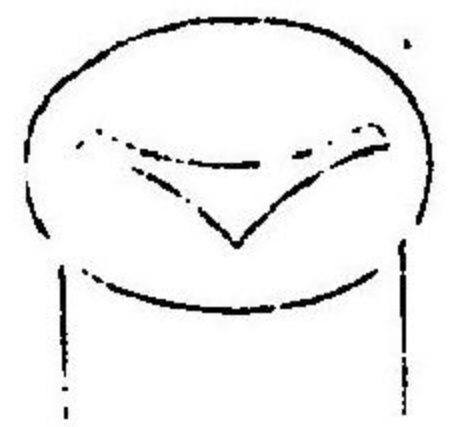


鐔際截斷之圖

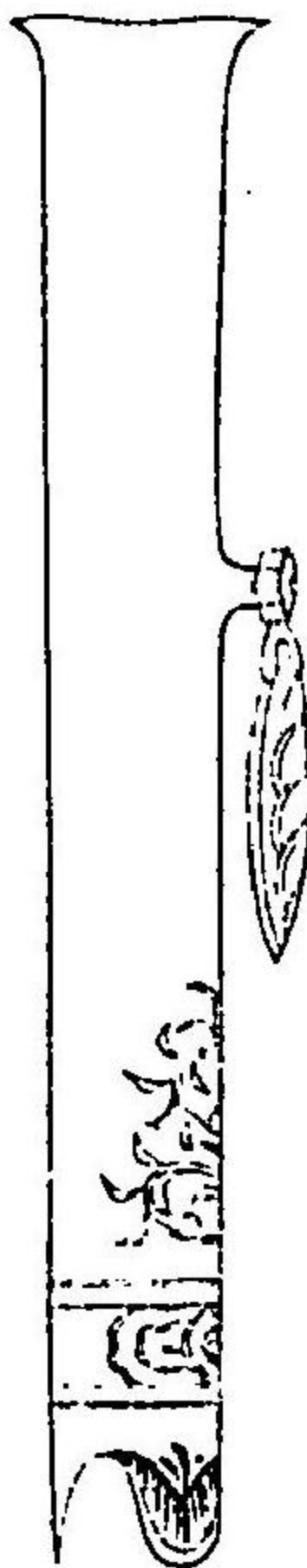
表面



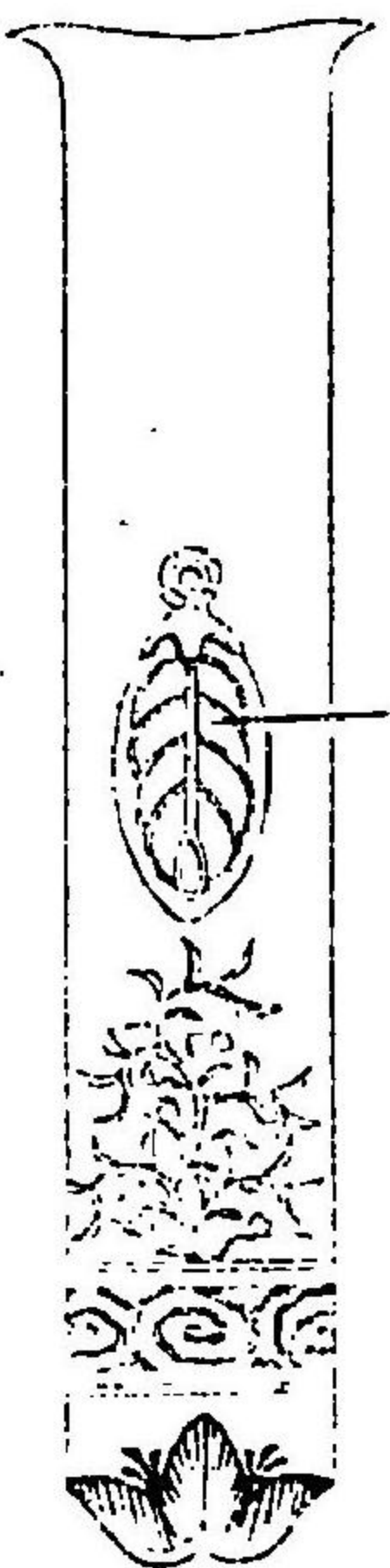
鞘口之圖



側面

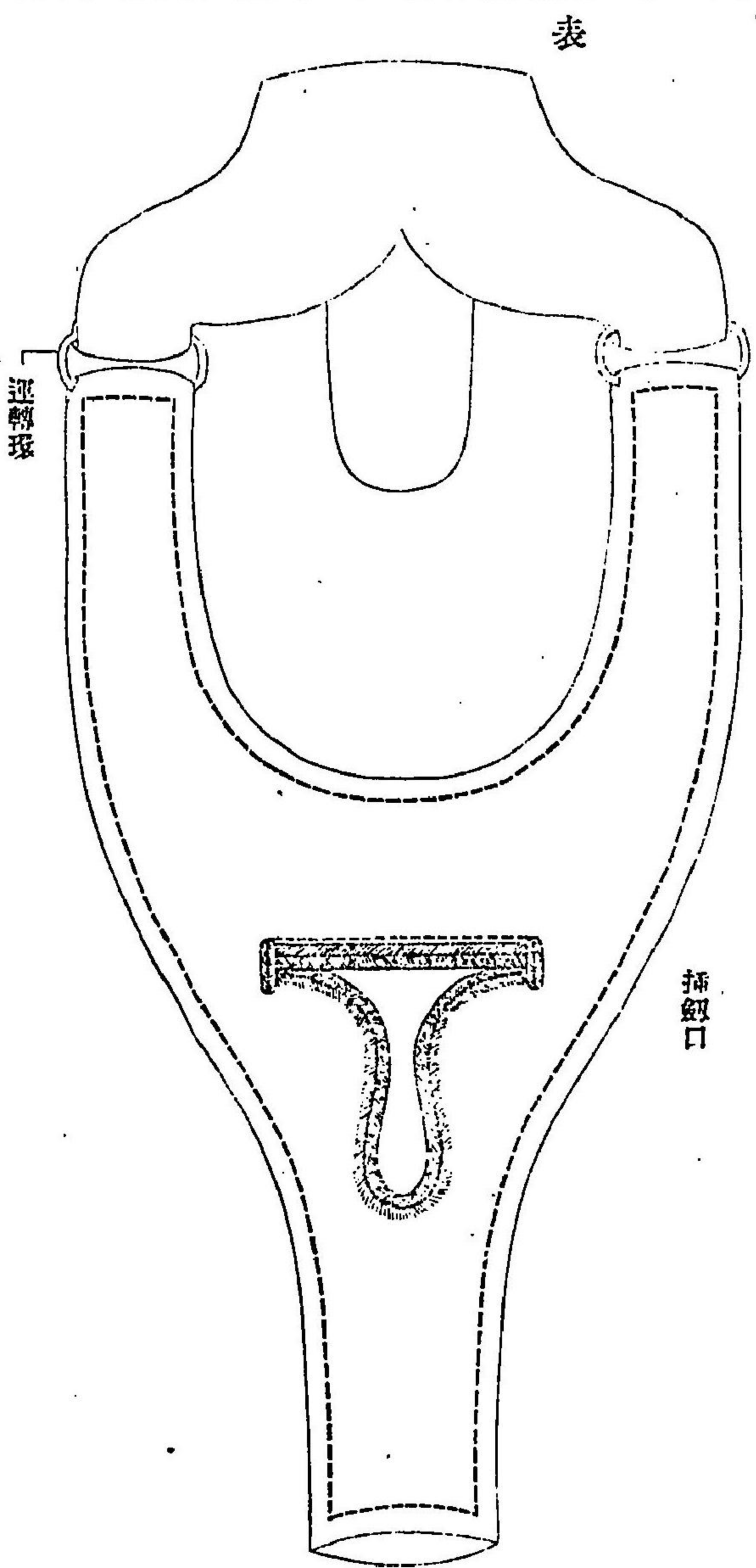


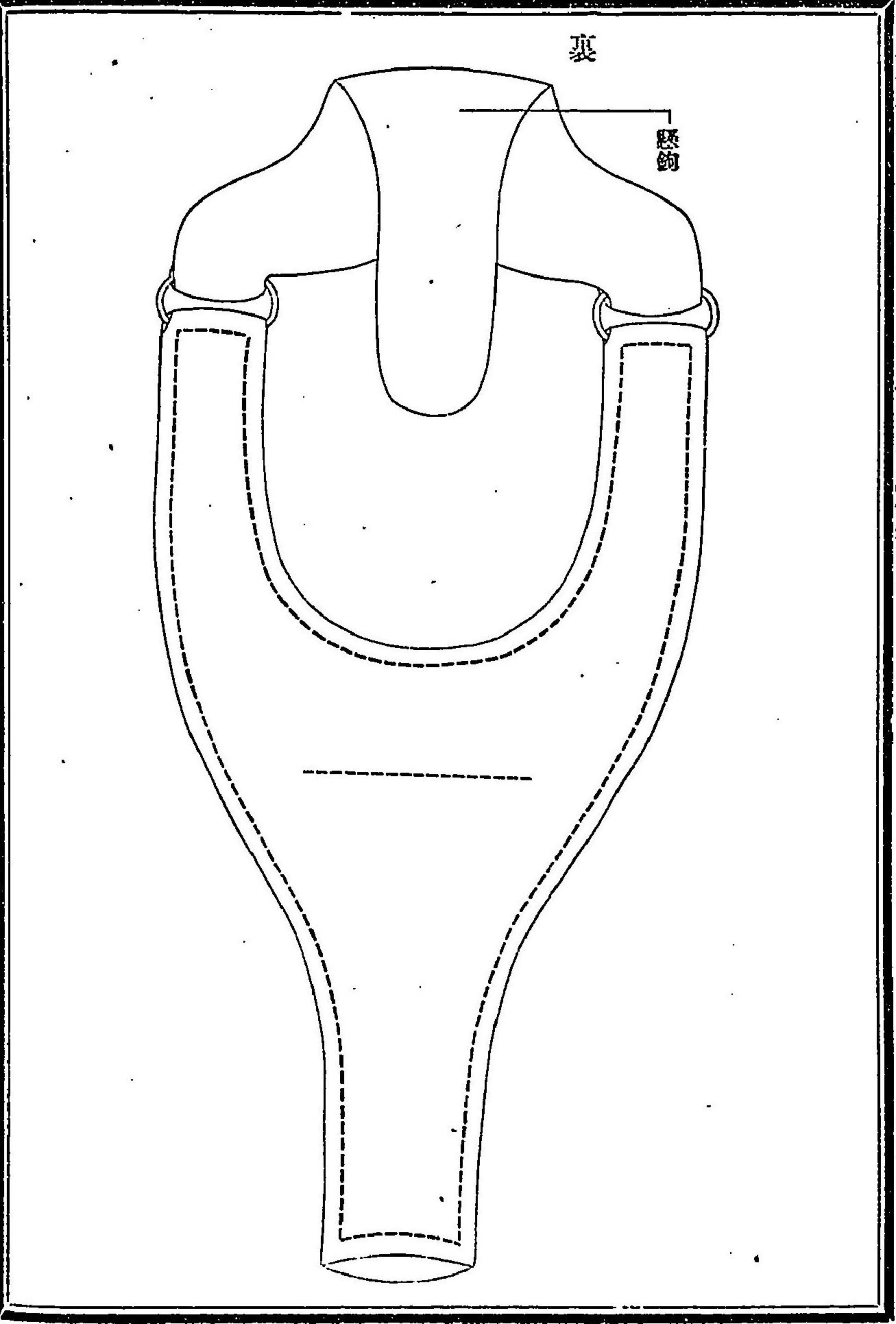
鐙之圖



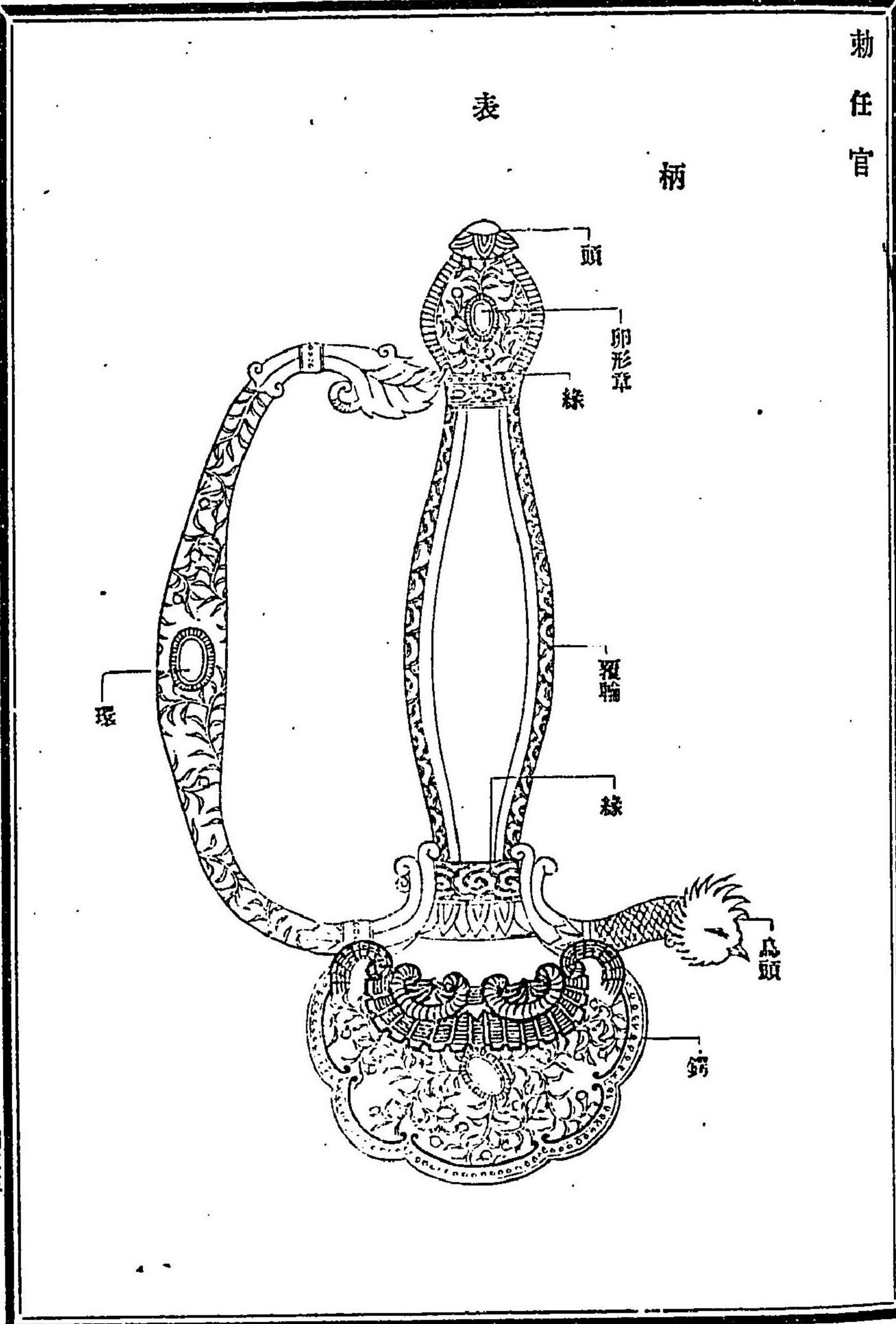
鞘舌

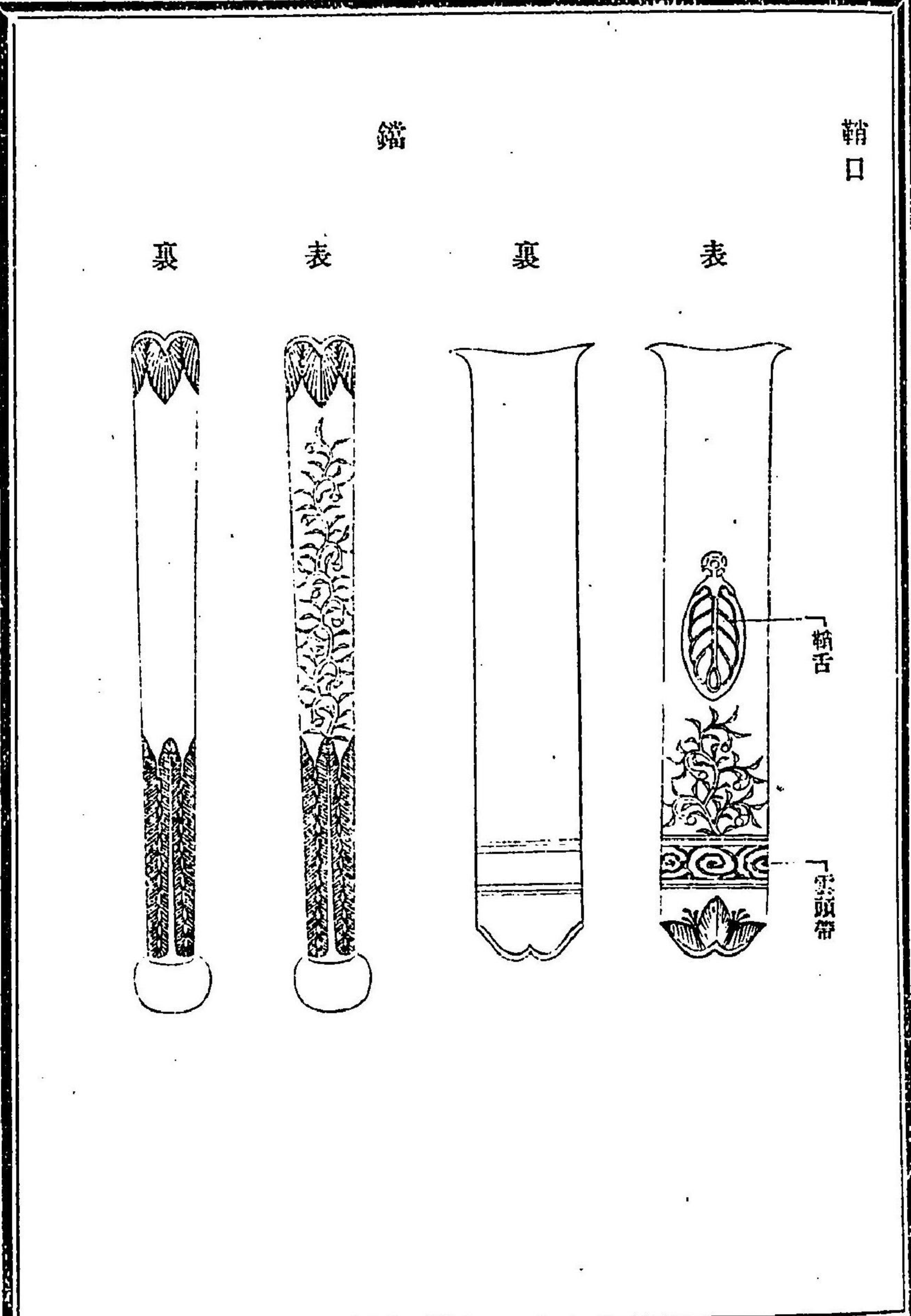
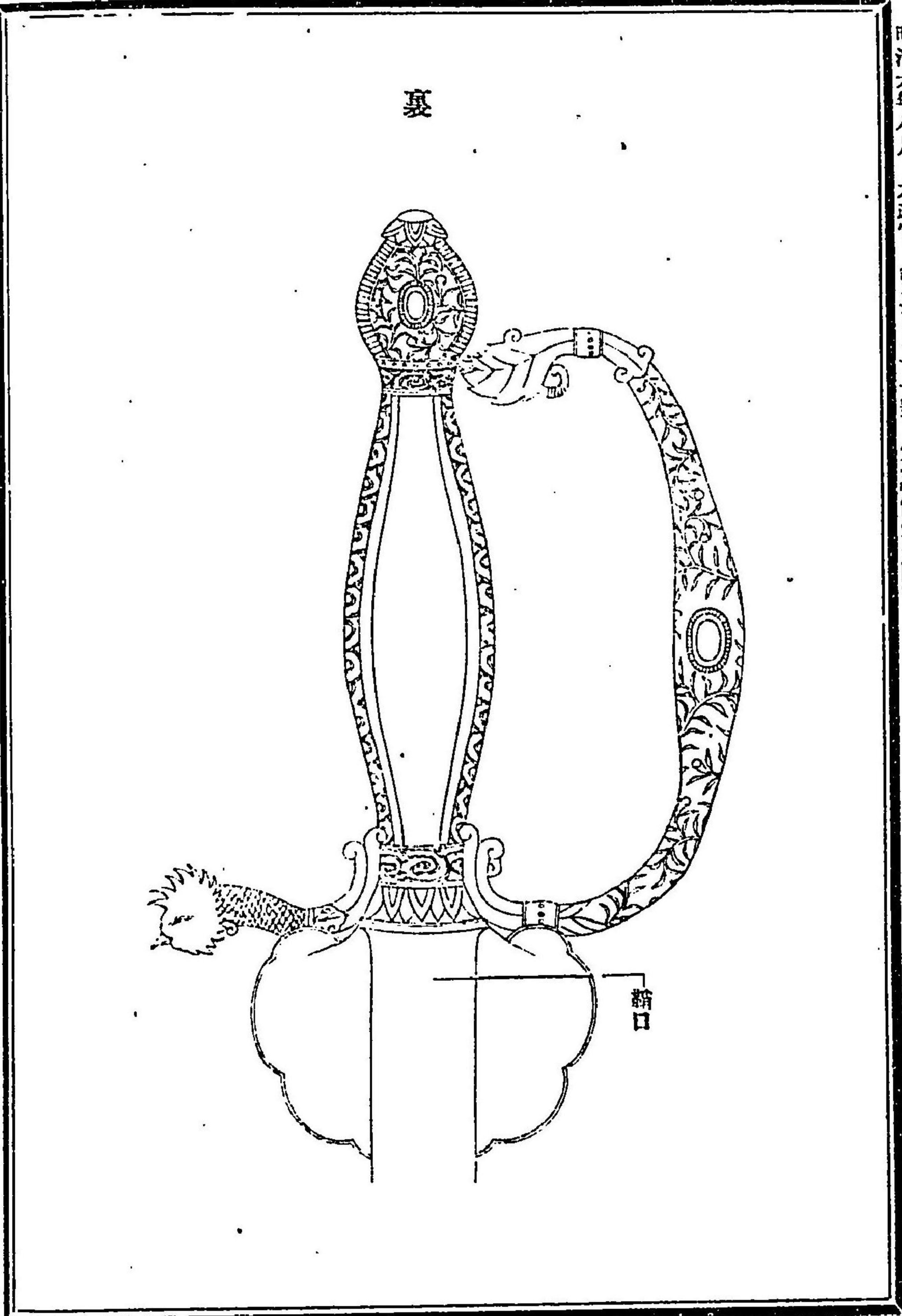
帶取全圖





勅任官

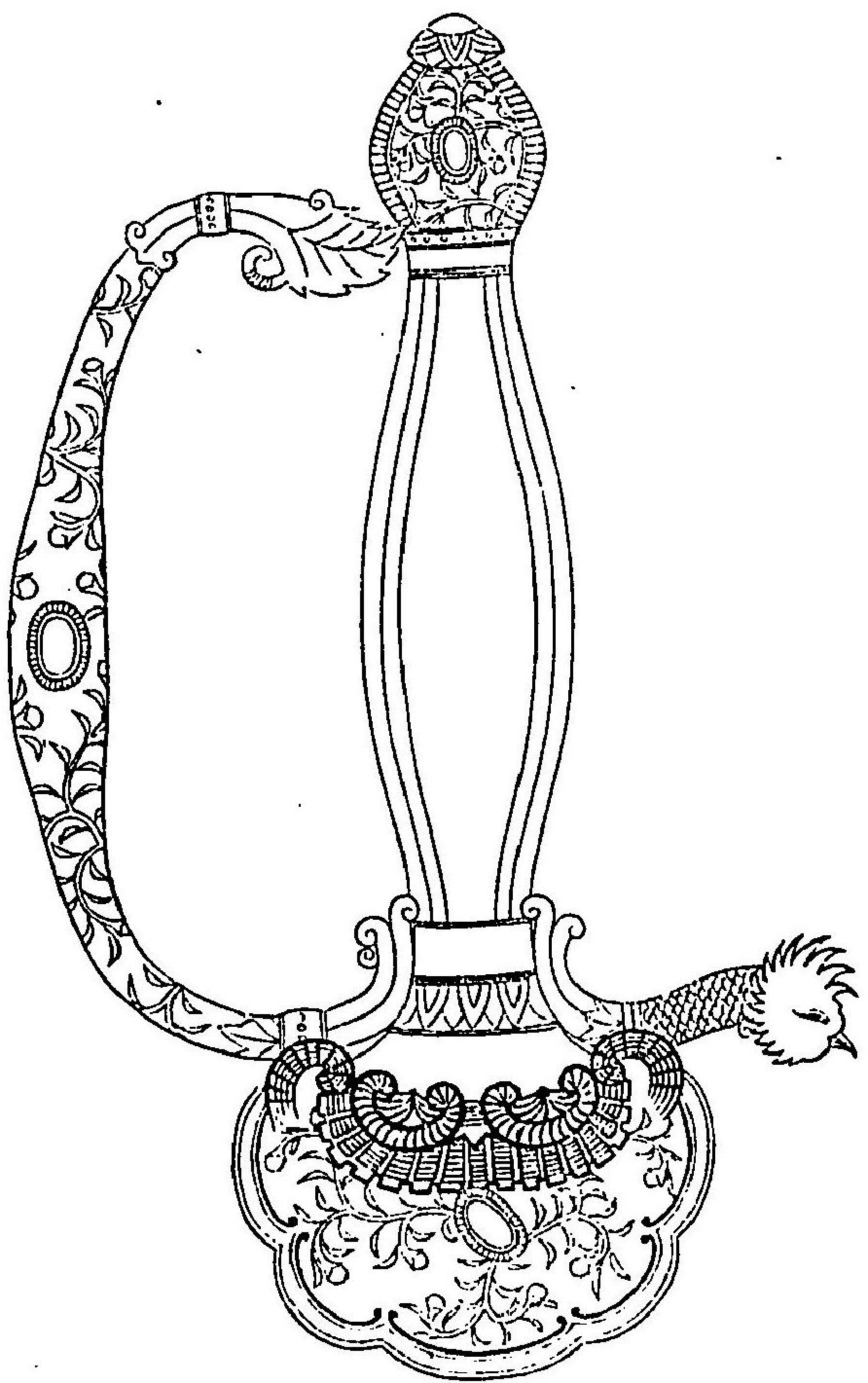




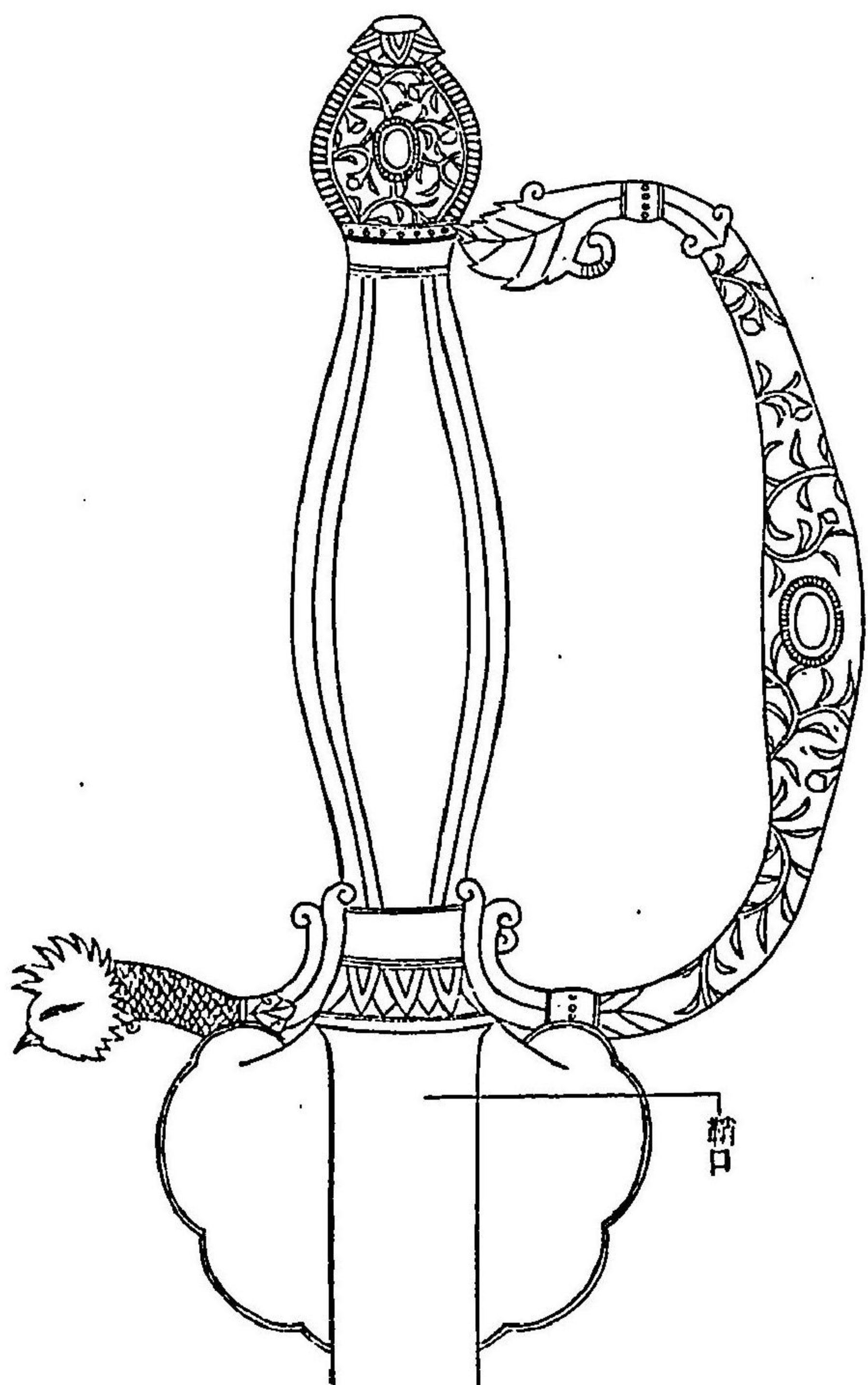
奏任官

柄

表

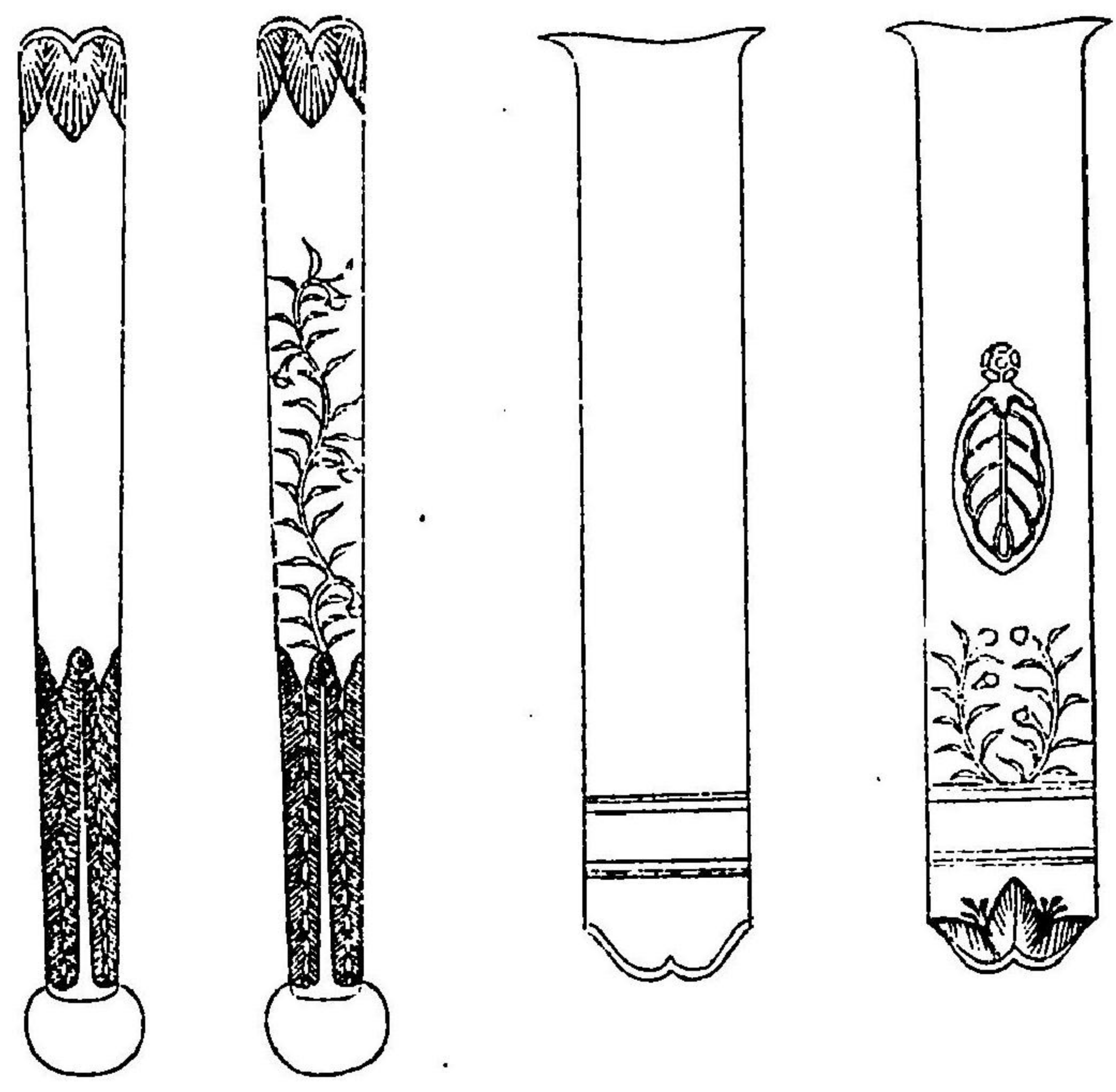


裏



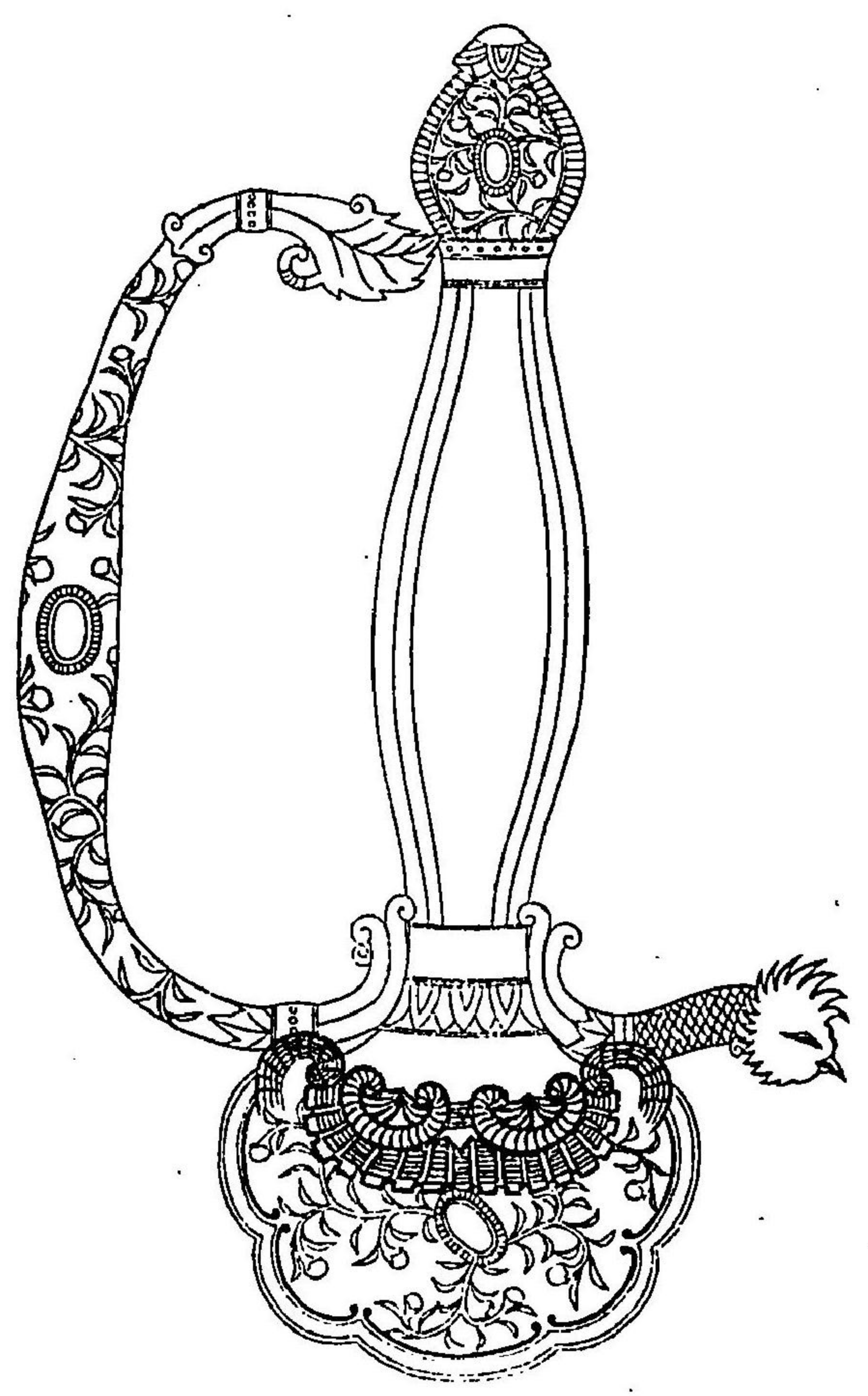
鞘口

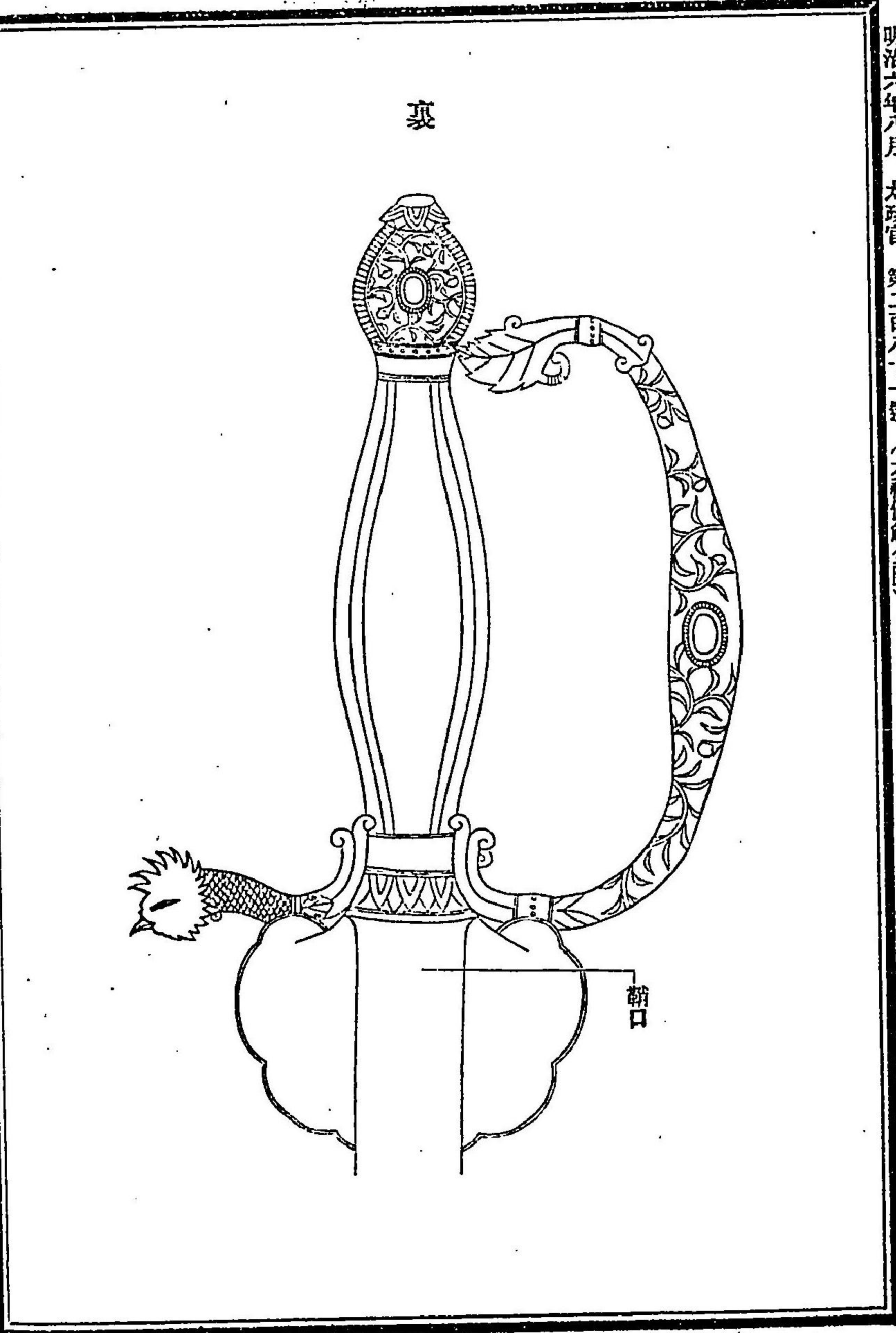
裏 表 裏 表



判任官

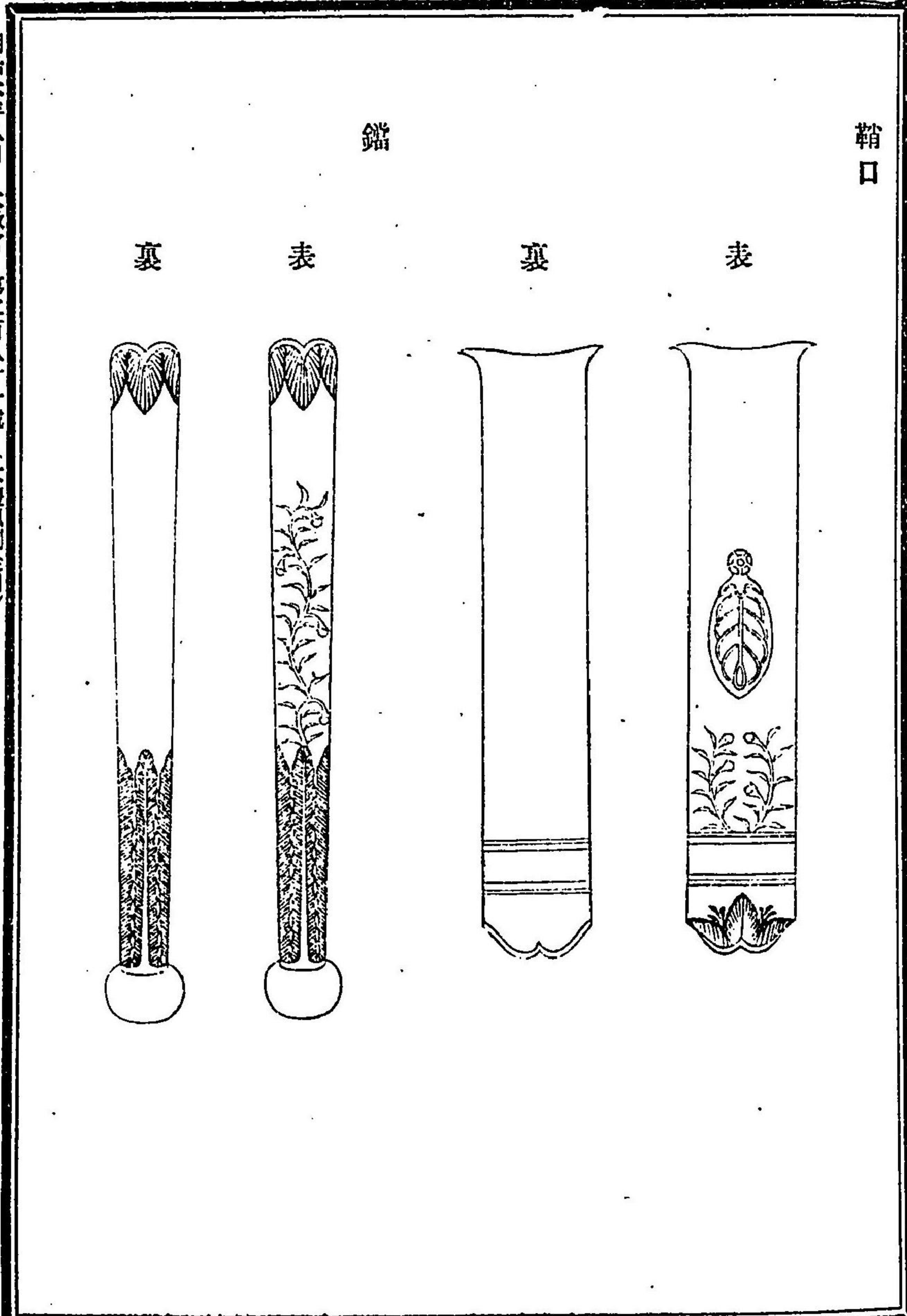
柄 表





裏

鞘口



鞘口

鍔

裏

表

裏

表

九年太政官第百十號達ヲ以テ改定

○第二百八十二號 (八月三日)(布)

戊辰六月布告朝鮮國漂流人取扱規則第二條左ノ通改正候條此旨布告候事

一朝鮮人本邦ノ内所々へ漂着候節ハ薩摩肥前等長崎ニ便宜ノ地方ハ長崎縣廳へ送届佐賀縣下唐津ヨリ東北筑前豐前長門石見出雲等其他諸州へ漂着ノ節ニ其所轄廳便宜ノ海濱ヨリ直ニ對州長崎縣支廳へ遞送可致事

同上

○第二百八十三號 (八月三日)(布)

辛未四月外國船漂着ノ節取扱方布告中朝鮮國ノ船ハ清國同斷ト有之候處元來朝鮮國船ノ儀ハ其製造堅牢ナラス遠海ヲ航行スヘキ具ニアラサレハ左ノ通改正候條此旨布告候事

七年太政官第百三十四號達參看

一朝鮮國ノ船漂着ノ節其船修復ヲ加ヘ候上乘組人ヨリ歸國ノ儀申出候トモ洋中ノ危患不可保ヲ諭シ同國漂流人取扱規則第二條ニ照シ遞送可致且雜費ノ儀ハ當人資財ノ有無ニ關セス都テ其所轄廳ノ公費ニ可立事

但修復ヲ加ヘ候船ヲモ送還スヘキ節ハ必ラス相當ノ元船ヲ用ヒテ之ヲ引カシメ漂人共ハ元船ニ爲乘組可申尤難用立船ハ本人承諾ノ上公札拂ニシ共代價ハ本人ニ附與スヘキ事

○第二百八十四號 (八月三日)(布)

壬申三月第六十七號布告ニ學校略則御詮議ノ次第有之相廢候條此旨布告候事

第三百四十五號參看
十年太政官第百六號達ヲ以テ廢止

○第二百八十五號 (八月四日)(布)

府縣官中正權典事ヲ廢シ官制左之通改正候條此旨布告候事

大屬 八等
權大屬 九等
中屬 十等

權中屬 十一等

少屬以下從前ノ通

十三年十二月九日太政官達參看

○第二百八十六號 (八月四日)(布)

外國人雇入其他各國政府へ關係之事件ニ付公使等へ談判ニ及候儀有之節ハ外務省へ遂協議可取計此旨相達候事

諸省使府縣へ

○第二百八十七號 (八月四日)(布)

府縣判任官以下月給別表ノ通改正候條此旨相達候事

府 縣 へ

(別表)

| 府縣判任官以下月給別表 | | | 府 | | 縣 | |
|--------------|--------------|--------------|-----|-----|-----|-----|
| 等下 | 等中 | 等上 | 大 | 中 | 小 | 外 |
| 五拾七圓四拾四圓三拾四圓 | 六拾三圓四拾七圓三拾七圓 | 七拾四圓五拾四圓四拾四圓 | 八等 | 九等 | 十等 | 十一等 |
| | | | 權大屬 | 權中屬 | 權少屬 | 主掌 |
| | | | | | | 府外 |
| | | | | | | 掌外 |
| | | | | | | 一等 |
| | | | | | | 二等 |
| | | | | | | 三等 |
| | | | | | | 四等 |
| | | | | | | 五等 |
| | | | | | | 六等 |
| | | | | | | 七等 |
| | | | | | | 八等 |
| | | | | | | 九等 |
| | | | | | | 十等 |
| | | | | | | 十一等 |

八月十日達參看
九年第百十三號布告ヲ以テ改定

○第二百八十八號 (八月八日)(布)
海軍武官官等別表ノ通改正候條此旨布告候事

(別表)

學位稱號分テ三等トス

博 士 學 士 得 業 士

○第二百九十七號 (八月十二日(布))

陸軍裁判所中管獄書記ノ兩官廢止候條此旨布告候事

○第二百九十八號 (八月十二日(布))

訴訟律内越訴條廢止候條此旨布告候事

但各裁判所及地方官ノ裁判ニ服セサル事アリテ上告セントスル者ハ司法省布達壬申四十六號

本年廿三號之通可相心得事

○第二百九十九號 (八月十二日(布))

改定律例第二百七十五條左之通改正候條此旨布告候事

第二百七十五條 凡火ヲ失シテ人ヲ燒死ニ致ス者ハ死屍ノ多寡ヲ論セス一等ヲ加フ同居一等

親ノ尊長ヲ燒死ニ致ス者ハ懲役百日ニ等親以下ノ尊長ハ各一等ヲ遞減シ卑幼ハ各等親ニ照シ尊

長ニ三等ヲ減シ滅シテ罪致人燒死律ヨリ輕キ者ハ減セス其各居ニ係ル者ハ等親尊卑ヲ論セス並

ニ致人燒死ト罪同

○第三百號 (八月十三日(布))

各所電信線架設ノ儀追々落成候ニ付通信規則別冊之通相定候條此旨布告候事

(別冊)

大日本政府電信取扱規則

第一 電信ハ瞬間萬里音信ヲ通スル至緊至妙ノ機關ナリ然リト雖也不斷遲延ノ憂ナク誤謬ノ煩ナ

八年第九十三號布
告司法省甲第六號
布達ニ依リ但舊消
滅

十三年第三十六號
布告ヲ以テ改正

十二年工部省第九
號布達ヲ以テ改正

ク全達センコハ請合難シトス何ントナレハ信線器機等不慮ノ損傷ニ逢ヒ或ハ書寫ノ不明ヨリ不
通遲延誤謬等ノ事故アレハナリ是皆止ヲ得サルノ致ス所ニシテ此等ノ爲メ用辨ヲ關キ商業其他
ニ付テ損失ヲ受ケ或ハ其事ヨリ起ル損失アリテ苦情ヲ訴ルト雖也一切政府ニ於テ關係或ハ辨償
セサルヘシ但其用辨ヲ誤ルコ實ニ我政府ノ電信線ヨリ起ルコ明白ナル時ハ其通信料ヲ指戻スヘ
シ然レトモ此事ハ政府ノ信線ニ係ル分ノミニシテ若シ他方ノ線ヲ適用スル時ハ其線ニ係ル分ハ
總テ出狀人ノ損失タルヘシ

第二 通信ノ賃料ハ出狀人ヨリ前拂タルヘシ

第三 音信文ハ母歐時氏萬國電信ノ假字ヲ以傳送ニ用ユヘキ諸邦ノ語若クハ羅匈語ヲ用ユヘシ

第四 出狀人ヨリ頼ミ出タル音信紙ハ句點ヲ除クノ外總テ賃料ヲ拂フヘシ尤音信初發ノ局名及ヒ

年月日時刻附等ハ無賃ニテ居先ノ音信紙ヘ書入レ相渡スヘシ

第五 和文ハ宛名住所ヲ除キ假字二十字迄ヲ一音信ト定メ其餘ハ十字ヲ限リトス之ヲ増ス毎ニ賃

料ヲ加フヘシ十字ニ滿タサルモ又同様ナリ横文ハ宛名住所ヲ加ヘ二十語ヲ定メトシ其餘ハ十字

ヲ限リトス之ヲ増ス毎ニ賃料ヲ加フ十語ニ滿タサルモ又同様ナリ

第六 横文中辭ト雜リタル數字ハ一字ヲ一語ニ充テ通算ス接續シタル數字ハ二字ヨリ五字迄ヲ合

セテ一語ニ充ツ六字以上モ此例ニ準スヘシ

第七 次第番號ノ順次ヲ表スル爲メ字ノ字ヲ數ニ添ル時ハ其一字ヲ數字一字トナシテ算スヘシ

1984 數字五字ニ充テ一
語ノ假ヲ拂フカ如シ

第八 洋人ノ名氏ヲ略シ頭字ノ二字ヲ用ユルハ二字ヲ二語ニ充テ算スヘシ

第九 七綴以下ハ一語トシ七綴以上ハ二語ト見做スヘシ

第十 横文中切要ノ語ヲ表スル爲メニ每字下ニ線ヲ引タル語ハ許多ノ數ト雖也各々二語ト算ス最

モ一文章下ニ一線ヲ以テスル時ハ唯一語ヲ増ス(インウエルテットコムニ)並ララツケツト

第十一 電信ナキ遠方ノ地へ通信ヲ乞者ハ郵便ヲ以テ送達ス仍テ居方便利ノ地方ニ於テ受方ノ局ヲ定メ其局名ヲ宛名ノ下ニ書入スヘシ且ツ其語數丈ノ賃料ヲ拂ヒ外ニ郵便ノ賃料モ加ヘ拂フヘシ

第十二 出狀人返信料ヲ豫シメ拂ヒ置クモ妨ナシトス此時ハ其音信本文ノ終リ即チ出狀人姓名ノ前ニ幾語返信料拂濟ト記載スヘシ但二十語以下ノ答書ヲ得ント欲セハ只返信料拂濟トノミ書入

其語數ノ賃料ヲモ亦拂フコトス

第十三 返信料前拂ノ高ハ出狀人ノ元通信料三倍ノ價ニ越ユヘカラス

第十四 前條ノ返信ハ通例ノ音信ト見做テ取扱フヘシ

第十五 誤謬ノ憂ヲ防ク爲メニ音信ヲ繰返スコヲ得ヘシ此ヲ名ケテ書留電信ト云フ

第十六 書留電信ハ局々ニテ繰返シ誤謬ノ有無ヲ正シ而テ届ケ渡シノ時刻並受取人ノ姓名又ハ不届ノ事實等詳細出狀人へ報知スヘシ

第十七 書留ト云フ語ヲ出狀人姓名ノ直下ニ記載スヘシ且其賃料ヲモ拂フヘシ

第十八 書留電信料ハ通常音信料ノ倍タルヘシ

第十九 音信中解シ難キ語アリテ再ヒ通信ヲ乞フ者アルトキハ假ニ其賃料ヲ收領シ往復ノ上若シ送致セル局ノ過失ニ決セハ其賃料ヲ返スヘシ或ハ送ル者ノ誤ニ出レハ勿論其賃料ヲ返サハルヘシ

第二十 出狀人ハ音信ノ先方ニ届キシヤ或ハ不届キ其事實報告ヲ求メ得ヘシ此類ハ届先名宛ノ直下ニ報知依頼ト記載シ其通信料ヲ拂フヘシ然レモ此カ爲メニ音信ヲ繰リ返スコヲ爲サス

七年工部省第三號
布達ヲ以テ第十八
改正

七年工部省第四號
布達ヲ以テ第二十
改正

第二十一 前條ノ報知ヲ乞フ者ハ更ニ一音信ノ賃料ヲ拂フヘシ

第二十二 官報並ニ私報トモ符徵ヲ以通信スルヲ得ヘシ其符徵ハ數字又ハ羅馬字ヲ用ユヘシ但シ數字ト羅馬字トヲ併用スヘカラス

前文ニヨリ音信ノ本文ハ全ク符徵ヲ以記載スルヲ可トス或ハ其一部分符徵ヲ以テ記スルモ亦妨ケナシトス然レモ其一部分ノミニ用ユル時ハ通用文ト符徵文トヲ區畫スル爲メニ(一)括弧ヲ以テ符徵文ヲ圍ミ置クヘシ是ヲ算スルニ及テハ數字又文字小讀終點其他句讀等一切合加シ之ヲ五

除シ其商ヲ以語數トス若シ分數アレハ亦一語ト見做シ右通用文ノ語數ヲ加ヘ以テ其全文ノ語數トス

第二十三 符徵電信ハ書留電信ト取扱ノ法同一規ニシテ其賃料モ亦同一ナリ

第二十四 一音信ヲ其同都邑中ニ住スル數名へ送達スルコトヲ得ヘシ尤寫シ手數料トシテ横文ハ毎

一通廿五錢和文ハ毎一通七錢ヲ拂フコトス其居賃料ハ定規之通拂フヘシ

第二十五 電信不通ノ節ハ音信ヲ最モ近傍ノ通信無差支局へ郵便ニテ送達スヘシ

第二十六 未タ傳送セサル間ハ出狀ノ音信既拂フノ賃料共取戻スコヲ得ヘシ已ニ傳送中ナレハ其賃料ハ損失タルヘシ

第二十七 音信ノ報知先へ達スルヲ留メント欲セハ新ニ賃料ヲ拂ヒ其趣キヲ末局へ申送ルヘシ

第二十八 音信ノ送達ニ付不規則アルヲ出狀人ヨリ歎訴スルハ當然ナレトモ其延引誤謬等ヲ申立

ル時ハ必ス受取人ノ所持スル電信報ノ寫ヲ添テ引合フコトス

第二十九 宛名住所等認方ノ違謬ニヨリテ其音信ノ届先ニ達セサルハ本人ノ過チナレハ其誤謬ヲ

改ント欲セハ更ニ其賃料ヲ拂フヘシ故ニ其名宛ハ充分ニアリタキ事ニテ何府何區何番何某或ハ

其職業會社ノ名號等マテ詳細ニ記スレハ其電信ノ速カニ届キ誤ナク達スルニハ肝要ノコナリ